

大野桂月著

古今史談

東京 公文書院發兌

44.4.1

94-722

目次

日本武尊と北白河宮殿下	一
弓削道辨	四
藤原時平	七
平清盛	三
源頼朝	一〇
鎌倉時代の三名僧	九〇
貞永式目と北條泰時	九三
南山の竹園	九六

(三)

足利尊氏……………三二

古城と戦國武士……………一四

高杉晋作……………一六三

鳥羽伏見の戦……………一九三

會津落城……………一九八

明治の武勳……………二二三

目次終

古今史談

文學士大町桂月著

日本武尊と北白河宮殿下

われ會て房州に遊びかへるさ路を鹿野山に取りて、鬼涙山を過ぐ。土人説くならく、むかし、日本武尊こゝに血戦して、大に醜虜をやぶりたまひしほどに、醜虜出づる所を知らず、血涙を墮して號哭せしを以て、この名ありと。鹿野山に至るや、先づその最高峰を攀ぢて大鳥神社に詣づ。云ふこれ日本武尊を祭り奉る所なりと。石礎數百級、老杉天を刺し、古菴蕭森たり。杖底十有餘州の地は、これ會て尊の經營したまひし所、山海蒼々として、昔に異ならず。而して、茫々千年、風雲むなし愁ふ。當年の御偉績を仰ぎまつりて、覺えず涙下る。

古今史談

日本武尊と北白河宮殿下

(一)

嗚呼百戰夷類を平げて、歸路、碓氷山頭より遙に東方をのぞみて、吾妻はやとなげかせたまひし御心の中や如何なりけむ。いたまじきかな、深山の毒氣玉體を侵して、二豎百年の御命を縮め、未だ華洛に凱旋したまふに及ばず、むなしく能褒野の露と消えたまふ。げにはかなき御最期なりけり。我が國の兵權は古來天皇の親らすべさせたまへる所にして、親征することを得たまはざるときは、皇后、もしくは皇子、皇族、之に代らせたまひて、絶えて之を臣下に委ねたまふことなく、雲井に高き天孫の御身の、御戈を枕に、野外の月に臥せさせ、矢石の危を冒して、千軍萬馬の間に、馳驅せさせたまひ、皇威いよく揚り、國礎とこしなへに動かす。かく祖宗の天下の爲につくさせたまふ聖慮の御あと、仰ぎまつるも、いとたふとしや。而して、兵權下にうつり、皇室、天下と痛痒相關せざるに及びて、皇室はやうく衰へゆきぬ。

日本武尊の凱旋の途にみまかりたまひしは、まことに萬古の遺憾にして、いたまじき御事のかぎりなり。されど、上、皇祖に對し、下、國家に對してつくさせたまひし御功績は、天地と共につきず。尊は實に社稷の爲に、尊しとも尊き御身をなげうちて、顧みたまはざりけり。

今上皇帝陛下、神文神武、夙に王政を古にかへし、親ら天下兵馬の權をすべさせたまひ、御稜威八紘の外にかゞやき、國運の隆昌なること、振古未だ曾て見ざる所なり。こたび討清の御軍に、大義を廣島にすゝめたまひ、むかしのみかどの遺風をつがせたまひて、宵衣吁食も怠ならず、聖慮を勞したまふほどに、萬民みな仰ぎまつりて、感泣の涙に咽ばざるものなく、軍氣爲に振ひ、海に、陸に向ふ所敵なく、遂に清國をして膽落ち、氣沮して、和を請はしむるにいたりぬ。あはれ、神ながらの御國の姿、たゞに王政の古にかへりしのみにはあらざりけり。

皇族の御身にして、君のみことをかしこみて、萬里遠く軍にいてたゞせたまひし御方の、多かるが中に、故近衛師團總督、北白河宮殿下は、親ら近衛兵を率ゐて、一舉直に敵國の巢窟を衝かむとしままひしに、たましく和成りて果さず。轉じて臺灣の蠻土に向ひ、熾熱惡瘴を冒して、矢石の間に經營したまひ、遂に悉く蠻民を化したまひぬ。圖らざりき、今日また日本武尊を見奉らむとは。尊はむかし東夷を平げたまひ、殿下はいま西蠻を平げたまふ。西と東とは處は異なれど、その社稷につくさせたまへる御志と、御いさをしとは、絶えて古今のけぢめはあらず。ことに殿下も凱旋

したまふに及ばて、南蠻の毒霧に中りて、みまかりたまひしことさへ、尊の昔に似させたまひしこそ、いたましき御事のかぎりなれ。

古來みかどをはじめまつり、皇族に坐せる御身の、社稷の爲に軍にいてたゞせたまひて、御稜威のいよ／＼かじやき、國礎のます／＼葦き所以を思ひまつるだに、感涙をとどめもあへぬに、世に尊き神の神胤の、身を以て社稷に酬いたまひし古の御跡を、いま、まのあたり仰ぎまつりて、われら草莽の臣民、實に身を措かむ所を知らず。

弓削道鏡

奈良朝七代七十四年は、我が國の文化の始めて花をひらきたる時なり。唐制を模倣し終りたる時なり。佛教はじめて我が國のものとなりて、神佛混同したる時なり。否、佛教と政治と混同したる時なり。歴史、風土記のはじめて出來たる時なり。和歌の大成したる時なり。印度、支那、朝鮮、蒙古、希臘など、世界の文化を具體的に移植したる時なり。その遺跡は、千餘年の今日に至るまで

も、なほ奈良に残れり。大佛は、今に世界の最大美術品なり。一言すれば、太平の世なり。

されど、全く太平無事なりしにはあらず。前數代の治をうけて、國富み、從つて、上驕り、從つて、大伽藍、大佛像も出來たれど、その代り、國力衰耗せり。人民怨望せり。諸國に盜起れり。海賊もこの時はじめて起れり。世の中が物騒なり。衛府の外、健兒起れり。朝臣に隨身兵仗を賜ふに至れり。元正天皇の朝に、大隅の隼人、國司を殺し、陸奥の蝦夷、按察使を殺して亂をなせり。大伴旅人、往いて前者を平らげ、多治比縣守、後者をうてり。聖武天皇の朝に、海道タビトの蝦夷ウマカヒ叛き、藤原宇合ウマカヒ伐つて之を平らげたり。かく國內に向つては、兵力を以て威歴したれど、惜しむらくは、之を外に加ふること能はざりき。新羅の如きは、我を侮りて、また朝貢せず。孝謙天皇の世、船三百九十四隻、兵四萬、水手一萬七千人を點して、將に新羅を伐たむと、氣張ることは氣張カシがしが、實行せずして止み、新羅ます／＼我を馬鹿にして、朝鮮の地、全く我と離るゝに至れり。

外國と邊境とのみならず、近く朝廷の事に關しても、干戈しば／＼動けり。長屋王や、和氣王や橘奈良麿や、藤原良嗣や、前後兵を起すに至らずして敗れ、藤原廣嗣、前に兵を動かして敗れ、藤

原仲麿、後に兵を動かして敗れぬ。これ等の原因は、一、皇位の争なり、むしろ皇族と藤原氏との争なり。二、藤原氏同士の軋轢なり。三、藤原氏と僧族との争なり。かく皇族と藤原氏と争ひ、藤原氏と藤原氏と争ひ、藤原氏と僧族と争ひたるが、その中にて最も甚しかりしものを、藤原氏と僧族との争となす。

藤原氏の如き大族が、血眼になりて僧族と相争ひしは、一見甚だ奇なるが如くなれども、佛教中心の世の中、僧族中の姦雄が、常に宗教上のみならず、政治上にも手腕を伸ばすに至りては、事自ら茲に出てざるを得ざりしなり。げに、奈良朝は、我が國佛教の全盛時代中の全盛時代なり。聖武天皇を中心として、佛教を尊奉し給ひしこと、前後その比を見ず。藤原氏も、不比等は、興福寺の金堂を建て、武智麿は、榮山寺を建て、いたく佛教を尊奉せり。迷信の深きは、男子よりもむしろ女子を甚しとす。不比等の妻、三千代は、後宮に出入して大に勢力あり。その娘、宮子は、文武天皇の妃となりて、聖武天皇を生めり。宮子の妹、光明子は、叔母甥の關係にして、聖武天皇の皇后となり、女孝謙天皇を生めり。宮子、光明子、孝謙天皇、みな佛教を好める藤原氏の出にして、迷

信此上もなきに、聖武天皇とても、佛教を好み給ひければ、我が國の佛教は、茲に空前の盛觀を呈するに至れり。奈良朝佛教の鎮と稱せられたる鑑眞は、常に當時我が國に其比を見ざる名僧なるのみならず、支那にありてもたぐひ稀なる名僧なり。聖武天皇は、實に皇后、太子、百官を率ゐて、佛前に北面して、この鑑眞に戒を受けて、佛弟子となり、沙彌勝滿と改名し、三寶の奴と稱し給へり。嗚呼萬衆の尊、自ら屈して一旅僧の佛弟子となり給ふ。鑑眞の得意想ふべきなり。鑑眞が自國にありても、第一流の名僧なるに、萬里の風波を凌ぎ、萬死を冒して一孤島に來りたるも、かゝることを豫想したればなり。鑑眞、日本の僧、榮叡、普照の乞ひに應じて、門弟に告げて、日本は、佛法興隆有縁の地なり。衆中誰か遠請に應じて行くものぞと云ひけるに、衆驚いて、答ふるものなし。終に祥彦といふもの曰く、海荒く、路遠し。無事に着しうるもの、百、一を期せず。今、我が徒、進修道果未だ備はらざるに、難受の身を以て、難生の中國を離るゝは、心中忍びざる所なりと鑑眞慨然として、さらば、我れ自ら往かむと言ひ放てり。健氣なるかな。時に年五十六。されど、海賊の爲に渡海する能はず、且つ船を官没せられたり。されど、一旦思ひたちたる決心は、續すべ

くもあらず。渡海を企て、は妨害せらるゝこと、前後すべて六回、十年の久しきにわたれり。その間、徒弟或は死し、或は散じ、日本の僧、榮叡は死し、普照は詔州に去れり。されど、鑑真なほ斷念せず。思ひたつてより十一年目、年六十六歳にして、はじめて漸く志を遂げて、日本に來れり。これ鑑真が非常の人物にして、道を傳ふるに熱心なるに由るは、言ふまでもなけれど、また日本の朝廷が崇佛此上もなきことを聞き知りたればなり。而して崇佛の中心となれるは、聖武天皇の皇后光明皇后なり。帝に崇佛の中心たるのみならず、また藤原氏と僧族との争の中心ともなりぬ。藤原氏は鎌足以來の功勞によりて、その女を後宮に入れて、ますます勢力を扶植し、その女は佛を崇びて、僧族の権力を増し、僧族の権力増すに従ひて、藤原氏と抗するに至れり。福の倚る所は、禍の伏する所、人事の變遷、また奇なるかな。

奈良朝の歴史上、まづ人の注目を惹くは、藤原氏の一族の朝廷に蔓延したると、佛教勃興して僧族の権力の盛になりたるとの二事なり。奈良朝に於ける大なる出來事が、この二者の衝突にあるべきことも、また自然の數なり。二者の發展も其時を同じうし、兼ねて其揆を一にせるは、ますます

奇なりといふべし。藤原不比等と僧正義淵とは、幾んどその時を同じうせり。且つ義淵が僧族に於ける地位と、不比等が藤原氏に於ける地位とも、ほゞ相同じ。不比等は、持統、文武、元明、元正の際に於ける政治上の大立物なり。義淵も、この際、佛教上の大立物にして、兩々相對立す。不比等の子に、武智麿、房前、宇合、麻呂あり。共に皆要路に當り、武智麿の子に、豐成、仲麿、房前の子に、永手、魚名、宇合の子に、廣嗣、良嗣、清成、百川、藏下麿、麻呂の子に清成ありて、朝廷の上に蔓延せり。義淵の門下に、玄昉、行基、宣教、良敏、行達、隆尊、良辨あり。之を七上足と稱す。みな絶代の名僧なり。なほ、定昭、道慈、道場、道鏡ありて、歩武を七上足に接す。玄昉の門下に善珠出でたり。玄昉と良敏とより、慈訓出でたり。宣教の門に、賢環、玄衞出でたり。義淵の流を汲みて、佛教界に人才の輩出したりしこと、藤原氏に比して、遙にまされり。義淵は、法相宗を奉じたるが、良辨はその門を出て、華嚴宗を傳へたり。奈良朝以前には、三論、成實、法相、俱舍の四宗あり。その中にて、成實は三論に附隨し、俱舍は法相に附隨したれば、實は二宗のみなりしが、かの唐の名僧鑑真は、戒律宗を傳へたり。良辨は華嚴宗を傳へたり。新に奈良朝に起

れる宗旨は、律と華嚴となり。義淵は學者肌にして、行基、玄昉の如き事業なけれども、佛教の學者としては、奈良朝の第一流なり。行基と玄昉とは、共に事業家なるも、玄昉は貴族的にして、行基は平民的なり。玄昉は政治上の野心ありたるが爲に、一時は成功したれど、終に失敗せり。行基は政治上の野心なきが爲に成功せり。行基は大僧正となれり。これ前に例なき所、かねて、後、二百餘年間は、その類を絶てり。道鏡は、玄昉の後に出て、僧としての才量力量も人にすぐれたる上に、政治家としての技倆も、卓絶せり。藤原氏に對して政治上に覇を争ひたるは、玄昉と道鏡との二人なり。

不比等は、大化の元勳、鎌足の子なり。後宮に勢力ありし三千代の夫なり。文武天皇の舅なり。聖武天皇の外祖父なり。その人となり、貞亮にして、律令に通じ、治體に明に、優に宰相の器ありて、大寶令を完成し、女主幼帝を輔佐して、奈良朝初期の治をいたせり。これよりさき、太政大臣となりたるもの、大友皇子、高市皇子の二人ありしのみ。不比等は、實際に於て、太政大臣としての技倆あり。又太政大臣としての事業を成したりしが、右大臣に終れり。元正天皇の養老二年に、

太政大臣に任ぜむとし給ひたれど、臣下にその例なしとて辭退したりき。名をすて、實を取る。賢なるかな。かくて、養老四年、即ち聖武天皇の即位よりは四年前に死せり。平安朝に於ける藤原氏が權力の絶頂點なる攝政、關白、外戚の實は、鎌足よりの二代目、不比等、既に之を擧げたるなり。義淵は、七八年おかれて、聖武天皇の神龜五年に死したり。先づ不比等と時代を同じうしたるが、學者肌にして、佛教界にこそ重きをなしたれ、政治上の野心はなかりしかば、二者は衝突すべくもあらず。不比等は啻に僧族と衝突せざりしのみならず、智徳兼備したれば、女主を輔けたるも人に疑はれず、その二人の娘を妃となし、更に進んで皇后となしたるも、世に怪しまれざりしなり。不比等の子は、武智麿、房前、宇合、麻呂にて、みな賢なり。されど不比等の死したりし時は、その官、なほ參議以下なり、朝廷の首班には、舍人親王、新田部親王あり。長屋王、大納言にしてその次に位せり。太政大臣たりし高市皇子の子にして、政治の手腕あり。聖武天皇即位し給ひし時には、舍人親王、知太政官事にして、長屋王は左大臣なり。年四十一。武智麿は之に四五歳長ぜり。長屋王ありては、藤原氏の頭はあがらざるなり。舍人、新田部の二親王は、もと大臣の器にあらず

長屋王は優に政治家の技倆ありたれど、惜しむらくは、後宮に味方なかりき。歴史の裏面には、多く婦人あり。政治史を説くものは、表面の朝廷と共に、裏面の後宮をも察せざるべからず。奈良朝七代は元明、元正、聖武、孝謙、淳仁、稱徳（孝謙の重祚）、光仁の七天皇となす。文武天皇は二十歳にて崩じ給ひて、皇太子（聖武天皇）は七歳なり。その長を待つ間に、元明元正の二女帝立ち給へり。元明天皇は、天智天皇の御女にして、女帝持統天皇の御妹なり。次の元正天皇は、天武天皇の御孫娘にして、文武天皇の御姉なり。聖武天皇、御年二十四にて立ち給へり。御母は、不比等の如なり。皇后も、不比等の娘なり。天皇に皇太子なく、内親王立ち給へり。孝謙天皇これなり。この時は、後宮、朝廷、合して一となれり。淳仁天皇次いで立ち給ひしが、孝謙上皇の後宮非常なる勢力あり。次いで孝謙天皇重祚し給ひて、以て光仁天皇に至れり。かく奈良朝には女主多く、たま／＼男主あるも、後宮の勢力常に盛なり。聖武天皇の佛教上の事業の如きは、之を光明皇后の事業なりと云ひても可なり。危いかな。長屋王は政治の舞臺にては優者なれども、後宮に援助なし。之に反して、藤原氏の四子は政治上の勢力は遂に長屋王に下りたれど、その二叔母の一は、皇太夫

人なり。一は皇后なり。藤原氏は、この後宮の力をかりて、長屋王を讒してこれを殺し、以て有力なる競争者を除けり。實に天平元年にして、聖武天皇の即位より四年目なり。かくて、藤原氏は漸く羽翼をのばせり。四五年の後、舍人親王知太政官事たることもとの如くなれども、これ無能力にして有るもなほ無きが如し。武智麿は、右大臣となり、房前、宇合、麻呂は、參議となりぬ。然るに、長屋王死してより八年目、即ち天平九年に、痘瘡流行せり。あはれや、藤原氏は苦心して強敵を倒して、これより大に朝廷の上に飛躍せむとせしが、種痘術の發見せられざりし世の事とて、この思ひもかけぬ敵に襲はれて、しかも、同じ年に、武智麿、房前、宇合、麻呂の四人の兄弟が、揃ひも揃うて、ばた／＼と將棊倒しに倒れて、藤原氏の勢力また一頓せり。

藤原氏の有力者、一時に倒れて、代りて朝廷の首班に列したるものを、橘諸兄モロエとなす。諸兄は何等の力量もなき人なるが、いはゆる後宮の援助によりて、こゝに至りたるなり。諸兄は、實に不比等の妻、三千代が、藤原氏に嫁せざりし前に、生みたる子なり。王族なれど、橘姓を賜はりて、その祖となれり。後世、源、平、藤、橘を稱して、我が國の四大姓と稱す。諸兄は、三千代が先夫の子な

れば、武智麿等とは、義理上の兄弟なり。皇太夫人、皇后とは、同母兄妹なり。この縁故によりて無能力なる諸兄は、藤原氏の人なきに乗じて、僥倖にも、大臣となりたるなり。聖武天皇は、叔母を皇后とし給ひ、諸兄は、同母妹の多比能を妻とせり。敗倫も亦甚しといふべし。諸兄、天平八年には、年五十三にして、參議兼左大辨なりしに、翌九年には、一躍して大納言となり、その翌十年には、右大臣となれり。さは云へ、これ一時の事なり。武智麿等四人には、子多し。豈に頭をもたげずして止まむや。武智麿に、豊成、仲麿あり。之を南家と稱す。房前に、鳥養、永手、眞楯、魚名、楓麿あり。之を北家と稱す。宇合に、廣嗣、良嗣、百川、藏下麿あり。之を式家と稱す。麻呂に、濱成あり。之を京家と稱す。京家は、勢微なり。北家は、平安朝以後、大に榮えたれど、奈良朝にありては、おとなしかりき。大に活動したりしは、南家と式家となり。藤原氏同士相争ひたるも、この二家なり。されど、武智麿等が將基倒しになりし時には、諸家の遺孤、朝廷に權力を得ること能はざりき。

この際、僧玄昉、吉備眞備の二人、支那より歸り來れり。眞備は、奈良朝の前後、その比を見ざる博學宏才の學者なり。玄昉は、奈良朝に卓絶せる名僧の一人なり。眞備は、學才の外に、多少の世才ありて、學教上、政治上、施設したる所多けれども、氣骨ある男子にあらず。のちに大臣に上りたれど、有力なる政治家にはあらず。玄昉は、僧としても、才物なり。政治家としても、手腕ある人なり。この二秀才、時を同じうして歸り來りしが、支那崇拜、佛教尊崇の世の事とて、二人は大に世にもてはやされたり。玄昉は天平七年に歸朝せしが、翌八年には、封百戶、田十町、扶翼童子八人を賜はり、其翌九年には、僧正となり、紫袈裟を賜はれり。賜紫の恩典は、實に玄昉よりは生まれり。この時、義淵は既に死し、鑑眞は未だ來らず。行基は野にもてはやされて、朝には未だあらはれず。碩學なる上に、入唐の滔つきたる玄昉は、當時獨り佛教界の明星たるの觀あり。内道場に入りて、いたく皇室の寵幸をうけたり。皇太夫人、即ち聖武天皇の御母は、氣鬱病にかゝりて聖武天皇を生み給ひてのち、未だ一同も相見え給はざりしが、玄昉その病に看待するに及びて、數十年の病、うその如く平癒し、こゝにはじめて、天皇と相見え給へり。皇室の玄昉を徳とし給ふこと、一方ならず、皇太夫人は、喜んで玄昉を近づけ給へり。史に、醜聲外に洩ると稱す。冤罪なり

と辨ずるものあり。かゝることは、證跡を捉ふること難し。證跡なしとて、無罪とすべからず。噂ありたればとて、有罪と斷ずべからず。暫く不問に付して可なり。玄昉は、政治上の要路には立たざりしと雖も、既に後宮の信任を得たり。而して奈良朝にありては、後宮の勢力殊に大なりしかば玄昉はその餘威をかりて、佛教上大に施設する所ありたるは、言ふまでもなけれど、また大に政治上にも、手を伸ばしたるなるべし。朝廷の百官もとより快く思ふべくもあらず。況んや藤原氏の諸孤をや。ひとり吉備眞備は、支那留學以來のよしみを以て、之と親しかりき。眞備は、右衛門督、從五位下に過ぎざりしかど、學問は、當時第一なり。學才のみならず、世才もありたれば、政治上にも、支那道をふりまはして、生意氣なる事言ひしなるべし。時に藤原宇合の長子なる廣嗣、式部少輔從五位下なりしが、文にも武にもすぐれたる豪傑なり。才氣あると共に、野心もありたる人なり。お人好しの諸兄の上にあるは、何とも思はざるべけれども、玄昉、眞備二人が、當時のハイカラなりしことが癢に障らざるを得ざりしなるべし。その太宰少貳に貶せられしは、衝突の結果、失敗したるに由ること、其主なる原因なりしこと疑ふべくもあらず。終に二人を除くを名として、兵

をあげしが、一敗地に塗れぬ。廣嗣の妻は、美人なり。玄昉之を挑む。妻肯んぜずして、其事を廣嗣に言ひやりしことは、或は事實なるべし。されど、廣嗣はこれのみにて兵をあぐるが如き甚助にあらず。要するに、これ藤原氏と僧族との第一回の衝突なり。玄昉の不品行は、不問に付するも、寵を好み、才を待みて、專横の所爲多かりしことは、想像するに餘りあるべく、惜しむべし、名僧碩學、宏才一世に卓越したれど、徳器足らずして、末路をあやまれり。玄昉を快く思はざしもの、廣嗣のみならずざりしと見え、廣嗣の死後數年にして、觀世音寺造營の監督を名として、太宰府に追ひやられしが、廣嗣の遺黨の爲に殺されたり。眞備も、一時玄昉と同じく貶謫せられしが、後、ゆるされたり。

孝謙天皇の即位し給ひし時には、藤原氏また朝廷の上班に列せり。諸兄は左大臣なれども、武智麿の長子豊成、之と並びて右大臣たり。その弟仲麿、之に次ぎて大納言たり。諸兄は云ふに足らざれども、その子奈良麿、この際、參議たり。才氣ありて、藤原氏を敵視す。藤原氏も黙つては居れざるなり。仲麿はまた兄豊成の下に立つを屑しとせず。機を見て之に代らむとす。知らず、風雲如

何にか變ずべき。

仲磨は、敏慧にして、學問もよく出來たる人なり。彼は後宮を手に入るゝことが、政治上の權力を得るの捷徑なることを知れり。而して彼が才子肌の人物は、婦女子の氣に入るに適す。かくて、彼は光明皇后と孝謙女帝とのお氣に入りとなりて、隠然天下の權を握らんとす。道祖王、皇太子たりしが、聖武上皇崩じて、その喪中、不品行の事あり。仲磨、得たりかしこしとて、さまざまに之を後宮に讒す。太子自ら安んぜんとして、太子を辭せり。是に於て繼嗣の事に關して、諸臣の間に、議論おこれり。誰にても、太子を立てたるものは、權力自ら其人に歸すべければ、立太子は、自家の權力問題としても、容易ならぬことなり。橘奈良磨は、長屋王の子、黄文王を立つるが、年來の宿志なり。豊成、永手は、鹽燒王を立てむとし、大伴古磨は、池田王を立てむとす。仲磨は、かねてより意を大炊王に屬し、亡兒の寡婦をこれに嫁せり。仲磨の意志は、やがて後宮の意志となり、大炊王起つて、太子となれり。仲磨の得意、果して如何なりしぞや。左大臣には、諸兄あり、右大臣には、豊成ありて、路をふさぎたるが、仲磨は紫微内相となり、大臣に準じ、後宮の事を統べ、あはせて兵事を總督せり。

橘奈良磨、終に黙する能はず、大伴古磨、小野東人等と共に、黄文王を奉じて事をあげむとせしが、謀漏れて、或は殺され、或は流されて、橘氏の勢、一頓せり。諸兄も、爲に信用を失へり。豊成の子も、謀にあづかりしとて豊成は大宰員外郎に貶せられたり。今や朝廷また仲磨に肩を比するものなし。その擁立したる太子は、讓を受けて即位し給ひぬ。之を淳仁天皇となす。仲磨の勢は朝日の天に冲するが如きなり。

支那ずきの仲磨は、太政大臣を大師、左大臣を大傳、右大臣を大保、大納言を御史大夫と改むるなど、官名までも支那風にし、自ら大保となりしが、やがて大師となりぬ。大師は、即ち太政大臣なり。これ實に藤原氏未曾有のことなるのみならず、臣下にして太政大臣となりしは、之を以てはじめとなす。仲磨は、小才子なり、大臣の器にあらず。而して能く之に至りしは、實に奈良朝の大勢力たる後宮を手に入れたればなり。

仲磨は、エミンオシカツ惠美押勝と改名したるが、その惠美といふは、孝謙天皇、仲磨の朝するを見れば、必ず

笑み給ひしに由れりといふ説あり。孝謙天皇いたく彼を寵愛し、しばしその邸に行幸し、終に之を別宮となし給へり。孝謙天皇と押勝とは、單に純潔なる君臣の關係にとゞまりしや否やは疑問なり。道鏡の孝謙天皇に於けるが如く、暴露せる痕跡なけれども、そは、押勝は豪放なる偉人にあらざして、小心翼翼たりしが故に、巧につゝみ隠しゝに由るものにて、而して之に反して、道鏡は豪膽無頓着なりしかば、直に暴露したるものなるかも知るべからず。かゝることを、千年後の今日にありて詮索するは、愚な話なり。細かく立ち入りて詮索せずとも、押勝と道鏡との争は、孝謙上皇の寵愛の争なり。まづ、之を鞘當と云ひても可なるべし。

押勝がまづ後宮に取り入り、太子を擁立して自家の地歩をかため、橘氏を斥け、兄の豊成を排して、天下の權を握るに至るまでの手段は、巧慧なるかな。押勝、天皇に取りては大恩人なり。孝謙上皇には、無二の寵臣なり。押勝の地位は、また動かすべからず。廣嗣の弟良嗣、憤慨して、之を除かむとしたるも、空しく失敗に歸したりき。押勝の如き進路を取り來れば、天下に恨まるゝは、當然の事なり。同族にまでも恨まれて、孤立するも、また當然の事なり。如何に怨敵あるも、押勝

にして、上皇と天皇とを擁する間は、枕を高うして眠るを得べきなり。

然るに豈に圖らむや、上皇に〇〇〇〇、押勝と同じ進路を取りて、後宮を手に入れて、競争を試むるものあらはれむとは。誰ぞや、道鏡、これなり。押勝が天子を擁立して、少し油断して、以前の如く上皇の御機嫌を取らざりしにもよるべけれど、地位を得るに敏なるものは、地位を失ふにもろし。うまくと上皇を道鏡に取られしは、間拔けの骨頂と云はざるべからず。

史家、道鏡を皇族なりとするものあり。皇胤紹運録、七大寺年表、僧綱補任等の書には、道鏡を天智天皇の皇子、施基親王の子とあるを以て、證となす。反對の説を唱ふるものは、續日本記、天平寶字八年九月の宣命に、『この禪師の晝夜朝廷を護り仕へ奉るを見るに、先祖の大臣として仕へ奉りし位名を繼がむと念ひてある人なりと云ひて退け給へと申す』の語あるを以て、證となす。余は後者を取る者なり。道鏡もし天智天皇の孫ならば、先祖の大臣の語あるべき筈なし。先祖の大臣とは、物部氏の後胤なれば、大連の事をさすなり。又道鏡が皇孫ならば、わざと神託を聞くをも要すまじきなり。清麿が神託を傳へて、『天つ日嗣は必ず皇緒を立つ。無道の人宜しく早く掃除すべ

し』といふ筈もなきなり。道鏡は皇孫にあらず。されど物部氏の子孫にして、まんざら、何處の馬の骨ともわからぬものにはあらず。

道鏡は、河内の人にして、僧正義洲の門弟なり。少くして僧となり、禪行を以て聞え、内道場に入れり。如意輪法宿曜法を修めて驗あり。孝謙上皇いたく寵愛し給へり。寵愛し給ふの餘、その間よからぬ品行ありしことは、歴史上また掩ふべからざる事實なり。孝謙上皇の御母光明皇后は、絶世の美人におはせり。上皇も其血をうけて美しくおはせしなるべし。この際、年既に四十を越え給ひたれど、子を生み給ひたることもなければ、みづぐくして、花の姿、未だ全く衰褪せざりしなるべし。而して曾て常に笑みて迎へ給ひし押勝は、今や已に六十に近き老人なり。目につきし人も慣れては鼻につくは、自然の人情、殊に足も遠くなりて、遠ざかるもの、旧に疎しのたとへにもれず人目なき保良の宮の別天地、常に左右に侍せる道鏡が法師姿に心をうつし給ひけむ。惜しや、一代の名僧、こゝにあへなくも破戒の僧となりぬ。道鏡、學問才藝に於ては玄昉に如かざれども、政治上の手腕は、遙にその上にあり。帝に玄昉の上にあるのみならず、押勝の上にもあり。押勝は、才子肌にして、道鏡は、豪傑肌なり。押勝は、居室を壯大にして、妻妾に誇りて、ほくく喜ぶ底の小人物なれども、道鏡は、更に一層姦惡なり。上皇今や押勝を見限りて、道鏡に首つたけになり給ひぬ。この際、上皇なほ勢力あり。上皇に見限られたる押勝は、その権力の一半を割かれたるなり。六十の老人、おとなしくもなく、一法師に向ひて、鞘當を試みたるこそ愚なれ。

道鏡と押勝との衝突は、藤原氏と僧族との衝突の最も大なるものなり。されど、これ全く藤原氏と僧族との争にあらず。南家以外の藤原氏はむしろ假に道鏡に左袒したり。押勝は、小才ありて徳器なく、たゞ私利のみを見て、雅懷なき小人物なり。巧に小策略を弄して、天下の權を握りたるも、これ高利貸が財を成したるの類なり。味方とする所は、天皇と上皇とのみにて、他の藤原氏は、その敵なり。有司百官も、みな敵なり。然るに、今や上皇までも道鏡に取られて、益々孤立せり。道鏡と押勝との争は、實は天皇を擁せる押勝と、上皇を擁せる道鏡、南家以外の藤原氏、有司百官との衝突なり。押勝は道鏡を除かむとて、兵をあげて、誅せられしこと、當年廣嗣の玄昉に於けるが如し。小才子の末路、自業自得とは云ひながら、鎌足、不比等、地下にありて痛哭するなるべし。

押勝死して後、天皇は廢せられぬ。上皇は、重祚し給ひぬ。後宮をひかへたる道鏡は、政治上にも、唯一の大立物となり、僧徒の身にして、太政大臣となりぬ。偉なるかな、道鏡、佛教と政治とを混じて一となし、宗務、政務、一身に裁斷して、よびかへされたる右大臣豐成、大納言永手の如き、藤原氏の巨頭をおさへて、其下風に立たしめたり。たとひ後宮の援助ありとするも、道鏡は、情婦の躰をかじるが如き男妾的の意氣地なしにあらず。押勝の如き、陰險なる小策略を用ゐずして男らしく天下の權を掌握せるなり。

道鏡に對して反抗を試みたりしもの、ひとり和氣王ありしが、憐や、失敗に歸したりき。これより、天下一人も反抗するものなく、法王の位さへさづかり、月料、供御に準じ、鸞輿に乗り、服食も供御に擬し、細大の政、すべて決を己に取らざるはなく、事實に於て、天皇の外、更に天皇を見るに至れり。その僭越なりしこと、足利義滿と前後一對にして、道鏡の姦惡は、更に一層大なり。

道鏡のこゝに至りしは、押勝の如き才子肌の上を越して、梟雄の資ありしに由れども、また淫佛の時世と女主とが、彼をして梟雄の資を逞うせしめ易からしめたるなり。孝謙天皇は、賢明にもあらず、馬鹿にもあらず、一人娘とて、甘やかされて、我儘にそだち給ひ、きかぬ氣象にして、思ひ切つて大それた事をなし、利口ぶりて、一寸始末に在へ難き御方なりしが如し。家婦として厄介なるは、かゝる女なり。いはゆる女さかしうして、牛賣り損ふものにて、諸兄、豐成、眞備の如きおとなしき人のもてあまし、所なるべし。君子肌の人のもてあます所は、小人的姦雄的の人物の弄び易き所なり。これを以て押勝さきに籠絡し、道鏡のちに籠絡せるなり。殊に、聖武天皇が自ら三寶の奴と稱し給ふまでに佛に淫せる時世、佛教と政治と一になりたれば、僧侶としてもすぐれ、且つ政治家の手腕もありたる道鏡は、一層の便宜を得たりしなり。

茲に、驚くべき珍事起りぬ。太宰の神主、阿曾麿、道鏡に媚び、宇佐八幡の神教なりと稱して、奏して曰く、『道鏡をして位に即かしめば、天下泰平ならむ』と。これ我が國體上容易ならぬことなり。孝謙天皇(稱徳天皇)も、さすがに首を傾け給ひて、和氣清麿をやりて、神託をうけしめ給へり。清麿かへりて、神許さずと奏して、我が國一系の皇統漸く無難なるを得たり。嗚呼危かりしかな。されど、これ遠く因る所あり。聖徳太子が、當時の氏族制度の軋轢甚しきに懲りて、佛教中心主義

を取り給ひし精神、淫佛の頂上に達して、自ら現はれたるなり。道鏡を責むる前に、先づ聖徳太子を責めざるべからず。

さるにても、孝謙天皇は、如何なれば、伊勢の大廟の神教を乞はずして、宇佐八幡の神教を乞ひ給ひしぞや。宇佐八幡は、應仁天皇を祀れるものにて、奈良朝の始に出来たる、出来たてはやくの祠なるが、いつしか、佛法擁護の神となり、淫佛の世とて、伊勢の大廟と竝立するにいたれり。孝謙天皇が大廟を袖にして、宇佐八幡にたよりたまひしは、畢竟するにまた淫佛の餘弊なり。

清磨が死を冒して道鏡を位につけざりしは、忠肝義膽、千古に卓絶す。されど、藤原百川、路豊永はじめ、大多数の百官有司の後おしもありたり。道鏡の意にそむくも、その身危く、道鏡の意に従ふも、亦危きは、思慮あるものゝ知るべき筈のことなり。清磨よくその擇ぶ所を知りて、一時を苟偷せざりしは、賢なり。死を冒してその擇ぶ所をかへざりしは、勇あるなり。清磨の忠節、道鏡の姦惡と相對して一層の光輝を放てるは、奈良朝掉尾の大快事なり。

清磨は貶謫せられて、道鏡はなほ榮華を貪りしが、間もなく、孝謙天皇崩じ給ひて、狐また虎の威を假るに由なし。八烈きにしてもあきたらざるに、下野の樂師寺の別當に貶せられたるは、身に餘りたる恩典なり。

道鏡と押勝とを比するに、押勝は小姦を以て始まり、小姦を以て終れり。道鏡は大姦を以て始まり、大姦を以て終れり。これ二人の人物の大小のわかるゝ所なり。而して後宮より入りたる進路は、則ち一なり。

藤原時平

『罪惡の裡面には、必ず女子あり』とかや。嘗に罪惡のみならず、我が國史の裡面にも、多く女子あるなり。殊に平安朝の歴史に於て、最も其然るを見る。兵はこれ權なり。兵力の必要ある時代には、武勳あるもの、若しくは兵を有する者勢力あり。藤原氏の祖、天兒屋根命、天孫に従つて、我が國に降り重く用ゐられしかど、文臣にして武臣にあらず。従つて其勢力は盛ならざりき。而して武勳ありし武臣の大伴氏の勢力盛なりしは、自然の勢なり。既にして、競争者起れり。即ち武勳文

勳雙絶せる武内宿禰の子孫これなり。蘇我氏と物部氏との争は、表面は神佛の争なり。又保守と進歩との争なり。されど裡面は即ち二武臣の軋轢に外ならず。蘇我氏亡び、大伴氏も振はず、しかして國家また兵力を要せざるに至りて、藤原氏漸く勢力を得來れり。而も勢力を保つ所以のものなかるべからず。即ち女子を帝室に入れて、切つても切れぬ關係を作る。これ藤原氏が唯一の武器なりしなり。又その政略なりしなり。

藤原氏は、良房に至りて、勢力一時に高まり、道長に至りて、榮華の頂上に達せり。藤原氏にして、否、人臣にして始めて攝政となりしものは、良房なり。其女は文徳天皇の皇后となり、母は外祖たり。かくて良房の女は、清和天皇を生み奉れり。良房、男子なし。兄良の次男を養ひて子とせり。其經これなり。而して清和天皇には、何人を入内せしむべきか。矢張り長良の娘に高子と云ふ美人あり。これ藤原氏が目星をつけし所なり。然るに當時在原業平と云ふ絶世の好男子あり。無邪氣なる戀愛は、早くも佳人才子の間に成立ちぬ。藤原氏の失望、寧ろ憤怒想ふべし。二人は遂に駈落せり。几帳の下に蝶よ花よとそだてられ、あらし風にもあたらざりし深窓の處女、人目しのび

ける白露を、西鶴の浮氣女は團子かと下司の根性あらはせど、女は貴女、白玉かと問ふも、やさしく、あどけなく、男は貴公子、後世の尻はしなりて頬かぶりする駈落とは異なりて、背に弓胡録を負ひたり。かばかりにこがれ合ひたる中を、かなしや藤原氏の鬼にひきはなされ、業平は既に掌中の佳人を奪はれ、おまけに奥州くんだりまでおひやられたり。業平の東下りは、失戀の結果なり。他に故あるにあらず。『いとゞしくなれこし方のこひしきにうらやましくもかへる浪かな』唐衣きついなれにし妻しあればはるゞきぬる旅をしぞ思ふ』名にしおはゞいざ言問はむ都鳥むかしの人はありやなしやと』これらの歌はみな高子と契りし昔の戀をしのぶなり。業平との情交は絶たしめられた、高子は、既にきず物なり。妄に入内せしむべくもあらず。無論皇后にはなれず。又女御にだにする能はず。さすがに藤原氏も世間を憚りて、何も名の付かぬ御殿女中として進めたり。大鏡に『この后宮のみや仕へし初めけんやうこそ覺束なけれ』と云ひたるは、この間の消息を傳へたるなり。さるに傾國の色、むなしく空房に閑却せらるべくもあらず。高子はいつしか龍種を宿しぬ。陽

成天皇これなり。この高子は、清和天皇よりも長ずること九年、陽成天皇を生みしは、廿七歳の女盛なり。三十六歳に至りて、始めて后位に登りぬ。後、寛平八年、歳五十五にして僧善祐と號開あり。高子は皇太后の位を廢せられ、善祐は流されぬ。善祐は年まだ若き好男子なりしなるべし。拾遺集に、『泣く涙世は皆海となりなむ同じ渚に流れよるべく』とあるは、善祐の母が其子の配流を悲しみてよめる歌なり。淫靡の風最も盛なりし平安時代の當時にも、流石に多少の制裁はありしなり。

良房は、清和天皇の貞觀十四年に死せり。後四年にして清和天皇、位を御子陽成天皇に譲り給ひぬ。之と同時に基經攝政となりぬ。天皇時に御年九歳、翌年即位し給へり。後八年、即ち元慶八年に、我が國史上空前絶後の一珍事起れり。即ち基經が人臣の身を以て天皇を廢しまつりたることなり。天皇基經の甥にあたり給へるに、廢せられ給ひしは、よくくの御事なり。天皇御年長じて狂暴度なく、甚しきは無辜の民なぶり殺しにし給ふに至れり。基經涙を揮ひ、むしろ廢立の汚名を身に負ふとも、皇室の御爲にとて、天皇を廢しまつれり。これ決して専横の所置とは云ふべからず萬々止むを得ざりしなり。

陽成天皇既に廢せられ給ひぬ。『つくばねの峰よりおつるみな川の戀ぞつもりて淵となりぬる』とは、知らず、何人をか戀ひ給ひけむ。後繼の天皇なかるべかからず。此時、源融と云ふ人あり。河原左大臣と云ふは、此人の事なり。實に嵯峨天皇第十二の皇子なり。百人一首に、『みちのくの信夫もぢざりたれ故に亂れそめにし我ならなくに』とある歌は、この人の作れるなり。非常に馬鹿げた奢侈をきはめたる人にて、鹽竈の絶景を聞き、之を我が庭園に模造し、數百の人夫を役して尼ヶ崎より潮水をはこび、毎日百文づゝ潮水運搬の費用に充てたりし人なり。基經次の天皇としまつるべき御方を色々詮議するや、この河原左大臣野心をあらはして、この融も皇子なるはと云ひしが、皇子なれども、今は源姓を賜はりて臣下なり。臣下にして天皇となりたるためしやあると、基經に一喝せられて、ぐうの音も出でざりき。基經はかく源融を退けて、光孝天皇を立てまつりぬ。なに故に光孝天皇を選びまつりたるかは、大鏡に記する所に明なり。曾て良房の家にて大饗あり。配膳者の失念にて、尊者の前に雉の足を盛ることを忘れぬ。尊者とは、第一の上客の義なり。配膳者間に

合せに、尊者の傍に居給ひし光孝天皇の膳の雉の足をとりて、之を尊者の膳にもりぬ。これ尊者に對しても、光孝天皇に對しても、失禮なる所爲なり。然るに、光孝は寛仁の御度量、配膳者の過失を人に知らさじとて、早くも前にありたる燭火を吹き消し給ひぬ。配膳者はいかにその情の厚きに感泣しけむ。この時、基經末座に在り。遙に之を見て、深く其人と爲りに感服し、さてこそ擁立して陽成天皇の後繼にはなしまゐらせたるなれ。

これ表面の事實なり。されど裏面には女子あるなり。即ち光孝天皇の御母は、贈太政大臣總攝の娘にて、基經の母とは姉妹なり。光孝天皇と基經とは、母方の従弟同士なり。又基經の妻は。光孝天皇の同母弟なる人康親王の娘なり。又光孝天皇の御子なる宇多天皇の後は、藤原高藤の娘にて基經とは、あまり遠からぬ親類なり。かくて光孝天皇は基經の情によりて位につき給ひぬ。御年既に五十五、これ天皇の思ひもかけ給はざりし事にして、げに優曇華の花、枯木の花、基經の恩に感じ給ふ御心のみ胸にみちて、唯うれしとばかり喜び給ひし末路一炊の夢、わづかに三年にして覺めて白玉樓中の人となり給ひぬ。唯氣にかゝり給ひたるは、後繼の事なりしが、これも基經のはからひ

にて、天皇の生前、第三の皇子を皇太子となしまつれり。即ち宇多天皇これなり。御母は班子女王にて、藤原氏の出にあらず。而も一度源姓をたまはりて、臣下となり給ひし御方にて、十善の位にのぼらむとは、思ひもかけ給はざりしなるべし。基經前に源姓の臣下なりとて源融を退けしに、今は源姓の臣下の宇多天皇をたてまつりぬ。この時なほ生きながらへたりし源融はひそかに不平なりしなるべし。光孝天皇は更なり、宇多天皇は、如何に基經の情をうれしとおぼし給ひけむ。基經はかく賢明の主のみを選びて、女子を政略に用ゐざりしが如くなれども、全く然るにあらず。我が娘の温子を宇多天皇の皇后とせしなり。又末の娘の穩子は、醍醐天皇の皇后となりぬ。朱雀、村上の三天皇は、實に其生める所なり。

宇多天皇御即位の後、五年にして基經死せり。基經は宇多天皇の恩人なり。宇多天皇は深く之を徳とし給へり。然るに、阿衡の詔は、端なくも基經の怒を招きぬ。宇多天皇、基經に、『よろしく阿衡を以て、卿の任と爲すべし』と云ふ勅答を下し給へり。これ橋廣相の草する所なり。基經は、阿衡は空位なり。これ我を馬鹿にし給ふなりとて怒りぬ。源融、其間を和解して、天皇止むを得ず、

勅答を改め給へり。綸言汗の如しの變例、茲に始めて起りぬ。この事實の裏面には、廣相の才能をねためる藤原佐世の使嫉もあるなり。當時一人も廣相の肩をもつものなかりしに、讃岐守たりし菅原道眞、獨り基經の威をばくからず、書を基經にたてまつりて、廣相の爲に辯解せり。其俠骨、變生男子のみ充ちし當時の朝廷に卓立す。これ實に道眞が一世一代の大出来なり。否、道眞は、この一事より外には、何も卓越せる仕事なかりしなり。而して宇多天皇が道眞を信用し給ひしは、この一事にもとづけり。

基經死せし時、時平は、わづかに二十一歳なりき。彼は基經の長男なり。光孝天皇御在位の時、仁和二年正月三日、仁壽殿に於て、元服を加へしが、天皇は恩人の嫡流なりとて、辱なくも御手づから冠を取つて時平にかぶせ給ひぬ。今昔物語の傳ふる所によれば、彼は絶世の美男子なりき。此時、年甫めて十六、清き眼、碧瑠璃を磨き、豐頬白練にて紅玉をつゝめるが如し。春風殿上、さきぞめし梅花と映發して、如何にみことなる光景なりけむ。而して基經の死後直に其後をつがむには年あまりに若かりき。

基經の爲に囚まされし源融は、左大臣たり。されど、別に力も勢力もなき老爺なり。宇多天皇の目ざし給ひしは道眞なり。基經死してより一月あまりにして、即ち寛平三年二月廿九日、道眞を抜擢して、藏人頭とし給へり。時平は此時、參議なりき。三月十九日に至りて、大納言藤原良世を右大臣に任じて、源融と朝廷の上に並立せしめ給へり。この人は、冬嗣の八男、年は六十九、これも融と一樣なる老いばれおやちにて、上には賢明なる宇多天皇あり。下、朝廷の最上層には、無能力なる老人二人、白髪頭をならべて立ちしなり。三月廿九日には、良世藤原氏の長者を命ぜられぬ。氏の長者とは、今日にて云へば、本家の且那と云はんが如し。あらゆる藤原氏の上に立てる第一等の且那様なり。時平年二十一。氏の長者となるには、年餘りに若かりき。

寛平五年、時平年二十三にして中納言となりぬ。道眞よりは上班に在り。而して時平より一段上なる源能有は、大納言にして、左右の大將を兼ねたり。能有は文徳天皇の皇子なり。基經死して時平大臣となる迄、朝廷の上層に立ちし人は、源融、藤原良世、源能有の三人なりき。融、能有、共に源姓の皇胤にして藤原氏にあらず。而も寛平五年以後、政治の實權を握りし人は、大納言能有、

中納言時平なり。道眞はやゝおくれ之に加はれり。寛平七年に至りて、道眞中納言となりぬ。この年、源融年七十三にして死し、左大臣缺けたり。是に於て、良世、左大臣にすゝみ、能有右大臣にすゝめり。かくて寛平八年に至り、良世致仕して左大臣缺け、後四年を経て、昌泰三年、即ち道眞左遷の前年に死せり。翌寛平九年は、宇多天皇が、位を醍醐天皇にゆづり給ひし年なり。この年能有死して、右大臣も缺けたり。時平の上に立ちし老人は、皆朝廷を去れり。實に寛平九年六月十九日、時平大納言に任じ、同日左大將に轉じ、源光、大納言となり、道眞、權大納言となりぬ。源光、官は道眞の上にあつたれど、宇多天皇の信用なく、また實權なかりき。時平と道眞とが實權を握りたりき。時平は左大將となると共に、藤原氏の長者となりぬ。

然るに昌泰二年二月十四日には、時平年二十九にして左大臣となり、道眞五十五にして右大臣となりぬ。源光は、道眞に追ひこされたり。其遺憾知るべし。茲に一人、時平、道眞の踵に接して、雲の上ののぼれるものあり。即ち藤原高藤なり。この人は、醍醐天皇の御母の父なり。即ち外祖なり。時平が左大臣となると同時に、大納言となり、翌昌泰三年一月には、内大臣にすゝめり。年六十三。内大臣たること、僅に三箇月にして死せり。定國は即ち其子なり。源光は官職の上より道眞を恨み、定國も母方の縁故をたのみ、儒臣なり上りの道眞の下に在るを屑しとせず。而して道眞同じく學者肌にして才氣ある藤原菅根は事を以て道眞を恨めり。されど、時平は無暗に道眞に敵する迄には小量ならざりき。

然れども、時平も遂に道眞に敵意を挟まざるを得ざる事情起りぬ。昌泰三年正月三日、宇多法皇は、天皇と朱雀院に會し給ひ、更に道眞を召し、關白となれとの密旨を賜ひき。嗚呼一儒臣にして藏人頭となるは、既に異數なり、更に進んで參議となり、中納言となり、權大納言となり、大將となり、大臣となり、あらゆる諸名族を凌駕するに至りては、天下たゞ目をそばだつるのみ。今や更に進んで、藤原氏の長者をも凌駕して、獨り關白とならむとす。苟くも時平にして男子たる以上は第一朝廷に對しても面目なし、世間にあはす顔もなし、先祖に對して申譯なきなり。第一流の名門の華胄、功臣の子孫にして、おめくくと一儒臣に追ひ越さるゝは、血性男子の能く忍ぶ所にあらず。彼を倒すか、われ自ら倒るか、二者其一に出てざるを得ず。菅公も流石に馬鹿にはあらず。此御

密旨を固辭しまつれり。然れども之を傳聞したりし時平の心中は果して如何なりしぞ。如何に寛宏酒脱の人と云へども、意氣地ある以上は道真に對して、敵意を挾まざるを得んや。下には、道真にあきたらざる光、定國、菅根あり。風既に樓に滿てり。山雨やがて來らむとす。

宇多法皇が、かばかり道真を信認し給ひしは、畢竟何の基づく所ぞ。恐多きことなれども、史論上、止むを得ざる事とし、茲に宇多法皇の御人となりて説かしめよ。天皇は英明におはせり。學を好み、詩文を能くし、風流儒雅、俗人との對話よりは、詩酒の清興を愛し、世上の事理に通曉し、コンモンセンス十分備はり、才氣も有り、また多少の霸氣もありたる好君主なり。されど意志はさまで強からず。後鳥羽天皇、後醍醐天皇の如く荒仕事を企て給ふ程の膽氣はなく、藤原氏の威勢の強きことは、癩にさはれど、さりとして、雄局に當り、盤根錯節の間に悠々自若たるだけの豪傑肌の大器にはおはさざりしが如し。面して其お氣に入りの道真は、法皇と同種族の人なりき。前にも云ひたる如く、阿衡の事に關して、基經を諫めしは、道真が一世一代の大出來なり。大手腕を要するにあらず、博學にして議論をよくし、少し硬骨ある者ならば、誰にても出來る事なり。然るに法皇

は、この一事より道真をたのもしき男と思ひ給へり。而して道真が博學多才、詩文に長じ、辭令に巧に、而も正直なる所ありて、時々諫言を奉るを以て、學問ずき、詩文ずきにしてわけが分つて居らるゝ法皇のお氣に入るは、自然の勢なり。即ち同氣相求むるなり。されば何かと云へば、道真を召して、詩酒の宴に侍せしめ給ひき。道真は唯べらぐとしゃべりて、人の機嫌とる辯論的人物にあらず。又利口げにたまはるいや味たツぶりの灰燼にあらす。根が正直にして理の許さざることは、抗言して憚らず。これ馬鹿殿様のお氣には入らぬ所にして、學者肌のわけの分りし法皇には歓迎せらるゝ所なり。法皇は、ぞつと道真にほれ込みたまへり。而して藤原氏の威勢を抑ふるに道真の力を借らむとし給ふに至れり。されど、法皇も道真も、荒仕事をなすには膽氣なかりしなり。道真は常識ある大學者なり。撥亂反正の豪傑にあらず。御史大夫位が、せいんぐの手腕にして、竟に宰相の器にあらず、即ち政治上、口の人にして、手の人にあらざるなり。類聚三代格などを見て、道真の無能力にして、反つて時平は非凡の政治家なりしことがわかるのみ。法皇が道真を深く信任し給ひしは、藤原氏以外の人の手を借りて、藤原氏の權を抑へむとし給ひしこと一なり。學問

詩酒の癖に、同氣相求めしこと二なり。道眞が此大任に當りたるは、法皇より申せば、少しお眼鏡
ちがひなり。道眞より云へば、瘦馬に重荷なり。

法皇は、醍醐天皇をして、道眞を有り難がらしめ、又道眞を信任せしめんと勉め給ひき。寛平九
年、位を譲り給ひて、寛平遺誡の中に宣はく、

右大將菅原朝臣是鴻儒也、又深知政事、朕選爲博士、多受諫正、仍不次登用、以答其功、加之、
朕前年立東宮之日、唯與菅原朝臣一人論定其事、其時無共相議者一之、又東宮初立之後、未經
二年、朕有讓位之意、朕以此意、密々語菅原朝臣、而菅原朝臣申云、如是大事、自有天時、不可
忽、不可早、云々、仍或上封事、或吐直言、不順朕言又正論也、至于今年、告菅原朝臣以朕志必
可果之狀、菅原朝臣更無所申、事々奉行、至于七日可行議、人口云々殆至於欲延引其事、菅原朝
臣申云、大事不再舉、事留則變生云々、遂令朕意如石不轉、總而言之、菅原朝臣非朕之忠臣新君
之功臣乎、人功不忘、新君慎之、

法皇はかくして、道眞の爲に、勿體をつけむしと給ひしも、竟に捷勢なりき。

道眞左遷の裡面には、時平及び其一派の敵意ありたるに相違なし。而も時平は陰險なる小人にあ
らず。表面には、左遷せざるを得ざる近因ありしなり。左遷詔の中に給はく、

右大臣菅原朝臣、翰林與利俄國大臣上利而、不知止定之分、有專權之心、以佞諂之情、欺惑前上皇
之御意、然乎恐惶上皇之御情天、欲行廢立離間父子之心、被彼兄弟之愛、詞者順仁之天心者逆、是皆
天下所知奇利、不宜居大臣之位、

醍醐天皇を廢して、道眞の娘の嫁せる皇弟、齊世親王を立てむとせしことは、實際ありたる密謀な
り。詔の中の志を離間し、彼の兄弟の愛を破るとあるは、即ち是なり。扶桑略記に曰く、

後朝廷遣使字佐、過太宰府、密其舉動、使者歸奏、道眞曰、我實無意、爲善朝臣所誣誤、且法皇
有遵承知之故事之旨、終至此耳、

道眞の愚痴なる、我が身の正しきを辨はさむとて、他の惡事を口走りたり。これ君子の爲さぬ所な
り。道眞の口走りたる如く、廢立を企てし謀主は、源善朝臣なり。善朝臣は、かゝる荒仕事をなす
だけの膽氣ありし男と見ゆ。其黒幕には、宇多法皇ありき。承知の故事とは、橘逸勢などの廢立を

はかりし事なり。法皇は、醍醐天皇を廢し、道眞の女婿にして、醍醐天皇の御弟なる齊世親王をたて、道眞を關白とし、外祖たらしめ、以て藤原氏の權を抑へむとし給ひしなり。氣の小さき道眞、之を聞いて大いに驚き、法皇を諫めたれど、聽かれず。知つて知らぬふりせしなり。

然るに事は早くも暴露しぬ。善朝臣は張本人故、流されたり。道眞も亦流されたり。實に延喜元年正月廿五日なり。道眞が配流の途に上りたるは、二月一日なり。道眞は、實際無罪なりしなるべし。然るに時平は罪を道眞に歸して、また法皇と齊世親王とを問はず。醍醐天皇に告げて曰く、この度の陰謀は、道眞と善との爲し、所なり。御父も、御弟も、全く知り給はぬ所なりと。かくて御父子兄弟の間の感情をそこねず。時平の思慮周密なりと云ふべし。

法皇、道眞を辯護せむとて、内裏に赴き給ひしに、門とちて入り給ふこと能はざりき。これ藤原菅根の計ひに出でたることなるが、其黒幕には時平もありしなるべし。もし父子の御對面ありては時平が折角皇室を思ひての狂言も、或は水泡に歸せむことを恐れたるなり。醍醐天皇は、つゆ御存じのなきことなり。又宇多法皇もまた時平の眞意を知り給はず。廿五日は門前ばらひを喰はされ給

ひ。夜に入りて空しく歸り給ひぬ。翌廿六日は、使をつかはして、昨日は何故に我を入れざりしかと御詰問ありしなるべし。醍醐天皇、始めて此事を知りて、誰が門をとざしたるぞとたいされし處菅根なりとの事がわかりぬ。父に門前拂ひを喰したる不届者として、廿六日、菅根を太宰少貳に貶し給へり。菅原黨の首領は太宰權帥となり、其反對黨の股肱は太宰少貳となり、敵味方同じく太宰府に流さる。奇なる現象と云ふべし。かく一旦菅根を貶したるにて、天皇が法皇への申譯は立ちたるなり。是に於て、時平徐に天皇を宥めて、菅根の惡意なきことを申し上げ、廿七日には昇殿すること許さるゝに至れり。二月廿一日に至りて、またもとの藏人頭となりき。この日付は、公卿補任尻付に據りたり。古今集目錄には、菅根が太宰少貳に貶せられしも、又昇殿を許されしも、道眞が貶せられし日と同じく、廿五日中の事としたれど、さりとては、餘り急激なり。公卿補任尻付の方が正しかるべし。

道眞が京都を出發せし翌日、即ち二月二日、齊世親王は、流石に安からずおぼし給ひけむ、出家し給ひぬ。是にて事はまづ落着せり。道眞には少し氣の毒なれど、時平が皇室の父子兄弟間の調和

をはかりし苦心と智慮とは、多とせざるべからず。以上説ける處は、道眞の左遷に於ける表面の事實なり。其裡には、道眞に對する時平一派の敵意ありし事は、疑ふべからざるなり。單に道眞の左遷を時平の陰險にのみ歸するは皮相の見たるを免れず。

道眞は學者肌の人にして政治家にあらず。口の人にして、手の人にあらず。政治上何等の功績もなかりしに引きかへ、時平は實に平安朝數百年間の第一の政治家なり。唯それ實行家なり。故に道眞の如く風流儒雅ならず。又道眞程には、學問詩文の才なかりき。大鏡に記して曰く、「右大臣(道眞)才も世にすぐれ、めてたくおはしまし、御心おきても事の外に賢くおはします。左大臣(時平)は、御歳も若く、才も事の外に劣り給へり」と、才はさえと音便にてよむ。即ち學問詩文の事なり。智慮の事にあらず。而して學藝の才劣りたりとも、政治家となるには、毫も差支なきことなり。宇多天皇は道眞の風流儒雅なるを愛し給へり。されど流石に時平の才能を知り給はざるにあらず。寛平遺詔に宣はく、「左大將藤原朝臣は功臣の後なり。其年若けれども既に政理に熟せり。今第一の巨たり。能く顧問に備へて、其輔導に従ふべし」と。而も論より證據、試に類聚三代格を繕かば、時平

が政治上の功績は、到る處に伺ふべく、其大政治家たる面目、紙表に躍動すべし。今一々細に言はむも、わづらはしければ、其おもなるものに就て云ふべし。

一、應禁制諸院諸宮及王臣家占固山川數澤事、

二、應停止敕旨開田并諸院諸宮及王位以上買收百姓田地舍宅占請閑地事、

三、應禁斷諸院諸宮王臣家假民私宅號庄家貯積稻穀等物事、

以上二三の格は、三代格に出でたる所にして、實に道眞を流し、翌年即ち延喜二年に時平の宣せし所なり。時平が政治の改革は、こゝに在り。其技倆もこゝに見るを得べし。即ち此等の格は、莊園の害を看破し、豪族が地方に跋扈するを抑制したるものなり。莊園の起原はふるし。大化の改革は名は郡縣にして、洵に美なれども、實施はながくつかず。早くも莊園起りぬ。後莊園より大名小名を生じ、幕府を生じ、以て皇室の陵夷を致せり。而して鎌倉幕府起るの前、莊園の弊を除かむと企てしもの、前に時平あり。後に後三條天皇あるのみ。豪族妄に土地を專領して莊園となし、私利を營み、公田減じて私有地多くなり、従つて租税を納むる土地減じ、かくて豪族は富み、國庫は空

しく、而して平安朝の末には富める豪族兵士を養ひて、大名小名となり、以て封建政治の基礎をつくれり。時平の時代には、さまで甚しからざりしかど、時平の慧眼と英斷とは、早くも茲に見るありて、之を抑制し、以て國庫の充實と中央政府の権力増強とを圖れり。而も全く莊園を廢する能はず。何となれば自分をはじめ、藤原氏の一族もまた從來の莊園に衣食しつゝあるものなればなり。故に曰く、『但元來實爲庄家、不妨國務者、不在制限』と。即ち元來所有せし莊園にして、國務に差支なきものは、此限りにあらずとの意にて、新に作るもの、若しくは、正しき證券なきものを禁ぜらるなり。後三條天皇も、時平の故智を襲ぎて、莊園を廢し給ひたれど全くは廢し給ふこと能はず。寛徳二年以後の莊園を廢し給ひしのみ。而して惜しむらくは、時平は早く死し、後三條天皇の御在位も短かりし故、折角の改革も持續する能はざりしことを。されど、時平の生前には、莊園の弊害大に減せしなるべし。藤原氏に時平の如き大政治家輩出せば、武門の治に移ることはあらざらましを。時平と後三條天皇との外には、かゝる手腕と英斷とあるものなかりき。惜しまざるべけんや。時平はなほ『應勳行班田事』『應調庸精好事』の二格を出して、朝廷の收入を増せり。かくて時平の

生前は中央政府の権力つよまり、國庫も充實せり。後世延喜、天曆の治を並稱す。延喜の治績は時平の力なり。天曆のみかど村上天皇會て一老吏に問うて宣はく『當代の治と延喜の治と優劣如何』と。この老吏は延喜の御世より天曆の御世まで生き長らへたる人なるが、圓滑に諷刺して曰く、『老奴譎劣何ぞ優劣を辨じ申さむや。たゞ當代は主殿寮に多く松明を費し率分堂に草茂る』と。蓋し主殿寮は燭を掌る所にして、其松明を費すこと多しとは、政務繁くして、夜に入るまでも放衙する能はざるを云ふなり。又率分堂は租税を納め貯ふる所にして、之に草生ずとは、歳入少きを云ふなり。此老吏の言に徴して、延喜の御世の富めりしことを知るべし。而してこれ時平が改革の結果なり。天下太平にして國富む。奢侈の風自ら起らざるを得ず。時平は之が矯正策を苦慮せり。或る時、時平非常の美装して朝廷に出てしに、醍醐天皇見て之を叱り給ふ。時平、平身低頭して家に歸り、門を閉ぢて謹慎すること數十日、百官傳へ聞きて、奢侈の風自ら改まれり。これ實は時平が天皇と申し合せて爲したる狂言なり。誰とても奢侈の害を知らざるものはなけれども、己の金と力とあるまゝに、奢侈を極め、不品行をなし、而して上の好む所、下ますく甚しきを顧みざるが常なり。

時平は藤原氏の長者となりて、如何なる榮華奢侈をも、極め得べき身なるに、儉素自ら奉じ、率先して奢侈の風を停めぬ。古大臣の風ありと云ふべし。

時平が政治上の勳功の赫々たること、既に此の如し。而して時平は更に武事にも意を注ぎたる人なり。當時雷鳴陣と云ふ事あり。天下太平になれて武備すたれ、武臣墮落してまさかの用に立たずされば雷鳴るときは、入寇ありたる時に擬して、將士、集りて陣立をして、まさかの時の間に合ふやうに訓練するなり。新儀式に記せるを見るに、昌泰三年七月四日、夜の子の四刻に雷鳴り雨降る子の四刻は、人の熟睡せる最中なり。されど、忠臣藏にも云ひけむ、武士の心掛よきものは、響の音にも目をさます、力彌が鳴らし、金打に、酔ひて倒れし由良之助、忽ちむつくと起きぬ。左大將の時平この雷雨に蹶起して、夜半雷雨を冒して出で、丑の一刻に陣立成りぬ。而して寅の刻に雷雨やみて陣を解くまでも、左近將監、佐伯連則來らず。蓋し武邊の志うすき墮落將校にして、ねほけで雷鳴を知らざりしなり。時平痛く之を懲罰して、以て士風を激勵せり。この一例を以て見るに、左大將の責任を重んじ、能く其職につくし、武備を忽にせざりし一斑を伺ふに足るべし。凡そ、政

治家の能事は、富國強兵の一語に盡く。時平既に富國の策をつくし、其實を擧げ、又昇平の世に在つて、強兵を忽にせず。政治家の能事畢はれるものと云ふべし。

余は時平の不品行を記せざるを得ざるを悲しむ。今昔物語は、彼が寵福を傳へぬ。時平の伯父即ち基經の兄に、國經と云ふ人あり。年既に老いて、若き美人を妻とせり。時平其美色當代に比倫なきを聞き、羡慕措かず。或る時伯父の邸に赴く。伯父喜んで之を饗す。今昔物語の記せる如く、時平は「形美麗有穠いみじき限りなき」絶世の好男子なり。酒杯の間、美音を發してうたへば、梁塵爲に動く。國經の妻、年わづかに二十。簾のかげよりすかし見て、其顔、其容子、其歌、其聲、其舉動、世に比倫あるべしとも覺えざるに、あはれ、なつかしき殿御かゝる殿御にそへる人のねたまじき。われは果報つたなく、老人の妻となりて、空しく深山木の花と世にうづもるゝ事かとあこがれぬ。時平も、起ち舞ふに、眼は常に簾の彼方にそゝぎぬ。正にこれ文君の琴心、靈犀一點自ら相通ず。既にして時平大に酔ひ、國經も大に酔ひぬ。時平歸らんとして國經に向ひ、何か引出物をたまへといふ。國經は時平がしきりに簾内を注視せしを知れり。且つ大に酔ひ居たれば、じやうだ

ん半分、のろけ半分に、時平にからかはむとて、この老夫何も所持せるものなし。たゞ秘藏せるはこの解語の花ばかり、之を引出物にせむとて、細君を簾内より引き出しぬ。時平かたじけなしとて共に車にのりぬ。國經は少し拍子ぬけたれど、熟酔のあまりに、さまたちに思はず、其夜は前後も知らず打臥しけるが、翌朝目さむれば妻あらず。昨夜の事、夢のやうにもあり、又本當のやうにもあり、家人を呼びて聞けば、實際細君を引出物にしたるなりといふに、後悔臍を噛めども及ばず。愚痴をこぼして歌つて曰く、『思ひいづるときはの山のいはつゝじいはねばこそあれ戀しきものを』と。伯父の妻を奪へりと云へば、人聞きが悪けれども、其奪ひ方は、上品にして巧なりと云ふべし。時平は婦人を惱殺するの容貌と魔力とを有せし人と見ゆ。時平又平貞文の妻を奪ひしことあり。なほ他にも醜聞多かりしなるべし。されど、これらは時平の若氣のあやまちなり。されば、寛平遺誠にも、『先年女事に於て所失ありたれど、朕早く忘却して心に置かず。朕去春より激勵を加へて公事に勤めしむ』とのたまへり。宇多天皇も若氣のあやまちと見のがして、將來をいましめ給へり。時平も亦分別ある年齢になりては、かゝる蠻行はなさざりしなるべし。而して延喜九年、歳三十九にして早世せり。其病氣の原因は、多年漁色の結果なりしならむか。嗚呼英雄色を好み、又色の爲に倒る。歴山王然り。豊太閤然り。時平も亦之を免るゝこと能はざりき。歎ぜざるべけんや。

時平の人物を考ふるに、才氣あり、膽氣あり、熱血あり、豪邁にして敏捷、快活にして淡泊、伶俐にして果斷、凛乎として且つ洒然たる大丈夫なり。時平は笑癖ありき。以て其無邪氣なりしを知るべし。或る時清涼殿にて大雷あり。これ道眞の怨靈の所爲なりとて人皆俯伏しけるに、時平獨り驚かず、劍を抜いて檻外に立ち、天を仰いで罵つて曰く、『咄々、卿は生前我が下に位したりき。死せりと雖、この世に在つては、我に一步を譲るべきなり』と。この一喝に雷やみしとぞ。亦以て其毅然たる豪傑肌の貴公子なりしを知るべし。たゞ惜しむらくは、天此英雄に年をかざりしことをもし今二十年も生よのびたらむには、更に二層赫々たる治績ありしなるべし。當時人相を見るものあり。時平を相して曰く、『賢慮、國に過ぐ』と。道眞を相して曰く、『才能、國に過ぐ』と。時平の弟の忠平を相して曰く、『智慮才能、國に叶へり』と。國に過ぐとは、日本のやうな孤島には大きすぎで勿體なしとなり。今日の用語にて言へば、大膽的なりとなり。この事、古事談に出づ。眞偽知

るべからざれども。よく三人を品評し得て當れりと云ふべし。

平清盛

世上、余を罵りて、大悪人なりといふ。吁、盲目千人の世の中なるかな。余を大悪人と見做す程の眼識なれば、愚口、偽善者を善人ともてはやすなり。さは云へ、余は、聖人君子にあらず、英雄豪傑にもあらず、えらき軍人にも政治家にもあらず。われは自ら知る、我は竟にこれ偉大なる、だゞつ子なり。日本開闢以來、われ程、だゞをこれたるものなし。尋常のだゞつ子にては、何の事もなけれど、だゞつ子も、偉大となれば、亦以て天下を震動するに足る。杉の木とても、垣根に植ゑらるゝが如きものにては、何等の價值もなけれど、鞍馬山に生ひたるものゝ如く大きくなれば、天下の壯觀たるを失はざるなり。

實に、人の運は、不可思議なるかな。われ年壯なりし時、安藝守となりて、船に乗りて、熊野沖を通りしが、錨一尾、計らずも船中にとび込めり。これ大に家を興す吉兆なりとの事故、雀躍して自ら料理して、舌鼓打つて食ひ、家臣にも、お裾分してやりしが、その時は、まさかに、武家に例のなき、太政大臣に上り、外戚となり、數百年來、政治の舞臺を獨占したりし藤原氏を投げ出して代りて、天下の權を握らむとまでは思ひもかけざりき。

余が今のやうな身の上になりたるも、余の力量の非凡なるが故にはあらで、實に時勢の然らしむる所なり。藤原氏は、良房、基經以來、代々攝關となりて、天下の權を握りしが、諸國に莊園多くなり、武門武士といふもの起れり。大化の革新、唐制にならひて、封建を廢して、郡縣を起したるが、これは、ほんの表面上の事なり。表面上の事ならざるも、永久の事にあらず。諸國に住人と稱するものあり。これは、諸國宰吏の子孫なるが、たゞ住居する人との謂にあらず。住居することは勿論の事なるが、永住して、ひろく土地を有し、多くの家の子、郎黨を有するものゝ謂なり。その有する郎黨の多少によりて、大名とも云ひ、小名ともいふ。太平ひさしくつゞきしにつれて、軍國の制すたれたり。未だ全くすたれざるも、その用をなさず。大化以來、ほど二百年間は、どうやらからやら、郡縣制度を維持し來りしも、寛平、延喜以後、諸國に盜賊多くなり、且つ莊園多くなり

終に公領は日本全國の百分一となり、國司は任に赴かず。諸國にて、權力ありしものは、この住人なり。盜賊起るも、朝廷に兵なし。この住人に討伐を命じ給ひしに、そのよく功を奏せしこと、恰も猫の鼠を捕ふるが如し。朝廷にては、これ洵に重寶なるものなりとて、征伐の事は、これらの人に任せて、枕を高うして、太平を謳歌せしが、油斷大敵、兵力のある處、終に政權のある處となりぬ。

朝廷にては、藤原氏ひとり跋扈しけるを以て、皇族といへども、皇位を得ざるものは、世にときめくに由なく、多く平氏もしくは、源氏の姓をたまはりて、臣下に列せり。又多くは、臣下に列して、諸國に落ちゆけり。我が平氏は、桓武天皇に出でたり。その子、葛原親王、高見王、王の子、平高望、高望は、はじめて、平姓を賜はりたる人にて、實に我が平家の祖先なり。わが妻の時子の兄は、平時忠、その父は、時信なるが、これは高見王の兄の平高棟の子孫なり。さて、高望の子に國香、良將、良兼、良持、良文あり、良將の子に叛臣として有名なる將門あり。良文の孫に、これも叛臣たる忠常あり。國香の子、貞盛、これは平將軍と言はれて、有名なる人なり。貞盛の子、維

衡、その子、正度、正度の子、正衡、正衡の子、正盛、正盛の子、忠盛、これ即ち余の父なり。今伊豆にありて、源頼朝の片腕となり居る北條時政も、やはり余の同族同姓なり。平將軍貞盛の子にて、維衡の兄なる維時が、即ち其先祖なり。五代前は兄弟なりしに、今は仇敵となれるが、然し源氏にも、ふるき縁故なしとせず。平直方の娘、即ち維時の孫女が源頼義に嫁して、八幡太郎義家を生みけるなり。ついでに、源氏の方の系圖をしらべ見むに、清和天皇の皇子、貞純親王、親王の子經基、源姓を賜はれり。親王は第六の皇子ゆゑ、世、經基を呼んで六孫王とは云ふなり。經基の子満仲、満仲の子、頼光、これ宇治川にて討死したる老いばれ親父の頼政の先祖なり。頼光の弟、頼信の子、頼義、頼義の子、義家、義家の子、義親、義親の子、爲義、爲義の子、義朝、その子、即ち頼朝なり。

平氏も源氏も、近き皇胤なれど、都にありては、藤原氏に壓倒せられて、勢力を振ふことを得ずされど、その代りに地方にゆきて、大に勢力を得たり。藤原氏は、都にありてこそ勢力あれ、地方の人士は、皇室あるを知りて、藤原氏あるを知らざりしなり。然るに、平氏も、源氏も、王族なれ

ば、地方の住人等は、いたく推重せり。殊に兵亂ある毎に、征討の命をうけて、代々勳功ありければ、地方にもてはやされたり。平源二氏は、都に屈して、地方に伸びたるなり。

わが平將軍貞盛は、六孫王經基と時を同じうせり。同族の平將門も時を同じうせり。將門の叛せし時、經基は、武藏介たりしが、間行して、之を襲せり。その功によりて、從五位下に叙せられたり。貞盛は、藤原秀郷と共に、將門を討滅せり。その功によりて、秀郷は、從四位下に、貞盛は、從五位上に叙せられたり。この頃は、實際よく戦つて、功を奏したるは、源平のごとき武門なりしかど、將門の叛には、朝廷にては、なほ藤原忠文を征東大將軍としたりき。この頃の攝政は、藤原忠平なり。忠平は、藤原元方を元帥となさむとせしに、元方は、攝政の子を以て、副帥とせよと乞へり。その意おもへらく、征東大將軍は、下らぬ役なり。せめて、攝政の子でも副帥にし、おのれ元帥とならば、こゝに、稍々元帥の賞目を生ぜむと。然るに、忠平も同じく、征東大將軍の任を輕んじて、之を肯ぜざりき。藤原氏は、代々その考を傳承しけるを以て、先づ兵權を失ひ、ついで政權をも失へるなり。

貞盛の子、維衡は勇名あり。源賴信、平致賴、藤原保昌と共に、四天王と稱せられたりき。この際、同族の上總介平忠常亂を起せり。やはり同族にて、維衡の甥、後に源賴義の舅父となりたる平直方、上野介たりし時、命ぜられて、之を討ちたれど、勝つこと能はず。甲斐守たりし源賴信、常陸介となり、代り命ぜられて、之を討ちて、直に討滅せり。

賴信の子、賴義は、その子義家と共に、陸奥の強賊、安倍貞任をうちて、之を亡ぼせり。義家はまた陸奥に於ける清原氏の亂を鎮定せり。かくて、義家の武勇は、天下にとゞろけり。

義家の子、義親、對馬守たりしが、九州をあらして、隱岐に流され、出雲に據りて、亂を起しけるが、平正盛、命をうけて、往いて之を討滅せり。

正盛の子、即ち我が父の忠盛は、伊勢に居りしが、大治年中、山陽、南海に、盜起りし時に、追捕して、大に功ありき。

かく、忠常が亂を起したる頃より、後は諸國に叛亂多かりしに、朝廷よりは征討の軍を出さず、一時の便宜をよるこびて、その征討の任を平氏もしくは源氏にあてつけしが、これ實に政權の武門

に移りたる最大原因なり。

嗚呼、平源二氏は共に皇胤ながら、都には地下人と賤しめられ、昇殿することだに得ざりしも、地方に出でしは、大に尊ばれたり。土地耶黨を有する住人は、平氏もしくは源氏に附随することを名譽とせり。就中、源氏は、代々東國の守介となり、又多く戦功を東國にたてたり。東國の武士は源氏に悦服せり。東國は、實に源氏の根據地なり。余が何思はず、賴朝を伊豆の蛭ヶ島に流したるは、一生の大失策なり。之に反して、我が平氏は、源氏の如き根據地を有せず。平將軍の前後は、關東に勢力を扶植したりしが、いつしか源氏に代られたり。されど、祖父の正盛は、出雲を鎮定し父は山陽南海の賊を平らげ、家臣の家貞は、九州の亂をしづめたることあれば、西國は、わが根據地ならずとも、味方多き處なり。我が子孫、よしや都を失ふとも、西國に走らば、なほ天下に敵するに足るべし。

源氏は經基、滿仲、賴光、賴信、賴義、義家と、ついで、勇將が出て、殊に滿仲、賴光などは藤原氏の機嫌を取りて、都にては、少しは、もてはやされたり。然し、義親は叛くし、爲義は、さり。平家の方では、貞盛がえらくて、その以後、源氏に、けおとされたる姿なりしが、父の忠盛、勇あり、智あり、白河天皇に寵愛せられて、昇殿を許されたり。武門にして、昇殿するを得たるは實に我が父を以て、はじめとなす。

父は、正四位下刑部卿にまでほつて、仁平年間に死せり。われその後をついで、從四位下安藝守になりしが、こゝに保元の亂起れり。

白河天皇は、七十二代目の天皇なるが、その皇子堀河天皇ついで立ち、堀河天皇の皇子、鳥羽天皇之につき、その皇子、崇徳天皇、之につき給へり。然るに崇徳天皇の御母は、幼にして、白河天皇に養はれ、鳥羽天皇に事へて後も、その寵、なほ衰へず。されば、鳥羽天皇は、崇徳天皇をば、眞の我が子とはおぼさずして、叔父兒と呼び給へり。もし白河法皇の胤ならば、叔父にあたり給へばなり。鳥羽天皇に寵姫あり。美福門院と稱す。皇子體仁を生めり。その生めるを天皇にして、おのれ國母となりたきは、山々なるに、鳥羽法皇も、崇徳天皇を嫌ひ、その皇子をして、年三歳にし

て、崇徳天皇の禪をうけじめ給へり。これ近衛天皇なり。然るに、天皇は、年わづか十七歳にて崩じ給へり。美福門院のくやしき、かなしき、言はむ方なし。崇徳天皇は、再び位につかむことを望み給へり。その皇子重仁親王も賢にして、中外、望を屬せり。されど、鳥羽法皇は、美福門院の勸にまかせて、崇徳天皇の同母弟にして、暗愚なる雅仁親王を立て給へり。之を後白河天皇となす。上下驚きあへり。崇徳上皇は、いたく憤り給へり。藤原忠通、父祖のあとをつぎて、政柄を握りけるが、その弟頼長、之と権力を争へり。この人、博學宏才、一代に超絶したれど、心術は正しからず。上皇と相結び、位に復せしめまつりて、あのを政權を握らむとせり。かく、上に、同母兄弟の皇位の争あり、下に藤原氏兄弟の政權の争あり。これ即ち保元の亂の原因なり。

されど、かなしや、皇室にも、藤原氏にも、兵力なし。荒仕事をなさむには、平家か、源氏かの武門の力を借らざるを得ず。天皇方にては、先づ源義朝を手に入れ給へり。余の父母は、重仁親王に傳たりしを以て、召すことを躊躇し給ひしが、美福門院は藤原通憲と相議して、終に余をも召し給へり。上皇方にて、少しおくれれて、余の叔父忠正と義朝の父爲義とを召し給ひたれど、惜しむべし。既に機先を制せられ給へるなり。

諸國の叛賊討伐にのみ用ありと思ひし平源二氏も、こゝに至りて、都の中にも用立てざるを得ざるやうになれり。この保元の亂は、上皇方の大敗に終りけるが、竟にこれ平源二氏の兵力を借らざれば、何事をも爲す能はずといふことを證明したるに過ぎず。

保元の亂の後、三年を経て、また平治の亂起りぬ。これ藤原信賴と源義朝とが、藤原通憲に對して、私憤をもちせる馬鹿々々しき争亂なり。藤原通憲、官は少納言に過ぎざりしが、學才と云ひ、政治の才と云ひ、當時天下一なりき。少納言にして、政權を掌握し、皇居の改造を始とし、施設せし所、頗る多し。たゞ惜しむらくは、この男、才餘りありて、徳足らず。後白河法皇も、この男のみを信用したまはゞよかるべきも、前にも言ひたるが如く、暗愚の主なれば、一方には、藤原信賴の如き小人を寵愛し給へり。信賴何等の能力もなき癖につけあがりて、近衛大將たらむことを乞へり。法皇之を許さむとし給ひしが、通憲之を諫止せり。小人の常情、通憲を不倶戴天の讐のやうに思へり。義朝も保元の戦功は、余にまされるに、榮達も聲望も余に如かずとて、不平をいだけり。

その女を、通憲の子の妻とせむと申込みたるに、通憲之をはねつけて、余の家と婚を結びければ、義朝もまた通憲に對して恨をいだけり。信頼、事をあげむとするも兵力なければ、愚なる義朝をそのかして、その兵力を借りて、余が熊野詣に出掛けたるに乗じて、事をあげ、目算通りに、通憲を殺せり。後白河上皇と二條天皇とを擁して、権花一朝の榮華、しばし政權を握れり。われ熊野より歸り、上皇と天皇とを奪ひまつりて、信頼と義朝とを皇居に攻めたり。新造の皇居なれば、兵燹にかゝらすなどの勅諭、ちと迷惑に思ひしが、長男の重盛が、うまくやつて呉れて、うれしや、大勝利を得たり。皇居はそのまゝにて、信頼は死せり。源氏は亡べり。

唯一の兵力の競争者たりし源氏既に亡びたれば、これより天下は、我が思ふまゝなり。通憲生きて居らば、少し面倒なれど、これも死して、藤原氏には、また人傑なし。後白河上皇は、暗愚なり而して院政を執らむとし給へり。二條天皇は、親政を執り給はむとして、兩宮の間不和にして、當時の公卿、各黨する所ありたれば、余は權力を扶植する上に、大なる便宜を得たるなり。見よ、平治以來、余をはじめとして、我が一門の昇進のまがやかなりしことを。余は、平治元年の翌年に

參議となりしが、僅々八年間にして、即ち仁安二年には太政大臣となりぬ。これ實に官位の極なり一門公卿たるもの十六人、殿上人三十人、采邑三十餘國を有し、莊園五百餘箇所の多きに及べり。終に外戚とまでなれり。これ開關以來、絶えて其比を見ざる所なり。藤原氏の中には、道長が榮華の極に達して、『この世をば我が世とぞ思ふ望月のかけたることもあらじと思へば』と歌ひしが到底余の榮華の足もとにも、追ひつかざるなり。

父が種々の功勞によりて、昇殿を許されてだに、當時の殿上人は、嫉妬心を起して、暗中にて、父を刺さむとせし位なり。まして、余の如き異例の昇進榮華、いかでか殿上人の嫉妬心を起さざるべき。されど、笑止や、父が銀ぬりの木刀をひらめかすを見て、びつくりして逃げ出すやうな弱蟲は、殿上人の習はしなれば、如何に嫉妬心を起したりとも、毫も恐るゝには足らざるなり。鹿が谷の會合も、つまりこの嫉妬心を醸したるものに外ならず。余は、幾度の戦功こそあれ、一も罪惡を犯したることなし。然るに、藤原家の奴等は、權力を奪はれたる口惜しまぎれに、余を大悪人と呼び、余を圖らむとす。もし後世の歴史家が、その口眞似して、余を大悪人と呼ぶならば、それこそ

大間拔なり。長男の重盛が右大將にて、藤原師長が左大將たりしが、師長之を辭して、空職を生じり時に、藤原成親大納言にて、藤原實定權大納言たり。順を言はゞ、この二人の中が大將になるべき筈なるが、必ずしも官職は順を追ふべきものと、定まつたものにあらず。次男の宗盛、時に權中納言なりしが、之を引きあげて、右大將とし、重盛を左大將にうつせり。之によりて、成親は例の嫉妬心を起し、法皇の寵を恃み、主謀者となりて、こゝに鹿が谷の會合を起しけるなり。平康賴、僧俊寛、西光など、之に加はり、法皇も臨御して、其謀にあづかり給へり。愚や、かくて余をばからむとせしも、事は、二段武士の行綱によりて洩れぬ。西光を殺し、成親を流し、ついで之を殺し、俊寛、康賴を流して、事はなままりしが、なまさらぬは我が胸、咄々法皇、如何なれば、成親の如き小人に加勢して、我を圖らむとはし給ふぞ。

保元に、平治に、われは絶代の軍功こそあれ、朝廷に對して、何等の惡心を挾まざること、くもれる法皇の目には見えざるにや。功ありて罪なきに、故なくして殺し給はむとす。危いかな。よし、法皇にして、その御決心ならば、我にも覺悟あり。俄に令を下して兵を集め、將に發せむとすこゝに困りたるは、重盛に泣きつかれたることなり。君は君たらずとも、臣は臣たらざるべからずと、壓制政治に都合よき支那の古文句を正直にうけて、躰々と余を諫め、兵を出すならば、先づこの重盛を殺せと言ひて、決心その面にあらはれたるに、余はとう／＼我を折りたり。

大姦は忠に似たりとは、名言なるかな。余にして、大姦ならば、心には怒るも、表面には、飽くまでも、おとなしくして、朝廷を敬すべし。よしや、我に十分の理あるも、我は臣下なり。朝廷に對して、理非を争はゞ、理に於て勝つも、世間の人情、之を許さず。現に世上の人望を失ひ、後世子孫の爲に、大に不便なり。われ智慮なけれど、これ位は知らざるにあらず。知つてなほ之を爲す直情徑行、天真爛漫、だゞつ子の本性を暴露して、つゆ顧慮する所なきは、これ余の快とする所。而して世のわからず屋に、大悪人と誤解せらるゝ所以なり。

朝廷にせよ、藤原氏にせよ、今となりて、余を圖らむとするは愚なるかな。地方の討伐を平源二氏に一任して、毫も兵を擁せざりしこと、これ第一の失策なり。一步退きて、平源二氏をして、都に跋扈せしむるに足るも、なほ朝廷も藤原氏も安全なりしなるべし。然るに、通意は、平家を頼ん

て、源氏を斥けぬ。これが第二の失敗なり。我が平家の外に、武門なきやうになれば、政權自ら我が掌中に歸するは、知れ切つたる事なり。今に及びて、じたばたするとも、龍軍に向ふ蟻螂の斧、贏ち得る所は、たゞ自滅あるのみ。二條、六條、高倉、安徳の四天皇の間、院政を執り給ひし後白河法皇、いたはしや、暗愚にして、前には信賴にあやまれ、後には成親等にあやまれ給ひて、平家を倒さむとして、却つて平家の權力を増し給へり。今や、我が平家は、怒濤の中に立つ巨巖の如きなり。

大丈夫が思ひ切つた事をなして、一世を驚倒せむとすれば、天下の恨を買ふことは、言はずとも知れたることなり。我が富、帝室に幾倍せり。朝廷、われを恨まざらむや。われ藤原氏に代つて政權を執れり。藤原氏、われを恨まざらむや。われ南都北嶺の坊主をへこましたり、坊主われを恨まざらむや。われ源氏を滅せり。源氏の遺黨、われを恨まざらむや。われ今日の勢力を得るには、是非とも、これだけの恨を買はざるを得ず。恨あるものは來つて我に報いよ。われは之に對して正當防衛をなすまでの事なり。

さるにても、長男の重盛が四十二歳にして、夭折したるは、世にも悲しきことの限りなり。我が子の自慢するではなけれど、重盛は、よく出來たる人なり。仁智勇兼備せること、平家はじまつて以來、その比なし。源氏にも、その比なし。一門の子弟多けれども、重盛を除きては、また頼とすべきものあらず。知盛、教經などは、勇氣はあれど、平家の運命を兩肩にしよつて立つべきほどの人物にあらず。宗盛、重衡、維盛の如きに至つては、弱蟲の大臆病者なり。平將軍、祖父の正盛、父の忠盛の武士の精血は、重盛がひとりに取りてしまへり。正直な處を言へば、斯く言ふこの清盛も、武士に似合ぬ臆病者なり。保元の亂、余は西門に向ひしが、不幸にも、そこには鎮西八郎が居りしかば、余はびつくりして、重盛の諫むるをも顧みず、他の門に向へり。熊野詣の途に、平治の亂起れりと聞き、殊に悪源太が、余を安倍野に要撃すと聞き、これは大變なりとて、余は京へは入らずに、直に四國へでも落ちゆかむと、逃足をかまへしが、幸にも重盛が、がんばつて呉れしを以て、やすくと京に入るを得たり。さて平治の戦が始まり、悪源太が少兵を以て、わが邸におしよせし時、余は、あわて、兜をさかさまにかぶりて、衆人に笑はれぬ。天子後にあり、背くべから

ずと一時はごまかしたれど、實は腹の中にては、冷汗を流せり。平氏を起したるものは、重盛なり清盛にあらず。されど、重盛は、君子なり。聖人なり。天下を取らむには、餘り高尙なり。矢張り余が上にたち居りて、重盛が下に働くにあらずば、天下は取れず。清盛一人にては、無論不可なり重盛一人にても不可なり。一國は一人を以て起り、一人を以て亡ぶ。余の生きて居る間は、よきが余の死したる後に、重盛なき平家の運命は、實に想ふべきなり。

重盛死して間もなく、暗愚なる法皇は、攝政基房と議して、其封戸を收め給へり。嗚呼これ朝廷が功臣を遇するの道なるか。このやうなる法皇を、上に置きては、如何なることし給ふかも知れず基房も、そのまゝには置けぬ奴なり。基房以下四十三人の官爵を削りしのみにては、余は甘心する能はず。法皇を鳥羽殿に幽しまつりしは、毫も悪意あるにあらず。臆病にして、無謀なる、否、だいつ子なるこの清盛が、子孫を思つて、正當防衛をなすに外ならず。世には不忠と言はれ、却つて子孫の爲にならぬかも知られど、直情徑行、だいつ子の本性を發揮するを以て快とするこの清盛はかくて少しは安心するなり。

だいつ子として偉大なる余は、飽くまでもだいつ子となりて終らむとす。思ふまゝに言ひ、思ふまゝに行ひ、浮世のあらゆる敵と戦ひて、人臣のなし得べき限をなして死すれば、余の本望なり。快なるかな、後世、日本歴史をかくもの、保元以後、二三十年間のことをかゝむには、余の爲に、少くも十枚を費さるべからず。余をかけば、保元以後の日本歴史はつくるなり。

世上にては、また余の不品行をかれこれ言ふものあれど、元來、人の品行は、闇に葬るべきものなり。それを、明らさまに持ち出して吹聴するは、愚の極なり。否、野暮の骨頂なり。古來、好色の英雄多かりしかど、余ばかり寵福の多かりしものあらず。それをかれこれ言ふは、女に持てぬ無粹漢のやきもちに過ぎず。笑止や、余は人生のあらゆることに闘して、思ふまゝに爲し、逃げたるなり。飽きれば美人を取り代ふること、小兒の玩具に於けるが如し。余は何處までもだいつ子なるかな。

苦しや、日本未曾有の熱病をやみて、命且夕にあり。思ふこと、悉くなし逃げたれば、浮世に思ひのことすことなけれど、たゞ一つ執念の残るは、賴朝の首を見ざることなり。今はの一念、遺族に

頼み置く、われ死なば、坊主に頼んで、愚にもつかぬ經を誦せしむるを要せず、香華を手向くるを要せず、たゞ頼朝の首を切つて、わが墓前にかけてよ。これ余に對する、何よりの供養なり。

源賴朝

日本三千年の歴史、精神上には救世主ともいふべき偉人なかりしかど、之を政治上に求むれば、後に豐臣秀吉あり。前に源賴朝あり。秀吉は應仁以還の大亂を平定して、天下を統一したる偉人なり。徳川家康は秀吉の天下をぬすみし鼠賊の類に過ぎず。賴朝は、平安朝中葉以後の禍亂を鎮定し、上は天子の宸襟を安んじまゐらせ、下は萬民を塗炭の苦より救ひて、一時代を作りたる偉人なり。藤原氏は天孫と共に高天原より下り、鎌足に中興し、良房、基經にいたりて攝政となり、關白となり、外戚となり、道長に至りて、最も榮華を極めたり。されど、藤原氏の二門が、朝廷に蔓延して政權を掌握せしは、天下太平なりし間の事なり。到る處、莊園起り、武士起り、干戈を執つてあはれ廻るに及んで、笏のみ執りたる長袖の藤原氏は、如何ともする能はず。武士中の二大巨族、平

氏、源氏、征討の任に當り、朝廷には地下人と賤しめらるゝも、地方にはいたく勢力を扶殖せり。而して干戈を動かすことありしも、邊陲にとゞまりしが、保元の亂起るに及びて、京都はじめて、修羅の巷となりぬ。この亂、上には帝室の争あり。下には藤原氏兄弟の争あり。帝室も藤原氏も兵力なければ、源平の如き武士の力を借りざるを得ず。天皇方にて、源氏の嫡流源義朝、と平氏の嫡流平清盛とを手に入れ給ひしは、これ機先を制し給へるものなり。上皇方にて少しおくれで、おいはれ老爺の源爲義と、さまで名のなき平忠正とを手に入れ給ひたるも、また如何ともするなし。ひとり絶代の豪傑、鎮西八郎爲朝ありといへども、一木大廈の倒るゝを支ふべくもあらず。殊に爲朝は奇策を獻じたるも、わからず屋の頼長、之を用ゐざりき。止んぬるかな。保元の亂は、義朝と清盛との功によりて、天皇方の勝に歸しぬ。藤原氏なほ文權を握るも、武權は、全く源平二氏に歸したりしなり。

保元の亂より鎌倉時代へかけて朝廷を代表したまひたるは、後白河天皇(上皇法皇)なるが、聖明なる君にはあらず。此天皇が位に上り給ひてより、世を去り給ふまでの間に、保元の亂あり。平治

の亂あり。成親俊寛等の謀叛あり。頼政の兵を擧ぐるあり。清盛の暴逆あり。義仲の暴逆あり。頼朝の頼府の設立あり。天皇は清盛の爲に幽せられ給ひ、わが國の天皇が臣下の爲に幽せらるゝことこゝに生まれり。天皇は、勿體なくも、十善の御身を以て、清盛の女の難産の爲に、修験の僧の代理をつとめ給へり。神器なくして天皇の即位し給ふことも、はじめてこの天皇の時に起りたる現象なり。時勢の變遷止むを得ざる事とは云へ、天皇の不明、自ら招き給へるもの多きなり。

天皇不明にも、小才子の藤原信頼を寵し給ひけるが、信頼、つけあがりて近衛大將たらんことを乞ひたれど、藤原通憲諫止して許されず。源朝、保元の武勳は拔群なるも、榮達は却つて清盛に如かず。通憲と婚を結ばむとしたるも、通憲馬鹿にして之を斥けて、却つて清盛と婚を結べり。かくて、信頼、義朝共に通憲を恨みけるが、信頼は兵力なし。あまり利口ではなき義朝をそゝのかしで、其兵力をかりて兵を擧げて、通憲を殺せり。平治の亂、是なり。平生朝廷に跋扈せる藤原氏も兵亂起れば顔色なし。武門の力を借らざるを得ず。平清盛は、この際朝廷と藤原氏とに取りては、救世主なり。平治の亂は、實に清盛の力によりて平ぎたりき。

兵は、これ權なり。兵の必要なき太平の世ならばいざ知らず、兵の必要起るに及びては、武力あるもの政權を併有するに至るは、自然の勢なり。藤原氏の權力、終に平氏に移りぬ。かくて、平氏は天下を得たるが、如何にしてか天下を失ひたる。

前にも言ひたる如く、後白河天皇は不明の君なり。清盛は、保元に、平治に、大功ありこそすれ殺すべき程の罪跡なきに、平氏に對して恨をいだける成親等にそゝのかされて、その謀に興りて、清盛を除かむとし給ひたるは、人君の道にあらず。清盛怒りて、天皇を犯さむとしたるは、無理もなき事なり。されど、重盛が之を諫止したるは、更に最もなる事なり。清盛が天皇を犯すは、その理ありとするも、天皇を犯せばこれ叛臣なり。たとひ犯すだけの理由ありとするも天下の人心、之を許さざるなり。天皇とても既に成親の失敗に懲り給ひぬ。再びは容易に手を出し給はじ。清盛にして眞に子孫の計をなさむには、心に怒るも、陽に恭順ならざるべからず。然るに重盛死して諫むるもの無くなりて、後白河天皇を幽しぬ。かくて清盛の體憤は露れたるべけれど、これ却つて自家の保全策にあらずるなり。

白河法皇も、天下不如意の一到に教へ給ひけむ、當時南都北嶺の僧兵は、武門以外の一大勢力なりき。而して迷信ふかき世の事とて、兵力のみならず、一種宗教上の勢力あり。清盛は之をなつけむとするの策を講ぜずして、たゞ威力を以て之を壓倒せむとし、興福東大の二大寺を焼き、其所領を奪へり。かくて、南都の僧兵は少しへこみたるも、恨、骨髓に徹せり。北嶺の僧兵、なほ強梁にして、清盛も大にもてあませり。その都を福原に移したるも、一は僧兵を避けむとしたるに由れるなり。

源氏の華胄は、平治の亂に亡びたれど、その諸族は、諸國に散在せり。もと源平二氏相對立して武權を握りしに、平氏ひとり之を握にするに至りては、豈に不平なきを得むや。

之を要するに、清盛が政權上の失敗者藤原氏をして恨をいだかしめ、武權上の失敗者源氏の一族をして不平措く能はざらしむるは止むを得ずとするも、上、帝室を犯し、下、宗教の勢力を蔑にして、僧兵をなつけむとせず、朝敵となりしは、此上もなき失策なり。朝廷や、藤原氏や、源氏や、僧兵や、當時社會の水平線上にありたるものは、みな平氏の敵なり。機を見て起たむとす。平氏の榮華豈に久しきを得むや。

以仁王の令旨、一たび傳はるや、源氏の諸族忽ち諸國に蜂起せり。後白河天皇に取りては、闇黒長夜つきて、曉になりかけむとしたるなり。やがて、旭將軍木曾の山中より出づるに及びて、うれしや、夜全く明けて、朝日の光、今や天皇の身に及べり。北嶺の僧兵は、當時木曾義仲と平氏との間に於ける生きたる天王山なり。而して平氏を見限りて、義仲に附きければ、義仲は虎に翼を添へたるなり。天下一般に憎みたる平氏は、二十年の榮華を夢と見て、一門擧つて西海に落ちゆきしを小氣味よしと思ふ程もなく、義仲入り來りて、暴を以て暴に代へたり。否、その暴逆却つて平氏にまされり。よくよく不運なる後白河天皇かな。不運とは云へ、さきに清盛を激せしめたる如く、また義仲をも激せしめ給へり。吾人は清盛にも多少の同情を表し、義仲にも多少の同情を表す。天皇御不運をかこち給ふと共に、仁恵と智慮との無かりしことを悔い給はざるべからず。

千古の飛將、九郎判官來りて、義仲を殺し、平氏を亡したるも、その兄頼朝と隙ありて、于戈また動けり。あはれや、九郎の材武絶倫なるも、武運のつくる處、吉野の雪に、最愛の美人と手を分

ち、北陸に開行し、終に極北の露と消えたるが、其遺類諸國に在り。平氏の遺類も在り。世は兵力なき藤原氏にては治まらざるなり。

平清盛が池の尼の請を容れて頼朝を殺さざりしは、天下に主たるの度量あり。されど、之を東國に放ちしは、愚なるかな。東國は、六孫王以來、源氏の勢力を扶植したる地なり。殊に頼朝の父義朝の如きは、東海道十五國を領したりき。蛭が島をその名の如く孤島とや思ひけむ。頼朝を伊豆に流したるは、これ虎を竹藪に放つが如きなり。清盛の存命中頼朝果して兵を擧げぬ。東國響應しぬ清盛死に臨みて、遺言して曰く、『我が爲に經を誦し香花を供ふるを要せず。頼朝の首を斬つて我が墓前に懸けよ。われ以て瞑するを得む』と。されど、頼朝の首は、清盛の墓に懸かるべくもあらず。頼朝の威武關東を壓し、天下に及び、平氏を倒せり。義仲を亡せり。義經を殺せり。義經の遺類も平氏の遺類も、その他不逞の徒も、戈を收めて屏息せり。かくて、頼朝は上は天皇をして輶謁池にかへるの思をなきしめまゐらせ、下藤原氏をはじめとし、天下の蒼生をして、枕を高うして臥するを得しめたり。其武勳、前を空しうす。斷じてこれ當時の救世主と云ふべきなり。

知らず、頼朝は如何にしてか救世主たるの實をあぐることを得たる。

義仲は人を殺す術のみを知りたる田舎武士なり。清盛は腕白小僧の偉大なるものに過ぎず。頼朝は優に霸王の器なり。殊に世襲の制、文章博士の家に生れて、朝廷にありては、政治上に其力を伸すことを得ざりし千古の偉材、大江廣元を顧問としたれば、清盛や義仲のやうな間の抜けたることをせず。先づおもへらく、帝室は日本の土壘なり。尊敬せざるべからず。之を尊敬するは、天下の人心を得て、自家の榮ゆる所以なり。平氏が人心を失ひたるは、帝室に暴逆なりしことが大なる原因なりとて、帝室に對して尊敬の意を致せり。平氏と義仲との暴逆をもてあまし給ひたる朝廷は、忠順なる頼朝を得てはじめて愁眉をひらき給へり。曾て僧重源が頼朝に媚びて、書中、君と稱せしに、朝廷に對して恐多きことなりとて叱り戒めたるにても、ぬかりなかりし頼朝の志を見るべし。次におもへらく、我が國は神國なり。佛教入り來りて、神佛一となりて、天下の人心に大なる勢力あり。然るに、平氏は、神田寺戸を横奪したれば、神佛の威削をうけて亡びたるなりとて、朝廷に奏して、之を復せり。平氏の爲に荒されたりし南都の寺も、頼朝の力によりて、稍々舊觀に復する

を得たり。當時神佛を崇敬するは、帝室に忠なると共に、自家の榮ゆる所以なり。鎌倉時代に、禪宗入り、眞宗起り、日蓮宗起り、佛教界に大活動ありたるも、其もとは、頼朝の宗教を重んじたるに出でたるなり。頼朝はまた藤原氏など、朝廷の首官の機嫌を取らむとて、王公卿大夫の莊園にして平氏の爲に掠奪せられし者は、少しも私せずして、舊主にかへしければ、公卿こぞつて頼朝を有り難がれり。なほ頼朝は、武力のみを以て天下を壓せむとはせず、平氏の遺類にして非を悟りて順に歸するものは、宜しく其罪を許し給ふべしと奏して、うはへにもせよ、仁徳を天下に布けり。且つ下に對して賞罰正しく、武士を撫養せり。大番とて、諸國の武士は、徴せられて京師と鎌倉とをかため、三年にて交代せしが、頼朝は之を六箇月に短縮しければ、武士一般に頼朝を有り難がりしこと必せり。かく朝廷をはじめとして、公卿も、僧徒も、武士も、みなすべて頼朝を有り難がれりこれ頼朝が救世主の實を擧げたる所以なり。

既に救世主たるべき功勞あり。豈に報酬なかるべけんや。頼朝は鎌倉にありて、公卿はたゞ其風采を想望するのみならず、天下全く平ぐに及び、建久元年十月、はじめて朝覲す。公卿の人々待ちに待ちたるその容貌を見れば、短身にして、頭大なり。恰も、らつきようを立てたるが如し。平家の一門の如き好男子にあらず。されど、風度溫雅、音吐亮朗、進退度あり、沈毅にして、威嚴自ら備はり、同じ一門なれども、義仲の如き田舎武士的臭氣なし。朝廷は頼朝の功勞を稱して、權大納言に任じ、右近衛の大將を兼ねしめ給へり。頼朝のことを鎌倉右大將といふは、之に由るなり。然るに頼朝は翌月この二職を辭しぬ。嗚呼平將門は檢非違使たるを得ずして、兵を擧げたり。藤原信賴は近衛大將たるを得ずして、亂を起せり。平清盛は武門にして、はじめて太政大臣になれりと喜べり。然るに、頼朝はかゝる榮職を辭したり。而して自ら望みて總追捕使となりぬ。大功田百町を賜はれり。關東十箇國を管領し、守護地頭を總督せり。翌建久三年、勅使東下して征夷大將軍をさづけたり。

征夷大將軍、總地頭、總追捕使、その名は異なれども、其實は一なり。余は茲に此等の名目の何たるかを説くに先だちて、頼朝が幕府を起すに至れる事情を説かむとす。

頼朝は日本にてはじめて幕府を起したる人なり。これ頼朝が突然作り出したるものにあらず。天

下の時勢、自ら幕府を生み出したるなり。

いづれの國にても、はじめは封建政治なり。日本も、また之に洩れず。神武天皇、日本を統一し給ひたるが、諸國に國造あり。これ世襲して、その土地を私有したるものなり。降りて、藤原鎌足天智天皇を輔けて、大化の革新を起し、唐の郡縣制度を採りて、わが國の政體に大變動を來せり。かくて、國司郡領起りて、我が國は郡縣制度となりたるが、今日の郡縣制度の如くには完全ならず奈良朝の頃にも、我が國にては、貨幣一般に行はれず。寺院壯大、佛像燦爛として文明の光を放ちし帝都の下、人民はなほ市にて物と物と交換したりき。されど、當時の官吏には今日の官吏の如き月給はなく、月給の代に、土地を與へらるゝことありき。之を賜田と稱す。特に功勞あるものに賜はるを、功田と稱す。郡縣制度をはじめたる鎌足は、功田百町を賜はりたりき。これ百町を私有する小諸侯なり。佛教盛なるに及びて、寺田あり。その寺田だんく増して、平安朝の末には、一寺にて數千の僧兵を養ふだけの領地ありたるなり。奈良朝のはじめ、殖産を奨励し給はむとて、開墾田といふもの出來たり。新に田畝を開墾するものは、之を私有するを得たるなり。折角殖産を興さむとし給ふも、私有せられては、さつぱり朝廷の利益にはならず。賜田、功田、寺田は、一寸得難きも、開墾田は鉄一つあれば、誰でも得らるゝものなれば、人々争うて土地を開墾し、年を経るに従つて、非常に多くなりたり。

賜田、功田、寺田、開墾田の四者、殊に開墾田は、平安朝に入りて莊園となれり。莊園は朝廷の貴顯もしくは土豪の私有にして、租税を輸せず。莊園多くなれば、朝廷の收入を減ずるわけなり。延喜以後、莊園の弊甚し。藤原時平、鋭意其弊を除かむとしたるが、そはたい、一時、庭の雜草を芟りたるまでの事にて、十數日たつ程に、草また繁りて、莊園ますます多く開かれぬ。後三條天皇大に手入れし給ひたれど、それも一時なりき。鳥羽天皇の頃には、官有の土地、全國の百分の一にして、餘の百分の九十九は莊園なりき。朝廷の衰微せるも、自然の數なり。藤原氏は道長に至りて最も榮華を極めけるが、その一家の所領、朝廷のよりも多かりき。源義朝は、東海道十五國を領したりき。平治の亂、尾張にぐずぐずせず、直に關東に赴き、土を捲いて重來せば、勝敗は未だ知るべからざりしなり。平清盛に至りては、其一家の莊園五百餘箇所にて、幾んど日本の半を領せり

されば、平安朝の末には、郡縣制度の行はれしは、日本國土の百分の一なり。それも國司は京都にありて、任地に下らず。目代をして代りて治めしめたれば、郡縣制度は、幾んど其實なかりきと云ひて可なり。

賴朝、平氏の軍を富士川に破りて、居を鎌倉に占めし時、父義朝の舊領の手に入りしは、自明の事なり。政所マシロを設けぬ。これ後には幕府の内閣になりたるが、賴朝がはじめて起したるものにあらず。これより先き、藤原氏政所を設けて、おもに莊園の事を取りあつかひしなり。明法家の三善康信、賴朝と縁故あり。この際、大江廣元、廣元の實弟中原親能と共に、鎌倉に來れり。政所はじめは公文所クモンと稱す。元暦元年に創め、建久二年に政所と改稱せり。その創まりし時、廣元その別當となり、親能その寄人となれり。賴朝之と同時に、侍所を置き、和田義盛を別當とせり。又問注所を置きて、三善康信をその執事とせり。今日の官制にて云へば、問注所は司法省、裁判所を合したるもの、侍所は海陸軍省、政所は他の諸省にして、兼ねて内閣なり。かくて、賴朝はその領地の事を支配せり。この際、賴朝は一の大なる莊園の主に過ぎず。

義經奔竄し、平氏の遺類も諸國にありて、天下騷然たりし時、賴朝は廣元の入れ智恵にて、請ひ奏して曰く、『諸國に守護を置き、莊園に地頭を置きて、治を圖らむ』と。後白河天皇心にいなみ給ひたれども、公卿みな賴朝の意を迎へむとするを以て、いやくながら許し給へり。守護は、謀反人、殺害人、及び盜賊を捕縛し、京鎌倉の大番役を催督する役なり。地頭は、莊園の收税を司る役なり。共にすべて賴朝の家人を以て之に任じ、人民より段別に五升の米を出さしめて、守護、地頭の所得とせり。地頭には、別に給田ありたり。守護は、はじめ追捕使といへり。なほ公文所が改まりて政所となりたるが如し。賴朝は守護と地頭とを總督せるを以て、總追捕使(總守護)にして、兼ねて總地頭なり。

守護は、兵務の官にして、はじめは任期ありしが、後、世襲するやうになれり。地頭は、財務の官にて、はじめより世襲せり。賴朝は此二者を總督するを以て、天下の權、自ら賴朝に歸するは知れ切つたる事なり。後白河天皇のいやり給ひしも、最も千萬なり。されど、守護地頭なくては、當時の天下が治まらざりしなり。且つこの二者も賴朝がはじめたるにあらず。平安朝の半頃、兵亂

起るにつれて、諸國に追捕使を置きたることあり。一郡にも、一荘にも、置けり。その一國を統ぶるものを總追捕使といへり。又押領使といふものありき。これは兵亂の際、衆民を率ゐて出軍するもの、稱なりしが、後には追捕使と同じ役をするやうになれり。時勢に適應してかゝる役目ありたれば、頼朝が諸國に追捕使を置き、自ら總追捕使となりしは、時勢上必要なりし事なり。總追捕使の名目は、在來貴きものにあらず。而して頼朝大臣を望まず、大將を辭して、かゝる名の賤しき役につき、名をすて、實を取り、天下の實權を握らむとす。嗚へぬ人といふべし。地頭も、頼朝が始めて起したるものにあらず。諸國の莊司、代官などをさして云ふより起れり。收税を専務としけるが、追捕のことを兼ねたり。平家西奔したる時、朝廷には義經を九州の地頭に補し給ひたることありき。されば頼朝が請うて諸國に守護地頭を置き、その家人を之に任じたる時、義經の地頭を口實として、自ら總地頭ならむことを請ひたるが、朝廷ではいやとは云へざるなり。後、權大納言右近衛大將に任ぜられたるも、之を辭し、その代に總追捕使(總守護)とならむことを請ひたるが、これもいやとは云へざるなり。

これで、頼朝は十分なるに、朝廷は更に頼朝を征夷大將軍に任ぜり。この名目は、坂上田村麿など叛賊を征伐するものに與へたるものにて、その後絶えてなかりしに、義仲が亂暴しける時、しばし飭しやぶらせむとて、之に任じ給ひしが、今また之を頼朝に加へ給へるなり。征夷大將軍は、頼朝に至りて、其性質をかへたり。勅使必ず來り授く。之を將軍宣下と稱す。而して平安朝時代、攝政關白が藤原氏の專有なりし如く、後世將軍は源氏の專有となれり。秀吉も將軍たらむことを望みしが、源氏にあらざればとて、止むを得ず關白になりたりき。

かく頼朝は幕府を創めたるも、後世の徳川氏とは、稍々その有様を異にせり。平安朝の世、實際は封建政治なるも、なほ郡縣制度の行はれし處もあり。頼朝の時に至りても、全く之を絶ちたるにあらず。國には矢張國司ありき、朝廷の直轄なり。莊園は領家政を布けり。守護地頭は、頼朝の手下なるも、これが諸國莊園を專領したりしにあらず。されば、當時朝廷の記録所、攝家の政所、鎌倉の政所の三所より、政令が出でたるわけなり。なほ朝廷の威も、頼朝の權も、及ばざる所あり。即ち寺領これなり。之を守護不入の地と稱す。

頼朝は關東十國を領し、諸國の守護莊園を總督したるまでにて、徳川氏の如く、天下を掩有したりしにあらず。されど、収入も、實際の権力も、遂に朝廷にまさりたり。殊に後に至りて、守護地頭が諸國莊園を奪ひて、幕府の範圍ひろまり、承久の亂後は、益々ひろまりて、頼朝の時とは、大に觀を異にするに至りたるなり。

頼朝が幕府を起して朝廷の權を削きたるは、目新しきやうなるが、唯藤原氏が代々攝關としてやりたる事を、將軍としてやりたるぐらゐの事なり。前にも言ひたる如く、頼朝が幕府をはじめたるにあらず。當時の時勢自ら幕府を起したるなり。實際は封建の世となり居りて、動もすれば干戈を執らむとするの世の中、とても藤原氏にては治まらず、頼朝の事業は、春秋の世に晉の文公、齊の桓公などが霸業を起したるが如し。孔子桓公の霸業を輔けたる管仲を賞賛して曰く、「管仲なかりせば、われ左衽せむ」と。頼朝なかりせば、當時の亂或は底止する所を知らざりしなるべし。また幕府なかりせば、元寇の時、どんなひどい目に逢ひしかも知るべからざるなり。

北畠親房以後、史家多く頼朝の功勞を稱す。されど、その人となりは、或は殘忍なりと云ひ、或は酷薄なりと云ひて、けなすもの、多きが如し。一言辯ずる所なかるべからず。

頼朝は、弟を殺し、叔父を追ひ、一門の義仲を殺し、功臣を殺して、不仁の所業多し。然れどもこれは子孫の計をなすに止むを得ざるなり。小恩にも酬ゆるに急なる代に、小怨をもたゞは置かぬ頼朝の氣象の然らしむる所なり。又事ここに出でざるを得ざる事情もありしなり。まづ義經に就いて言はむに、義經は兵を用ゐること神の如き名將なれども、心は善良なりとも覺えず。その建禮門院を姦せしが如きは、血氣盛の若武士として怒すべしとするも、度々頼朝の節度に從はず、兄に先んじて昇殿し、その部下京畿を掠略して、幾んど義仲の二代目に類するものあり。嚴正なる頼朝をして怒らしめたるも、無理ならぬことなり。生かして置けば、頼朝の子孫に對して如何なる害を加ふるかも知れざるなり。範頼はうすのろなり。生かして置いても差支はなけれど、頼朝が富士の牧狩の際、頼朝死せりとの流言を聞きて、政子に向ひて、我あり安んぜよとの、とんまな失言は、嚴正なる頼朝の氣象、瘡にさはつてたまらざるなり。必ず恩に酬ゆる代に、必ず恨をほらさずんば止まざるは、頼朝の氣質、短所と云へば短所なれど、長所と云へば長所なり。自己の命を助けてくれ

たる池の尼の子平頼盛を厚遇せしを始とし、恩に酬いためし、頼る多し。恩と云へば、敵味方を問はず。恨と云へば、また敵味方を問はず。兄弟をも問はざるなり。されど、敵と見れば、必ず殺すが如き残忍なる人にあらず。又全く涙なき人にもあらず。平維盛の子の命をたすけてやりたるが如き、平重衡をたすけむとせしが如き、己を殺さむとてあばれ込みし會我五郎の勇氣を愛して、之を許さむとせしが如き、以て之を誣すべし。はじめ頼朝が兵を擧げし時、首藤經俊、敵にありて、頼朝の鎧を射たり。例の頼朝なれば、この恨一生忘るべくもあらず。經俊捕へらる。頼朝之を殺さむとす。經俊の母は、頼朝の乳母なり。父祖の舊功を説きて、助命を乞ふ。頼朝、櫃の中より鎧を出せば、當年經俊が射たる矢、なほ立てり。母之を見て亦言はず。涙を忍んで起つ。頼朝見て、あはれに思ひて、之を許したり。以て全く涙なき人にあらざるを知るべし。

頼朝は、聖人にあらざれば、君子にもあらず。その氣質も高潔洒脱の域には遠けれども、浮世に活動するには、よく適當せり。政治家の性格として其特長を見る。頼朝のやうな人ならば、天下は取れざるなり。はじめ兵を擧げし時、大事は北條時政にのみ圖りたるも、將士を別々にその室に呼びて、頼むに、努力してくれよと頼みたるが如き、その喰へぬ人にして、人心を得るに巧なりしことを知るべし。石橋山に一敗し、安房に再興し、漸く三千の兵を得たりし時、千葉常胤、一萬の兵を以て來り會せしに、頼朝その來るの遲きを怒りて、いたく、之を叱りつけたるが如き、優に天下に翻たるの膽氣あるものと謂ふべし。己を持することも嚴正、人に對することも嚴正なりしかど妻や子に對しては、甘く、のろく、一生政子の尼の尻に敷かれたるが如し。富士の牧狩せし時、子の頼家年十二、感心にも、鹿を射たり。子煩惱の頼朝、うれしくてたまらず。わざと之を政子に知らせけるに、將家の子なり、鹿を射るくらゐは當然の事なりとて、鼻の先にてあしらひけりといふ。さすがに尼將軍なり。

なほ一言、頼朝の功勞をのべしめよ。我が國の武士道は、鎌倉時代に最も發達したるものなるが頼朝實に之が中心になりたり。質素儉約を主とし、武術に熱中し、主従互に恩義を重んじ、然諾を守り、死生相結托し、卑怯未練の所行なく、粗忽尾籠の舉動なきなど、武士道の精粹は、頼朝の唱導するのみならず、自ら實踐して、鎌倉武士を感化せし所なり。所謂右大將家の遺法遺教は、鎌倉

百五十年の人心を支配せり。頼朝の武士道に於けるは、なほ周公の儒教に於けるが如し。頼朝は帝に政治上の救世主なりしのみならず、かねて當時の武士の精神上の救世主なりしなり。

鎌倉時代の三名僧

鎌倉の初、時を同じうして、一風かはれる三人の名僧いてたり。文覚、西行、長明、是なり。いづれも、宗教を目的として、頭をそりたるものにあらず。長明は、祠官の子なり。然るに、世襲の祠官に任ずるを得ざるより、不平を起し、厭世の念を起して、僧となれり。文覚は、武士なり。誤つて美人袈裟を斬りて、無常を感じたるか、申譯の爲なりしか、甲をすて、袈裟をまとへり。西行も武士なり。その僧となりし理由は、明ならされども、北面の武士の地位にありて、満腔の不平、抑へがたきものありしなるべし。僧となるの理由は、それ／＼異なれども、遁世せむ爲なることは一なり。佛理をきはむるでもなく、布教をも意とせざりしことも一なり。されど、その人となりは、大に異なり、従つて同じく佛教に歸するも、安心する所以の點も、亦

異なりぬ。長明は、父祖世襲の祠官となることを一生の目的とせしだけの男にて、其人物も小さくその目的も小さく、従つて不平も小さく、又従つて安心立命を得易く、殊勝げに悟り切つて、方丈の菴に住へり。文覚は、満身すべて熱血と膽氣、とても佛前に醜經してのみ居らるべき男にあらず。往いて那智千丈の瀧にうたれ、大膽にも法皇の殿中に強請し、平氏の盛なるや、頼朝をおだて、兵を起さしめ、源氏の世となるや、平家の遺子を庇護し、終に謀叛を起さむとするに及びて、配流せられたり。西行は文覚の如くに俗ならず。長明の如くに枯淡ならず。彼が満腔の雄心は、之を俗塵の外に轉じたるも、一室に枯坐せむには、餘に情感ありする人なり。日本國中をあるきまはり、和歌にうき身をやつして、それで漸く一生を了するを得たり。之を文覚に比するに、活氣あることは、同じなれども、唯その活氣の向け所、異にして、一は俗、一は雅なりしなり。

之を譬ふれば、長明は、猫なり。文覚は、虎なり。西行は、馬なり。長明がおとなしく悟り切りて、小菴の外にうきかさりしは、猫が殘肴に飽きて、爐畔に眠るが如し。これ猫の性なり。之に反して、文覚は、猛烈此上もなき豪傑なり。到底、おとなしくなりて居られず。虎が家には飼はれず

高く山月に嘯きて、自ら快とするが如し。これ虎の性なり。西行は、千里を走るの資あるも、文藝を好むが羈絆となりて、外面だけは、おとなし。駿馬の槽檻の間につながるゝが如し。羈なくんば逸出して千里の野に飛躍せむとす。これ馬の性なり。

猫をして猫たらしめよ。虎、馬をして、虎、馬たらしみよ。人は、その性の適する所、長明たるも可なり。西行たるも可なり。文覺たるも、亦可なり。

貞永式目と北條泰時

國家ありて、而して後に被治者との關係あり。治者と被治者との關係ありて、而して後に法律なるもの起る。法律の國家か。國家の法律か。美なる國家にして、茲に美なる法律あり。美なる法律にして、茲に美なる國家あり。法律の國家に於けるは、聲の響に於ける、形の影に於けるも齊ならず。法律を見て國家の状態を見るべし。王朝時代に成りたる大寶令には自ら王朝の主權あり。武家時代に成りたる貞永式目にも、豈にまた武家の主權なからんや。

上古簡樸の世には、一に風俗慣習を本として、制裁を加へたれば、法律渾べて不文律なり。推古天皇の十年、皇太子厩戸自ら憲法十七條を作られたるに由りて、成文の法典の端緒始めて起りぬ。天智天皇の元年、藤原鎌足等、詔を奉じて唐制を參照し、孝徳天皇の朝の舊章を増減して新律令を作り、天武天皇の朝、更に増減する所あり。持統天皇の三年に至りて頒たれぬ。近江令と稱するもの、即ち是なり。文武天皇四年、藤原不比等、詔を奉じて近江令を増減し、大寶元年其事畢り、同二年に至りて天下に施行せられぬ。大寶令と稱するもの即ち是なり。後元正天皇の養老二年に改正する所あり、桓武天皇の延暦十年にも改正する所ありたれども、大寶の制と幾んど異なることなし。賴朝政を執るに及んで、其法律の如きも、王朝制度と其趣を異にしたるものありたれども、未だ成文となすに至らざりき。北條泰時に至りて賴朝の遺法と、王朝の律令とを參照して、茲に貞永式目を作り、以て武家法律の端緒を開けり。されば我が國固有の法度と唐土の法度とを融和混同して大寶の律令成り、大寶の律令と武家の慣例とを調和斟酌して貞永式目成れり。我が國固有の法規は茲に之を言はず。唐土より移し來りたる法規も茲に之を言はず。王朝の律令も茲に之を言はず。特に

武家の主義慣例の發表せられたる貞永式目に就いて言はむとするなり。

武家の政治は頼朝に始まりて、北條氏に成りぬ。北條氏天下を經理したる績大に見るべきものあり。彼れ門閥の蓄あるにあらざるなり。位官の高あるにあらざるなり。領地の大あるにあらざるなり。彼れ實に陪臣の身を以て天下の實權を掌握し、九代數百年、人心能く之に歸向して、政治實に金匱無缺の觀あり。殊に彼は萬乘の至尊を蒙塵せしめ奉りたるなり。主人の家國を暗に押領したるなり。其罪や實に大なり。然れども能く之を九代の久しきに傳へたるものは、實に其故なくんばあらず。他なし、其政治律令の大に人心を得たるものあればなり。

北條氏九代の中に第一の政治家と稱すべきものは、實に北條泰時なり。而して彼は貞永式目制定者の主人公なるを以て、茲に其性行の一斑を知り置くも、決して無益の事にはあらざるべし。彼は古今有数の政治家なれども、陰謀詭譎、天下を籠絡し、私利を壟斷するが如き、當世流の政治家にあらず。廉直自ら持し、恭儉人になり、恩威並び施して、所謂赤心を他の腹中に置くの風あり。武家に生れたれども、好んで書を讀み、道を講じ、吏務繁忙の間手なほ書を措かず、諄々人に教へ

て倦まず。本朝通鑑に曰へるあり、『泰時生而穎悟、其性仁惠、親族和睦、僚屬懷德、好學恭謹、節用愛人、執東關之權、以天下爲憂、式日本國大用文貞永式目、而後守護不犯國司、地頭不侮領家、天下大治』と。それ既に此の如し。其實を易ふるや、天下恰も父母を喪ひたる思をなし、頼朝も之を惜しみ、鎌倉の武士も鬼の目に追慕の涙を漲らし、殊に北條朝時、足利義氏、北條時盛等、悲嘆に堪へずして剃髮したるも決して偶然にあらぬなり。

泰時の人となりは、上に述べたるが如し。其訟を聴き、法を行ふに至りては、前を空しうし、後を絶ち、斷じて宇宙間有数の裁判官たり。權威を憚からず、怨恨を顧みず、唯法の適する所を執り毅然として動かさること山岳も畜ならず、機敏明察、直を護し、奸を發き、大河滾々、一瀉千里の觀あり。泰時はそれ仁者か、はた智者か。其實を重くしたるは、勸善慈愛の意殊に切なるを知るべし。其刑を重くしたるは懲惡制裁の理、武士標悍、風俗粗豪の世に於て、自ら然らざるを得ざればなり。

泰時が政治家たるの資格も説き了りぬ。其裁判官たるの主義もまた説き了りぬ。是に於て少しく

實例を擧げて、以て如何に律令を應用したるかを見るも、徒勞にはあらざるべし。武田信光曾て海野幸氏と界を争ひけるに、幸氏直なりければ、其の地を與へたり。或人、告げて曰く、信光、公を啣むといひければ、怨を畏れて決せずんば、何ぞ執權に取らむとて、顧みざりける程に、信光之を聞いて自ら懼れ、書を效して他なきを誓ひたりといふ。洵に心事公明正大、俯仰天地に恥ぢざるものといふべし。或る時來り訟ふるものあり。泰時二人の顔を顧み、愁然として聽して曰く、泰時天下の政を執り、姦曲なからしめむと欲す。今卿等二人みな廉直ならば即ち訴なからむ。然れども訴あれば則ち其一は必ず姦曲の人なり。一姦だも國にあれば、萬民の不幸にして天下の仇とする所なり。卿等他日證文を持ち來りて、而して、若し姦曲なるものあらば、則ち罪に陥れんのみと言ひければ、二人のもの退いて相語つて言ひけらく、武牧公正、事を枉ぐべからずとて、その非なるもの自ら悔いて其訴を止めたりといふ。是れ兵家に所謂戦はずして勝つもの、法律を濫用せざる賢意、實に欽すべきなり。又或る時、下總國に、一地頭職、領家の官吏と事を論じて鎌倉に訴ふるものありて、泰時及び評定衆之を檢斷す。官吏先づ訴へけるに、その言理ありければ、地頭之を聞きて、

手を拍ちて、泰時に謂ひけらく、某負けたり、某負けたり、と云ひければ、衆皆、抱腹絶倒しけるに、泰時獨り容を改めて、嘆賞して曰く、卿の自ら以て負けたりとするは洵に善きことなり。泰時政を預ること茲に年あれども、之を訴ふるもの無理多く、皆言を託して詐を飾る。未だ卿の如く理に従つて服し、敢て解陳せざるものあらず。卿はこれ質直の人なり。官吏の言ふ所固より理あれども、地頭の意を解するものなき故に、矛盾する所あり。今明に之を察すれば、地頭もまた罪なし。且つ其言直なりとて、官吏を諭して地頭三年の租税を免ぜしめたりといふ。明察善斷何ぞ一に此に至れるや。北條配下の人民、實に多幸なりきといふべし。嗚呼泰時既に逝きぬ。青砥藤綱、大岡越前守の徒また世に出でず。法官自ら法網を潜り、苞苴詭騙、醜陋紛々として掩ふべからず。都門白日、百鬼夜行の姿を呈して能く之を制裁するものなし。澆季の社會、浮薄の人情、切齒扼腕するも愚なる次第なり。

貞永式目、既に成文法となりたれども、現今の法律のごとく之を天下に發表したるにはあらず。たゞ有司者に據る處を授けたるものなり。頼山陽曰はく、『貞永元年、泰時與三善康連議、立式目

十條以資聽斷」と。眞に然り。たゞ聽の資となしたるなり。しかれども泰時等法を行ふにさきだち、起請文を作りて相誓ひ、『若し一事たりと雖も、曲折を存し、違犯せしむれば、梵天帝釋、四大天王、惣日本國中六十餘州の大小神祇、殊に、伊豆箱根兩所権現、三島大明神、八幡大菩薩、天満大自在天神、部類眷屬、神罰冥罰、各罷り蒙るべきなり』とて、至誠を天地神明に誓ふ。其心事實に察すべきなり。

起請文既に天地神明に誓へるを見ても、當時宗教心の盛なりしことを知るに足るべし。蓋し、宗教心は天地奇幻の現象に驚怖するに起りて、安心立命の地を得るに歸着す。安心立命は何れの時、如何なる人にも必要なれども、戦鬪殺伐、兵馬倥傯、積屍山を築き、腥血梓を漂すの時、最も之を要し、戈を枕にして野外の月に眠り、君命重く自命軽くして、一生を萬死の間に賭する武士、殊に之を要するなり。さればオットマン、トルコの武士の回教に於ける、コロンウエルの部下の清教に於ける、宗教の熱心、勇敢の士氣を融化复合して、猛烈無雙なりしも偶然にあらず。我が封建の武士の宗教に於けるもまた然るものあり。泰時のごときは書を讀み、理を解して宗教を盲信せざれども、當時の人情を察して大に宗教心を鼓舞したり。貞永式目、開卷劈頭、先づ敬神の條規を設けて曰く、『右神は人の敬に依て威を増し、人は神の徳に依て運を添ふ、然れば則ち恒例の祭祀陵夷を致さず、如在の禮怠怠慢せしむることなかれ。茲に因て、關東御分國々并に庄園に於ては、地頭神主等各其趣を存して精誠を致すべきなり。兼て又封ある社に至ては、代々の符に任せて、小破の時且つ修理を加へ、若し大破に及び、子細を言上せしむれば、其左右に隨ひて其沙汰あるべし』と。第二條には崇佛の條規を設けて曰く、『右社異なりと雖も、崇敬是同じ、仍て修造の功、恒例の勤、宜しく先條に准じて後勤を招くことなかるべし。但し、寺用を食り、其役を勤めざるの輩に於ては、早く彼職を改易せしむべし』と。其人を化することまた巧なりといふべし。

南山の竹園

一 後醍醐天皇の諸皇子

嗚呼、承久の役、皇師利あらず、後鳥羽、土御門、順徳の三上皇、勿體なくも、萬乘の御身にし

て、罪なくて、配所の月を見給ひしこそ、なげかはしきことの限なりけれ。土御門上皇は全く其謀にあづかり給はず、却つて諫め給ひしことを聞きて、北條氏之を徳として、天子に立てまつりたる其皇子は、即ち後嵯峨天皇なり。天皇の二皇子ついて相立ち給へり。後深草天皇となし、龜山天皇となす。龜山天皇英毅におはしければ、後嵯峨天皇いたく愛し給ひ、詔して、その子孫をして皇統をつがしめ、後深草天皇には、その代に長講堂領を賜ひて、其子孫をして之を傳へしめ給ひぬ。後深草天皇の後を持明院派と稱し、龜山天皇の後を大覺寺派と稱す。これ皇統交立の因つて起る所にして、終に南北朝兩立のわざはひを醸すに至れり。

後嵯峨天皇の望を屬し給ひしもうべや、持明院派に英主なかりしにひきかへて、大覺寺派は、みな英主なり。龜山天皇、後宇多天皇、後醍醐天皇など、我が國列聖中にも、ことにすぐれ給へり。後宇多天皇の如きは、後三條天皇以後の明君と稱せられ給ひぬ。而して後醍醐天皇にいたりて機いよく熟して、北條氏を亡して、後鳥羽天皇の鬱憤をばらし給へり。建武中興、即ち是なり。

後醍醐天皇の諸皇子も、さすがに、大覺寺派の血統をうけて、おほくみな英毅なり。されど、天乎、命乎、南風競はず、非命に斃れ給ひし者多かりしこそ悲しけれ。

後醍醐天皇の後妃頗る多く、皇子また従つて多く、皇子皇女ほとんど四十人に及べり。その中で、最も英毅にして、よく大覺寺派を代表し給へるは、護良親王なり。後鳥羽、土御門、順徳の上皇、とりわけて和歌にすぐれ給ひしが、後醍醐天皇の皇子の中にては、宗良親王最もよく之を代表し給へり。かの新葉集を選び給ひしは、實にこの宗良親王なり。而してこの親王は、征東將軍となりて、東國に下り給ひ、懷良親王は征西將軍となりて、九州に下りて苦戦し給へり。尊良親王は、金崎城にて新田義顯と共に自害し給ひ、恒良、成良の二親王は、足利氏の爲に毒殺せられ給ひ、護良親王も、恒性法親王もまた賊のために害せられ給へり。悲惨なるかな。僧となり給ひし皇子少からざる中に、満良親王は、僧となりて無文元選禪師と改め、支那にまでもわたり給へり。后妃の中にて、藤原廉子最も寵愛をうけ、隠岐にまでも従ひまつれり。而して太子に立ちしは、みなその生める所、恒良親王さきに立ち給ひ、成良親王のちに立ち給ひしが、或は害せられ、或は廢せられて後害せられ給ひぬ。最後に義成親王立ち給へり。後村上天皇即ち是なり。

元弘の變、後鳥羽天皇以來の鬱憤をはらし給はむとし給ひしに、却つて皇軍利を失ひ、承久の覆轍を踏み給ひし時の、後醍醐天皇の御心の中や如何なりけむ。處もあるべきに、曾て後鳥羽天皇が千古の恨を残して崩じ給ひし隠岐が島、また同じく後醍醐天皇の配所となりぬ。見渡す限り、蒼海漫々たり。燕去れども、之に従ふこと能はず。雁來れども都のおとづれもなし。荒磯にくたくる波のたちかへるにも、御心をなやまし、板屋うつあられにも、まづ御袖をぬらし給ふ。あはれは、ひとり天皇の上のみならず、諸皇子も、桓山四鳥の恨をまぬがれ給ふこと能はず。護良親王は、南都に、吉野に、いくたびか虎の尾をふんで、わづかに一命を全うし給ひ、尊良親王は、土佐に流され給へり。『せきとむるしがらみぞなき涙川いかに流るゝうき身なるらむ』とよみ給ひしこそあはれなれ。恒良親王は、この時わづかに八歳、中御門宜明にあづけられて、都に残り給ひぬ。いと聰明におはせり。天皇いまだ隠岐にうつらさせたまはて、洛外の白川に幽せられ給ひしほど、宜明に向ひて、『我を白川に具して、今一度父君に對面せさせよ』と仰せられければ、『都近き處ならば、いと易きことなれど、能因法師の歌にも「都をば霞と共に出てしかど秋風ぞ吹く白河の關」とあるが

如く、白川と申すは、こゝより數百里へだよりたる處なれば、この儀ばかりは、思ひとゞまらせ給へ』と答へ申す。親王きよてほろくと涙をこぼし、何とも仰せ出さるゝことなかりしが、しばらくありて、『やよ宜明、われをば見すまじと思ひてまらとほけたる空言を言ふならむ。名は同じ白川なれど、能因法師のよみたるは、奥州の白河、わが言ふ處は、都の外なる白川なり。津守國夏の歌に、「東路の關まで行かぬ白川も日數へぬれば秋風ぞ吹く」とあり。藤原教經の歌にも「なれくて見しはなごりの春ぞともなど白川の花の下陸」とあるを知らずや。具することかなはざるものならば、強ひては請はじ』とて、これより後は、おくびにも出し給はず、たゞ打沈みてのみぞおはしける。或る夕、中門に立たせたまひて、白川はかなたの空かと、心あてに眺め給ふ。花は紅に、柳は綠なる春のものかなれど、夕陽西に傾きて、その光力なく、くれがたの景色何となくあはれなるに、入相つぐる遠寺の鐘遙に聞えければ、

つくぐと思ひくらし入相の鐘を聞くにも君ぞ戀しき

とよませ給ひける。御父を慕ひたまふ眞情あらはれて、いとあはれなる歌なり。當時都の人々、こ

れを疊紙、扇などにかきつけて、八歳の宮の御歌とて、珍重しけるとかや。

姫御子に、瓊子内親王と申すがおはせり。いづくまでも父君に従ひ行かむとて、宮女のさまにつくりかへて、なれぬ旅路に立ち出て給ふ。驛路の鈴聲、曉の夢を破り、孤村の雨の音、夜の衣をうるほす。幾重の白雲をふみわけて、中國山脈の險をも越え、日數つもりて、こゝは早伯耆の國、美保關より船出するも遠からじと、孤島に幽せらるゝ憂さも、長の旅路のくるしみに消えて、却つてその近くなれるを喜び給ふ甲斐なく、はしなくも誓固の武士に見あらはされ給ひぬ。ものゝあはれを知れるものゝふならばこそ、兒島高德が櫻樹にかきつけし十字の詩をも解し得ぬ東夷のやから、内親王をとめて、御駕に従はせまつらす。あゝ如何せむ、今更都へもかへられず。さらばとて、隠岐の國に飛びゆかむ翼もなし。數百里外の僻陬の地に、血の涙を灑いて父にわかれ、行くさき長き花の御身を墨染の衣につゝませ給ひ、緑の黒髪そりおとして、こゝに安養寺をたて給へり。風雨五百年、その寺今もなほ伯耆の名港米子の南一里ばかりの處にあり。内親王の御墓も、寺の域内に存す。むかしを思へば、自ら涙を催さるゝ處なり。

余はおもに第一の皇子尊良親王と第三の皇子護良親王とに就いて語らむとす。その御最期いづれも悲惨の極にして、痛歎に堪へざればなり。

二 尊良親王

余曾て敦賀を過ぎて金崎城址を訪ひ、昔を懐うて、涙にむせびたりき。敦賀何の地ぞ。官軍、賊にかこまれて、終に支ふること能はず、尊良親王、新田義顯と共に自害し給ひし處にあらずや。一字の神社、親王の威靈をとめて、碧血痕なし。千歳の下、なほ人をして悲歎措く能はざらしむ。偕老の契ふかゝりし御息所が御心の中や如何なりけむ。

尊良親王は、後醍醐天皇第一の皇子なり。才學世にすぐれ、容貌もいと秀麗におはす。必ず太子に立ち給はむと、百官望を屬しけるに、兩統交立の災は、今に及び、後二條天皇の第一の皇子立ち給へり。親王世をあぢきなくおぼしめし、たゞ風月に吟嘯して、孤獨の生活を送り給ひけるが、或る時、賀茂の糺の宮に詣て給ひ、黄昏一犁の雨に、御車いそがせて歸りたまふに、今出河公顯のやしきの中にて琵琶の音す。あまりのゆかしさに、御車をとめて、かいまみ給ひければ、雨の名残

の雲はれて、さすもかすけき夕月の影、簾内に一個の美人をあらはし出せり。天女天降りて、音楽を奏するかとばかり思はれて、木石ならぬ御身の、御心いと亂れしこそわりなけれ。

これより後は、たゞその美人の事のみ思ひしのび給ひて、ものや思ふと人に問はるゝまでの戀路にあくがれ給ひぬ。常に和歌の會に来れる二條左中將、それとさとり、親王に向ひて、『賀茂のかへるさの夕月の影をしのび給ふにや。かの美人は、今出河右大臣公顯の女にて、徳大寺左大將と結納の約あれど、未だ結婚せず。御所望ならば、歌の會に事よせて其家に赴き給ひ、心のたけをかたらせ給へ』といふ。親王大に喜びてその事今出河右大臣に仰せやり給ふ。右大臣かたじけなしとて、歌よむ人どもつとへて親王を案内しまゐらす。親王の本意は歌にあらねば、たゞ讀みあげしばかりにて、批判はし給はず。歌會終りて、酒宴となりぬ。羽觴いくたびか飛んで、主人の右大臣、いつしか玉山倒れぬ。親王もいたく酔ひて、うちふし給ひぬ。かくて宴散じて、夜はたけなはになりけり。ひとり心ありて酔はざりける戀の媒の二條左中將、時分はよしと、親王を尋いて、かの美人の任める西の對へしのびせまゐらす。影かすかなる蘭燈の下、美人未だ眠らず。今日よみたる人々の

歌の短冊取り出して、よみ入りたる額付いと艶に、鬢のほつれ毛、にはへる頬のあたりにすがりて趣たゞならず。親王の入れせ給ふを見て驚けるにもあらず、やゝ恥ぢらひたるけしきにて、衣かづきて打伏す。親王より添ひて、心のたけを語り給へども、女更にいらへせず、たゞ人を惱殺する鼻息ばかりかすかに音す。しなやかなる青柳の絲、春風にゆらげど、全くなびきも果てず。親王、心ますくみだれて、かきくどき給ふ程に、雞の聲、早くも曉を告げぬ。今は證方なく、つれなくも残れる有明の月に送られ、道芝の露にしほたれて歸らせ給へり。

されど、なほ思ひあきらめ給ふこと能はず、思のたけを筆によせて、數もしらず、文を送り給ひたれど、細谷川の丸木橋、たゞ袖ぬるゝばかりなり。幾月かは夢の中に過ぎ去れり。式部少輔英房親王に侍して、貞觀政要を講じたるが、むかし唐の太宗、鄭仁基の女を後宮に入れむとし給ひしにその女は既に陸氏の約したる身なりと、魏徴の諫めければ、太宗ふつと思ひとゞまり給へりなど物語る。親王聞きて、長き闇の夜のあげたる心地し給ひ、などて我のみは思ひ斷つこと能はざるぞとて、心の中にのみ忍びたまひて、文送り給ふことは、絶えてなかりけり。徳大寺左大將、此事を聞

き、恐れ多き事なりとて、粹をきかして、他の女に通へり。今は主なき花なりとて、久しぶりに、文を送り給ひ、その奥に、

知らせばや鹽やく浦の烟だにおもはぬ風になびくならひを

女心に泣きて、うはべにつれなく親王にあたりしも、既に定まれる夫ありしが故なり。されど、親王の體書度かさなるに及びて、心動かざるにもあらず。今は左大將との中も絶え、根も絶えたる浮草、いかでか誘ふ水にまかせざらむや。返歌を作りて曰く、

立ちぬべきうき名をかねて思はずば風に煙のなびかさらめや

良縁こゝに始めて成りぬ。むかしつれなきの強かりしだけに、やさしさも深く、親王の宮殿、にはかに光輝を添へて、わが世はたゞ春の心地し給ひけるも、ことわりや。

うき世なるかな、長生殿の夜のかたらひ未だつきざるに、漁陽の鑿鼓早く地を動かして來る。笠置の一戦もろくも敗れて、主上は隱岐に流され給ひ、親王は土佐に流され給ふ。ちぎりかはせる十月の短日月、たゞ一場の夢に歸して、參商千里、またいつの世にか相逢ふべき。親王、魂は都にと

いまりて、むくろばりは、たどるも遠き土佐の南端、幡多の海角、有井三郎左衛門尉が館のかたはらに、ことそぎたる黒木のかまへ、海士が鹽やく烟にあけられて、涙にくもる配所の月、いとわびしく、つれなくなるまゝに思ひ出さるは、都の事なり。比翼の契ふかゝりし御息所の上なり。御有様あまりにいたはしく見えければ、誓固の武士なる有井庄司も、同情の涙に堪へず。『何か苦しかるべき、たゞひそかに御息所を迎へさせ給へ』とすむ。さらばとて、秦武文といふ隨身を、都へのぼらせ給ひけり。

武文、都にのぼりて、一條堀川の御館に參りたるに門閉ぢて、人のけはひなく、むぐら生ひしげりて、雀糞を張れり。御息所は何處にかおはすると、そここゝ尋ねありく。むかし仲國が寮の御馬をたまはり、明月に鞭あげて、小督局をたづねし苦しみもかゝりけむ。嵯峨の奥深草の里に、琴なうらで、琵琶の音す。まがふ方なき御息所の撥音なり。武文案内もこぼす、つと入りて、階前にぬかづく。御息所簾内より見給ひて御詞は絶えて、泣き給ふばかりなり。女房達出て來りまた泣く。武文もこらへ兼ねて泣く。やゝありて御迎に參りたりとて、親王の御文をさぐぐ。御息所まづ親王に

逢ひたまへる心地して、とる手遅しと文よみ給ふに、切なる御心は、水莖のあとにもあらはれて、われも飛び立つ思、君と共にあらば、三千里外のひなの住居も、われには花の都、善はいそげと、そこく仕度と、のへて、武文と共に都を立ち出で給へり。

尼崎より船にのり給はむとて、順風を待ち給ふ程に、こゝに船やどりせる松浦五郎といふ九州の武士、ひそかに御息所をかいまみて、奪ひとらばやとて、夜、郎等三十人ばかりをして、御息所のやどり給へる家に押寄せしむ。武文は名だゝる剛の者なり。出てむかひて獅子奮迅の勢をふるへば、不甲斐なしや、三十人の郎等たゞ一人の太刀風になぎたてられて、はうくの體にて引退く。力づくにてはかなはじとて、家に火を放つ。武文御息所を負ひて、濱邊にゆくに、船あり。こゝや安かるべきと、その船よびよせて、御息所を托し立ちかへりて、女房達を求むるに、家は烏有に歸して人の影もなし。また濱邊にもどるに、御息所を托したる船は、はや沖に漕ぎ去れり。あはれ、武文神ならぬ身の、浦人の船と思ひて御息所を托したるは、思の外に松浦の船なりしこそ是非なけれ。その船かへせとて叫べども、船の中には打笑ふばかり、岸の松風、磯の荒浪のあざけり頗なり。龍

神となりても、この恨かへさばやとて磯につゝ立ち、腹かき切つてうせたりしは、いとゞ口惜しき次第なり。

松浦五郎ちまゝと美人を手に入れて、ほくくうち喜び、より添ひて、かきくどけど、御息所はたゞ絶え入るばかりに泣き給ふのみにて、松浦も詮方なし。船、阿波の鳴門をすぐるに、浪にはかに逆立ちて、船一所を進退すること、三日三夜に及べり。刀、弓、鎧など、うち入れたれど、浪しづまらず。御息所の衣裳をも入れたれど、浪なほしづまらず。龍神たゞりをなすか。武文の怨靈たゞりをなすか。やんごとなき姫君とにかくにも船におくべからずとて、御息所を小船に入れ、水主一人つけておし流す。その船淡路の島につきにけり。醜賊にせまらるゝ苦しみに、船のゑひとに御息所は人心地もせず絶え入るばかりなりしが、海士どもの厚きなさげに、漸く蘇生の思をなし給ふ。この上のなさげには、われを土佐まで送れと仰せられけれども、また到る處の浦々、いかなる人の強奪にあはむやも圖られず。しばらく時運到るをまたせ給へ」とてうべなはず。わびしき月日を、孤島の中に送り給ひけり。

親王一日千秋の思にて待ち給へども、武文歸り來らず。御息所の消息もなし。都の様子をさぐらせ給ひけるに、御息所は既に出發せりと聞き給ひて、さては路にて奪はれたるか、難船にあひて海に沈みたるかと歎き給ふ。かゝる程に、御息所の衣裳土佐に漂着せるを拾ひとる人ありて、親王に見せまつる。八重の潮路にたゞよひて、むかしのかをりはなけれど、まがふ方もなき御息所の衣裳なり。さては、いよく海に溺れてけり。招かずば、この恨はあらじをと、くやみ給へど、甲斐なし。この衣裳の漂着せし日を命日と定めて、自ら經をうつし、念佛となへて供養せさせ給ふ。御息所は、今もつゝがなくて海をへだてたる淡路にあり。朝夕そよぎ給ふ涙、潮頭にまじりて、親王が館の前に至るとは、神ならぬ身の、絶えて知り給はむ由もなかりき。

金剛山に菊水の旗一たび翻りてより、勤王の軍諸所に起り、鎌倉陥り、六波羅陥り、百五十年の幕府倒れて、世は古にもどる建武中興の春、親王も幡多のわびずまひを出て、都にかへり給ふ。太液の芙蓉、未央の柳、園池は舊に依れど、昔の人はなし。芙蓉、面に似、柳、眉に似たるを見給ふにつけても、却つて腸を断ら給ふばかりなりしが、御息所なほ生きて淡路にありと聞かせ給ひ、

夢かとはかりにて、いそぎて都に迎へ給ふ。あの世ならで相見む由もなかるべしと思ひ給ひし御息所、相見てもなほ返魂香の烟の中の姿ならずやと、かつまどひ、かつ喜びて、語るも盡きぬ二人の身の越しかた、むかしのうさ、つらさは、今日のなつかしさを増して、襄王の雲雨のちぎり、いよ／＼こまやかなりき。

うき世は、いつまでもうき世なり。建武中興の小春日和も、いつしか玄冬素雪の空とかはり、尊氏の野心に世はふたゝび亂れ、正成死し、義貞敗れ、叡山孤立して、如何ともし給ふこと能はず。止むを得ず、後醍醐天皇、偽つて尊氏に就き、義貞には、尊良親王と恒良親王とを添へて、北國にくだし給へり。人生何ぞ逢ふことの稀にして、別るゝ事の多きや。

越路の雪になやみし苦しきは、更にも言はず。敦賀灣頭の金崎城にこもりて、苦戦せしほどのこと、今つばらにのべむ違もなし。外に援なくてはかなはじとて、義貞義助二人は杣山に赴き、義貞の長子義顯とゞまりて城を守りけるが、勢日に非にして、終に支へがたくなりぬ。義顯、尊良親王の前に進み出て、「今はこれ迄なり。臣は將家の種、城を枕にして死せざるべからず。殿下は天種に

おはせば、賊といへども、害を加へまつらじ。しばらくこゝをおちのび給へ」と申せば、『やゝ義顯我をば命を惜しむ卑怯者と思ふか。汝をさきたてよ、我ひとり生きのこるとも、何かせむ。たゞ腹切らむすべを知らず。我に教へよ』といとけなげなる御言葉、決心の色御顔に顯れければ、『さればわがせむやうな御覽せよ』とて、刀をとりて、逆手にもち、左の脇につきたてよ、右の脇まで、かきやぶり、刀を親王の前にさし置き、うちふして死にてけり。親王その刀をとり給ふに、血ぬめりて握るべからず。御袖にて之を巻きて、雪の如き御膚に、さつと紅の血潮を漲らし、同じさまにぞ自害し給ひける。あはれにもまた勇しかりける御最期かな。

親王の御首、都につき、禪林寺の長老夢窓國師ひきうけて、葬禮行ふ由、御息所きゝ給ひて、涙ながらに、絶え入るばかりの身を、車にのせられて、禪林寺のあたりに赴き給ふ。あはれ、無定河邊の骨、なほ春園の人となりし夢さめて、見るもかなしや、東岱一片の烟、これぞ親王が最後のかたみ、我も共にとばかりにて、泣きくづれて、歸り給ふもわびしき空園の中、靈別れ、鳳離れて、涙にあかし、涙にくらして、中陰もはてぬほどに、同じ冥途のあと追ひて、はかなくならせ給ひけり。知らず、いづれの地にか相逢ひて、御手をにぎりあはせ給ふらむ。

三 護良親王

鎌倉に遊びて、鎌倉宮の後の土倉を見るもの、誰か切齒して、憤慨せざらむや。鎌倉の祠は、護良親王を祀る所、祠後の土窟は、親王が幽せられ、殺され給ひし所なり。

護良親王は、後醍醐天皇第三の皇子なり。一たび僧となり給ひしが、元弘の變、慈悲忍辱の衣を解いて、怨敵降伏の甲を被り給へり。建武中興の成るや、親王の力あづかつて功多し。笠置陥りし後、奈良にしのばせ給ひし程こそ、いと危かりけれ。

親王、奈良の般若寺にかくれ給ひしに、一乘院の候人按察法限好專、聞き知りて、五百人ばかりついで押しよせ、幾重にもとりかこむ。折柄親王に従へる人、居あわせず。鳥ならではのがれ出てむやうもなかりければ、親王肌おしぬがせ給ひて、今はかうよと覺悟せられけるが、のがるゝまてはのがれて、いよくのがるべからざる時に死なむも、おそからじとて、佛殿を見給ふに、般若經を入れたる唐櫃三個あり。その二個は蓋あかず。他の一個は蓋あきたり。親王その蓋のあきたる唐

櫃の中にひそみ、上に經をかぶせ給ふ。賊入りて寺中残るくまなくさがせども、親王あらず。終に唐櫃の中こそあやしけれとて、二個の蓋あるものをあけて見たれど、親王あらず。櫃の一個の蓋あるものは、賊も疑はずして立ち去れり。親王又も賊のもどり來ることもやとて、その櫃を出て、他の櫃に入り、もとの如く内より蓋し給ひしに、果して賊もどり來りぬ。蓋のあきたる櫃をさぐりしに、こゝにも親王あらざれば、さては親王寺には忍び居らずとていて行けり。いと危かりしことどもなり。

頼みし木蔭に、雨ぞ漏る。こゝも身を置くべき所にあらずとて、立ち出で給ふ。御伴は、光林房玄尊、赤松律師則祐、木寺相模、岡本三河房、武藏房、村上彦四郎、片岡八郎、矢田彦七、平賀三郎の九人なり。いづれも山伏の姿になり、柿の衣に笈をかけ、頭巾をかぶり、熊野路さしてぞ落ちさせ給ひける。露に宿り、草にゆきて、切目の王子につき給ひけるが、こゝより十津川の方に向ひ幾重の山を越え、危き棧道をふみて、十三日ばかり經て、十津川につき給ふ。こゝに戸野兵衛とて名高き武士あり。光林房玄尊、之を頼まばやとて、其家にいたるに、折柄その家に病人ありと見え

て、人々うちさわぎ、貴き山伏出で來らむにはなど、つぶやく。折こそよけれとて、案内をこひ、
『これは三重の瀧に七日うたれ、那智に千日籠りて、三十三所の巡禮のためにかかり出でたる山伏なるが、路を失ひてこゝに出でぬ。あはれ一夜のやどをかし給へ』と云へば、『まち設けたる所なり』とて一行九人の山伏を請じ入る。病者の室に入りて加持しけるに、病者忽ち癒えたり。主人いたくよろこびて、あつくもてなすこと十日あまりに及べり。或る夜、兵衛客殿に出で、くさぐさのこゝと物語るついでに、『當時、護良親王殿下、熊野にしのび給ふ由聞きつるが、三山の別當定倫僧都は北條方のものなれば、いと危き事なり。此あたりは、さるたぐひならで、みな心を朝廷によするものどもなり。願くはこの地に來り給へかし。不肖なれども、此兵衛がおひきうけ申せば、近郷の武士ども、指をさす者は一人もあらず、みな來りて無二の忠義をぬきんで申すべし』といふ。誠心詞のはしに見えければ、親王こゝに實をあかし給ふ。兵衛これほとばかりに打驚きて座をすべり下り、『知らぬこととて、是までは粗忽つかまつりぬ』とて、ぬかづく。これより俄に黒木の御殿をつくりて、親王を守護しまつれり。その叔父に竹原八郎といふものあり。『我が家こそ都合よけれ』と

て、親王を迎へ、誠心をつくしてもてなしまつれり。親王髪の延びたるまゝに、還俗し給ふ。八郎の女、田舎には惜しき姿色あり。夜の間に召し給ひて、御寵愛淺からず。終に親王がなさけのたねをやとして、一女子をらめりとぞ。かくて半年がほどは、浮世の風塵、この山里に入らず、のどかに過し給ひけるが、北條氏重資をかけて親王の首をつのること急なり。褒美に目はくれずとも、あとのとがめの恐しくありけむ。八郎の子をはじめ、近郷の武士の、親王にあだせむとする者ありければ、終に八郎が誠心こめて、強ひてとどむるをも願みず、十津川の里をたちいで、高野へ赴かむとて、半瀬の里を過ぎ給ふ。半瀬庄司にたのみて、無事に通らむとしたまひしに、庄司案外によき人にて、『親王侍臣二人かもしくは錦の御旗をたまはらば、通しまぬらむ』といふ。血氣の赤松則祐すゝみ出て、『われ往いて、とらはれ申さむ』と云ふ。平賀三郎之をおしとて、『今の時、あたら武士を一人たり共失ふべからず。御旗も責けれど親王の股肱たる武士には換ふべからず』といふ。親王げにもとて、御旗を渡して過ぎ給ふ。村上義光おくれ来て來りけるが、半瀬庄司にゆき逢ひぬ。その下人がもてる旗を見れば、錦の御旗なるに『こは何事ぞ。野武士どものもつべきものに

あらず』とて、旗を奪ひとり、旗をもちたりし庄司が下人のいと大なる男を四五丈もなげとばしければ、あまりの怪力に恐れて争はむとするものもなし。義光悠然として立ち去り、稱なく親王に追ひつきぬ。またゆく路に玉置庄司といふ武士あり。これに頼みて通らむとて、片岡八郎矢田彦七の二人、その家にゆきて談判しけるに、庄司何とも返事せず。内に入りて兵をあつむるさまなり。さては、承知せずして、害を加へむとするものと見えたり。いそぎかへりて、この由注進せむとて、ひきかへす。玉置の郎等數十人來り追ふ。二人木陰よりをどり出て、眞先に進める一騎を殺す。餘衆これを見て進まむとするものもなし。八郎、彦七を願みて、『われはこゝにとまりて、敵に當らむ。御邊は早くかへりて注進せられよ』といふを、見すつるに忍びざれども君への注進こそ大事なれとて、はしり歸る。遂に後を願みれば、さすがに猛き八郎も、多勢に一人、つひにうたれけむ首を太刀のさきに貫きてもてるさまなり。さて歸りて、かくと親王に告ぐ。今はのがれぬ所なり。たと進めとて、山路を越えゆくに、向の峰に玉置が兵五百人あまりまちかまへたり。其時親王に従へるもの三十人ばかりあり。今更退かむやうもなしとて進み戦ふ。かゝる處に紀伊の長瀬六郎兄弟

三千騎ばかりひきつれて來り。親王を扶けて、玉置の兵を追ひちらす。親王危き命をたすかり給ひて、吉野にぞおちゆかせ給ひける。

楠正成と相前後して、吉野に兵をあげ給ひしに、二階堂出羽入道六萬餘騎にておし寄す。城兵力を盡して戦ひたれども、兵わづかに數千人に過ぎず。衆寡敵せず。終に支ふる能はず。村上義光、鎧に矢十六筋を負ひながら、走りもどりて親王に向ひ、「今一方の血路あるうちに、早く落ちのび給へ。恐多き事なれども、錦の直垂御鎧をたまはり、御名をなのりて、敵を欺き、敵を支へ申さむ」といふ。親王是非に及ばず、その詞に従ひて吉野を落ち給ひぬ。義光二の木戸の高櫓にのぼり、親王の遙に落ちゆき給へるを見て、櫓の上に身をあらはし、敵に向ひていつはつて名乗り、自害して果てけり。義光の子義隆死なば共にと櫓の下に來りけるが、父に諭されて、止むなく親王の後追ひけるに、賊兵あとより來る。今は死すべき時なりとて、そこに踏みとどまり、半時ばかり敵をさへて奮戦し、刀折れ、矢盡きて遂に自刃せり。かゝる村上父子が忠義に、親王はわづかに虎口をのがれて、高野山にしのび給へり。かゝる程に、新田義貞、親王の令旨を奉じて、義兵を起して、足

利尊氏と共に六波羅を陥れたり。是に於て建武中興成れり。

天皇はや太平になれて、政を怠り給ふに、親王の惘眠はやくも足利尊氏の異心あるを察し、ひそかに之をのぞかむとし給ふ。尊氏これをさととりて、藤原廉子と結託して、親王を讒す。天皇察し給はず。親王を鎌倉にくだして、足利直義にあづけ給ひし。そ口惜しかりけれ。されど直義が土窟の中に幽せむとは、天皇も思ひかけ給はざりけむを。

北條時行、亂を起して鎌倉におしよせ、直義支ふる能はずしてにげゆかんとするや、其臣淵邊伊賀守をして親王を殺さしむ。嗚呼、口に淵邊が刀の鋒をかみ折り、眼瞑せずして、終に首をうちおとされ給ひし時の、御遺恨や如何なりけむ。星霜、にに五百年、鮮血あと消えて、恨未だ消えず。風雲古今に變じて、土花常に碧なり。

足利尊氏

我が國史上に、最も馬鹿げたる争亂二あり。曰く、南北朝の争。曰く、應仁の亂。これなり。足

利氏の生命は南北朝の争に始まり、應仁の亂に終れり。而して南北朝の争を起したる主動者は、足利尊氏なり。

然れども、上には兩統の争あり、下には武士と文臣との争あり。尊氏はその機に乗じて私慾を逞じうせむとせしのみ。否、尊氏は當代の武臣の爲にかつがれたりしなり。

平安朝時代は、藤原氏の全盛時代なりき。而して能く其權勢を抑へ給ひしは、獨り後三條天皇ありしのみ。此外英主なきにあらざりしかど、之を如何ともし給ふこと能はず。藤原氏とこしへに威福を弄せり。元來藤原氏は文臣なり、武臣にあらず。身に寸鐵を帶びずして、天下の權を握りしこと數百年に及べり。兵はこれ權とは、古今東西に通じてあやまらざる所なるに、藤原氏のみは兵力なくして、天下を掌握せり。これ實に不思議なる現象にあらずや。然れども、これ太平の世の事なり。一朝武力を以て相争ふに至れば、藤原氏は其勢力を保ち得べくもあらず。平安朝の末葉以後、武士兵を以て公卿と相争ふに至れり。保元の亂、武士の清盛朝勝ちて、公卿の頼長敗れたるなり。平治の亂、武士の重盛勝ちて、公卿の信頼敗れたるなり。源平の争は、準公卿の平氏敗れて、武士

の源氏勝ちたるなり。承久の亂、公卿の皇軍敗れて、武士の北條氏勝ちたるなり。南北朝の争も、上は兩統の争の如くなれども、實は公卿と武士との争に外ならず。而して公卿の南朝敗れて、武士の北朝勝ちたるなり。政權一たび武士の手に歸してより、朝廷はたゞ之を尊はむとあせるのみにして、武士が政權を得たる所以を悟らず。迂なるかな。

物必ず反動あり。源頼朝の幕府を開くや、之に不満なるものは、一、天皇なり。二、歴代政權を握りし藤原氏なり。三、平氏の遺類なり。源氏の倒るゝや、北條氏、名は執權なれども、實は將軍なり。而してこれ陪臣にあらずや。朝廷ますますく不満ならざるを得ず。是に於て承久の亂起りぬ。此亂は幸にして早く平ぎたりしかど、これより北條氏は更に一の敵を得たり。何ぞや、四、承久の亂に與みせし武士の子孫是なり。北條氏は、外に以上の四敵を有し、内に更におそるべき大敵を有す。五、源氏の血すちを傳へたる足利、新田の二武士是なり。

足利、新田は源氏なり。源氏の陪臣たりし北條氏よりは、門地遙にまされり。而して之が權力の下に立つ。潮氣あゝもの、安んぞよく之に堪へむや。八幡太郎義家の子義國、成國に二子あり。長

子の義重、これ新田氏の祖なり。次子義康、これ足利氏の祖なり。義重の後は、義兼、義房、政義、政氏、基氏、朝氏を経て、義貞に及び、義康の後は、義兼、義氏、泰氏、頼氏、家時、貞氏を経て、尊氏に及び。これ實に北條氏にとりては、目の上のたんこぶなりき。二氏の中、新田氏は嫡流なりしかど、其祖義重は頼朝に疎んぜられたりき。其原因は、頼朝兵を起し、時、其召に應ぜざりしを以てなり。なほ一の原因あり。義重の女美なり。嘗て頼朝の兄義平に嫁せしが、義平死して寡居せり。頼朝之を娶らむとす。義重きかず、るくに名もなき帥の六郎に嫁せしめたり。頼朝ますます怒れり。されど、この時もし義重にして其女を頼朝に送らば、一時は頼朝の歡心を得べけれども、古今無類の焼餅やきなる尼將軍いかでか黙視すべき。新田氏は和田、畠山諸氏と同じく滅亡せむと必せり。新田氏のかく不遇なるに反して、足利氏は世に時めけり。義康の妻は、頼朝の従母姉妹なり。義兼は北條時政の女を娶り、頼朝と相掣なり。義氏は泰時の女を娶れり。かくて頼朝にも、北條氏にも重んぜられたりき。家時は野心家なり。ひそかに北條氏を圖れり。其子貞氏も父の氣象をうけつぎて、野心を包藏せり。かく野心を傳ふること二代にして尊氏に及び。都合三代の野心

の凝る所、いかでか破裂せずして止むべき。

北條氏とても、代々賢明なり。敵多きを知りて、名位を求めず、富貴を求めず、つとめて仁政を施せり。武士の心を得むとせり。貞殊時には兩統交立を定めて朝廷の勢力をわかつてり。後醍醐天皇の長皇子後深草天皇の後を持明院派といふ。次皇子龜山天皇の後を大覺寺派といふ。如何に交立せしかを、一言せむに、後深草天皇(持明院派)の次に、龜山天皇(大覺寺派)立ち、次に後宇多天皇(大覺寺派)次に伏見天皇(持明院派)次に後伏見天皇(持明院派)次に後二條天皇(大覺寺派)次に花園天皇(持明院派)次に後醍醐天皇(大覺寺派)に及び。大覺寺派の天皇は龜山、後宇多、後醍醐三天皇みな學問あり、才氣あり、後鳥羽天皇、後嵯峨天皇以來の不平の氣を傳へ來り、機を見て發せむとす。兩統交立は、一時は朝廷の權力をそぎたれども、遂には朝廷をします。北條氏に對する不平の氣を高めしめたり。要するにこれ一時の成功にして永遠の失敗なり。

余をして茲にくりかへして、北條氏の敵をかぞへしめよ。大覺寺派の天皇一なり。朝廷に憂延せる公卿の藤原氏二なり。平氏の遺類三なり。承久に失敗せし武士の子孫四なり。北條氏の主君たり

し源氏の一族、即ち足利氏の如きもの五なり。而して後醍醐天皇の英明なりしにひきかへて、時の執權北條高時は暗愚なり。北條氏漸く天下の人望を失へり。後醍醐終に劍を執つて起ち給ひぬ。其最近の動機は兩統交立に關して、北條氏の處置に嫌り給はざるなり。天皇の諸皇子、多くは賢にして剛、公卿の中にも、南家の學をつたへたる資朝、俊基の二人、みな硬骨あり。尋常の長袖者流の比にあらず。此二人主として事に當れり。これを以て陳勝吳廣に比すべし。建武中興主唱の功は之をこの二人に歸せざるを得ず。かくて皇軍一たび、敗れぬ。天皇隱岐の孤島に播遷し給ひぬ。此際楠正成、一土豪の身を以て、孤身獨力、菊水の旗を金剛山の山風に翻せり。恰も梅花一朶冬に開いて、春の至るを待つが如し。建武中興主唱の第二の功は之を正成に歸せざるを得ず。是に於て、天下風を望んで官軍に應ずるもの多し。正成の功、偉なるかな。

憐れや、北條氏、多年北條氏に敵意を挟みしもの皆起てり。大覺寺派の天皇起てり。公卿の氣力あるもの起てり。平氏の遺類起てり。承久失敗者の子孫起てり。更に幾多の武士新に勅を奉じて起てり。然れどもこれのみにては未だ北條氏を亡すに足らざるなり。最後に源氏の子孫、足利、新田

二氏起つに及びて、病、膏盲に入る。北條氏は終にたすからざるなり。

新田義貞はもと野心あるにあらず、正成を攻むる陣中順逆の理をさとり、護良親王の令旨を奉じて、はじめて戈を倒にして北條氏に向へり。尊氏は元來野心あるもの、而して二度の出征、北條氏の仕打あまり無理なるに憤激せり。北條氏之を知り、義家の建てし所の白旗を贈り、副ふるに鞍馬鎧刀を以てせり。これ以て情の人を動すべし。いかてか冷かなる尊氏を動すを得むや。尊氏も戈を倒にして、第二の執權ともいふべき六波羅探題に向へり。

後醍醐天皇一たび失敗して、隱岐の孤島に幽囚の身となり給ひしより後、はじめて愁眉を開き給ひしは、正成が再舉せしとの風聞なり。次に喜び給ひしは富士名義綱が天皇をして孤島を脱せしめむことを圖りしことなり。其次に喜び給ひしは、名和長年が天皇を船上山に迎へ奉りしことなり。最後に而も最も大に喜び給ひしは、尊氏の歸順なり。何となれば尊氏は源氏の巨族、北條の臣下中最も強きものなればなり。

かゝれば、北條氏亡びて後天皇功を論じて、尊氏を第一に置き給へり。迂なるかな、鎌倉を陥れ

し新田義貞の功の更に大なるを知り給はざりき。尊氏の功は、赤松則村と伯仲の間にあり。尊氏三州を得ば、則村は少くとも二州を得ざるべからず。然るに尊氏には過度の賞を興へて、則村には毫も之を興へず。興へざるのみならず、之を奪へり。中興の業の成らざる之を以てするも、既に明かなり。

後醍醐天皇をはじめ、朝廷の臣、たゞ北條氏を討つことのみ急に於て、如何にして天下を治むべきかを考へず。以爲へらく、『北條氏亡べば、天下おのづから朝廷に歸せむ』と。何ぞ其迂なるや。余おもへらく、建武の中興は、非凡の人傑あるにあらずんば、到底之を完成する能はず。而して當時の人物を見るに、定房、宣房、親房など、いはゆる三房、これ太平の世の能臣のみ。上に之を遣ふ人あるを要す。藤房は賢なれども、浮世に活動せむには、あまり悟りすぎたり。正成は智あれども、政治家にあらず。義貞は日本一流の好將軍なれども、天下を統治するの器にあらず。尊氏は其器あれど、心術正しからず。試に之を支那の三國時代の人物に比せむに、尊氏は曹操なり。正成は孔明なり。藤房は魯肅なり。義貞は關羽なり。

後醍醐天皇の志は、北條氏を滅し給ふに在り。北條氏亡べば、天皇の志は既に満ちたるなり。止んぬるかな。幾んど二百年來、天下は封建の世なりき。一朝政朝廷に歸するも、上古郡縣の制を布き給ふこと能はず。天下は依然として封建なり。封建を治むるには自ら其方法あり。然るに朝廷之を知らず。斷然大化の革新に則るの勇なく、平安朝あたりの手ぬるき政事の迹をつぎて、兵力ある封建の天下を御せむとす。かくては第二の北條氏出てざるを得ず。封建の天下は、武士にあらざれば、之を治むることを得ざるなり。

建武中興とは、只表面上の名のみ。其實亂雜極まる世の中なり。當時の落書に、『この頃都にはやゝもの、夜討強盜にせ給旨、召人早馬そら騷、なま頸還俗自由出家、俄大名迷ひ者、安堵恩賞そらいくさ、本領はなる、訴訟人、文書入れたる細葛、追従譏人禪律僧、下尅上する成出者、器用の堪否沙汰もなく、もる一人なき決斷所、きつけぬ冠上のきぬ、持ちもならはぬ笏持ちて、内裏まじはり珍らしや云々』とあるを見ても之を知るべし。功もなき公卿女官の輩、地を得て、功ある武士反つて之を得ず。訴訟山積すれども、之を決斷する能はず。女謁行はれ、賄賂行はれ、讒言行はれ、

公卿武士相嫉視す。當時の朝廷は餘りに無能なり。制度典章一も見るべきなく、天下たゞ利慾を爭うて、虎狼の咆哮するに異ならず。人民歎じて曰く、『王室中興して反つて悪政になれり』と。藤房幾度か諫めたれど、用ゐられず。終に朝廷を見限りて去れり。

鎌倉幕府の起れるは、必ずしも頼朝之を起したるにあらず。廣元之を起したるにあらず。到る處に豪族あり、兵力あるに至りては、世自ら封建とならざるを得ざるなり。されば頼朝亡ぶも、第二の頼朝起らむ。北條氏假に其實權をにぎりしものなり。北條氏亡ぶも、第二の北條氏起らむ。到底幕府は滅せざるなり。或は之を滅するを得べし。然れども天下は到底平かならざるなり。尊氏は實に斯る時勢の下に名門の嫡流として、世の重望を負へり。

當時もし尊氏起たざれば、必ず他の尊氏起たむ。天下は到底兵力なき公卿の手を以て、鹽梅し得べくもあらず。更に當時の武士の如何を考ふるに、鎌倉時代は武士道の發達せし時代なりき。されど、これ夫が飼主よりも、常に食を供する下男などに忠實なるの類なり。食を供する者の恩を知つて、死を辭せざるも、飼主の恩を知らず。この間、鎌倉武士のタイプとして、北條の滅亡に一種の

花を添へしものは、安東聖秀なり、聖秀は義貞の妻の伯父なり。妻、書を以て之を招く。怒つて應ぜず。罪をかへして、北條氏の邸に至る。邸は兵燹に罹り、高時はあらず。昨日まで百戰天を刺して曰く、『九代百九十年の邸跡、豈に一武士の屍を留めざるべけんや』と。從容として屠腹せり。南北朝前後、かばかり痛快にして勇ましきことは、他に多く之を見ず。これ實に鎌倉二百年來養成される武士の精華なり。されど、大抵の武士は勇ありて、智なく、食祿を興へしもの、爲に死するを知つて、大義名分を知らず。土岐頼遠は曾て酔に乗じて、光嚴院の御輿を射たりき。光明天皇、足利尊氏に擁立せられ給ふや、時人語つて曰く、『天皇一戰の功もなきに、將軍より天皇にせられたり。何ぞ幸福なるや』と。亦以て當時の人士が如何に野蠻的に、如何に頑冥なりしかを知るべし。なほ一つ余をして當時の武門武士の氣風を知るに足るべき一事件を語らしめよ。

義貞一擧して鎌倉を陥れ、北條高時を殺したるは、當時第一の武勳にして、義貞の材武絶倫なるを知るべし。義貞鎌倉を陥れたる後、鎌倉に居りしに、尊氏の子義詮少しくおかれて入り來れり。

義詮はわづかに三四歳の幼兒なり。然るに關東附近の武士、陸續來りて義詮に就きて、義貞に就くものすくなし。二將確執して相争はむとす。義貞力争する能はずして、三四歳の幼兒に兜を抜ぎて鎌倉を去れり。義貞はまづ關に入れる浦公なり。功高く、且つ秋毫も犯す所なし。然るに天下の武士之に附せずして、何等の功もなき幼兒に附したるは、これ何の故ぞや。怪しむなかれ、當時の武士は、たゞ利を知るのみ。義詮に就いて己を利せむとするなり。義詮に就くことの利なるは、義詮の父尊氏都にて武勳を立て、朝廷の信用あつきを知ればなり。

當時の武士、既に此の如し。之を御するもの、尊氏の如き人においてはじめて之を能くすべし。義貞の如き清廉の人にては到底之を能くせざるなり。當時の人士、中興劈頭早く亂を思ふは、己の利する所、思ふやうにならざるを以てなり。かゝる世に、高潔にして材武絶倫なる義貞が落も人望なくして、尊氏が大に人望を得たるは、決して怪しむに足らざるなり。

尊氏は利慾ある小人にはあらず。されど、賴朝の跡を追ひ、北條にかはらむことは、北條氏の盛時なほ其夢想せし所なり。今は多少の武勳あり。天皇之を信じ給ひ、天下の武士之に歸せり。尊氏

たるもの、豈に野心の鋒鏑をあらはさざるを得むや。天皇之を知らず、滿朝の諸臣之を知らず、獨り護良親王のみ看破し給へり。天皇に忠告す。天皇なほ悟り給はず。親王奮慨して兵力を以て之を除かむとし給ひしは、眼孔ありて、計略未だ足らざるものと云ふべし。廉子天皇の籠あり。而して護良親王は廉子の出にあらず。尊氏廉氏にとり入りて之を譏して曰く、『親王叛を圖る』と。親土の兵を召し給ひしは事實なり。然れどもこれ叛を圖り給ふにあらずして、尊氏を圖らむとし給ふなり。おぞや天皇之を察し給はず、尊氏の毒舌に欺かれて親王を鎌倉に流し給へり。かく尊氏は上を欺き而して、下天下の士心を得むとせり。建武二年三月、日向國石崎郷地頭賊を丹波の光福寺に寄附して、北條高時の冥福ををさめぬ。その寺僧に與ふる書に曰はく、『爲祈四海之靜謐、一家之長久將亦爲救相模入道高時並同時所々滅亡輩之怨靈所寄附如件』と。これ豈に尊氏が高時の舊恩にむくいむとするものならむや。尊氏はひそかに北條氏の遺黨を手に入れむとせしや必せり。然るに北條時行亂を起して鎌倉に迫り、尊氏の弟直義破られ、尊氏往いて之を征伐せむとは、尊氏の意想外に出でし所なるべし。

成良親王をして鎌倉を鎮め、足利直義をして之を輔けしめしは、これ第二の北條氏の種子を播けるなり。尊氏をして往いて時行を討たしめしは、これ虎を野に放てるなり。機は至れり。尊氏發するに臨みて、征夷大將軍たらむことを乞ふ。許し給はず。許し給はざるは至當なり。乞ひしは分に過ぎたるなり。かくて尊氏、時行を破つて鎌倉に入る、直義が護良親王を弑したりしを聞きては、流石に尊氏も意外に思ひしなるべし。尊氏は直義の如く姦黠癡惡ならざるなり。されど飽くまでも野心あり。遂に鎌倉に據りて叛けり。叛くに名なきを得ず。即ち新田義貞の罪をかぞへて之を除かむことを名とせり。

義貞は高潔なる武士なり。されど尊氏に誣ひられては之を辯せざるを得ず。是に於て二雄相争ふに至れり。政治家としては、義貞は到底尊氏の敵にあらず。然れども戈を執りては、其上に出づ。この二雄は、共に源氏の子孫、門地名望他を抜く。尊氏おもへらく、『義貞を除かば、天下また恐るゝに足るものなし』と。義貞こそよゝい迷惑なれ。そもや骨肉相食むは、源氏代々の遺傳病なり。八幡太郎すら弟と戦へり。頼朝は父を殺したりき。義平は叔父を殺したりき。頼朝は弟を殺したりき。

同門の新田氏と相争ふぐらゐの事は、尊氏が野心の眼には、何てもなき事なり。

義貞、尊良親王を奉じて尊氏を征す。これ固より尊氏の期する所。されど或は恐る、親王の軍に對しては關東武士もさすがに弓を彎きかねむことを。尊氏寺に入りて髮を削り、陽に野心なきを示す。これ將士を愚にするなり。直義爲つて綸旨をつくりて、尊氏を釣り出せり。これ直義が尊氏を籠絡せるが如くなれども、實は尊氏の衝中に陥りたるなり。尊氏將士の心の我を離れざるを知るや脱兎の如く起てり。而して敵の來るを待たずして、箱根に出てたるは計の得たるものなり。義貞山道の軍を待ちて、遲滞して直に鎌倉にせまらざりしは、此上もなき失策なり。鎌倉は三面山、一面海、天然の要害の如くなれども、實は最も守り難き處なり。古來鎌倉を守りて敗れざるものなく、鎌倉を攻めて勝たざるものなし。今や尊氏は足柄にて義貞の弟義助の軍を防ぎ、直義は箱根にて義貞に當る。戦はざるに七分の勝利は尊氏に在り。加ふるに、大友貞載、鹽治高貞の二將、官軍に叛いて戈を倒にせり。鹽治輩はたゞ利を知るの小人、前に義貞に附して己を利せむとす。然るに義貞あまり純潔にして、融通つかず。遂に義貞を見限りて、尊氏につけり。なほ淫婦が舊情人を見限り

て金あるものになびくが如し。尊氏が士心を得しば、大概この類なり。

かくて、義貞は敗れぬ。尊氏あとを追ひて西上しぬ。梅松論は義貞の一美談を傳へて曰く、海道は山河の間に足かゞりの難所に付、合戦治定有べしと覺えし處に、天龍川の橋をつよくかけて渡守を以警固す。此河は流はやく水ふかき間、ゆるしき大事なるべきに、橋をば誰が沙汰して渡したりけるぞ、と尋られしかば、渡守共云、此間の亂に我等は山林に隠忍候て、舟どもをば所々に置いて候ひしに、新田殿當所に御着有て、河には瀬なし。敗軍なれ共大勢なり。馬にて渡すべきにあらず。又舟を以て渡さばおそくして、味方を一人成とも失はむ事不便なるべし。いそぎ浮橋をかくべし。難澁せしめば汝等を誅すべし、と御成敗候ひしほどに、兩三日の間に橋をかけ出して候なり。新田殿は御勢を夜日五日渡させ給ひて、一人も残らずと見えし時、新田殿御渡り候ひし也。其後軍兵共此橋をやがて切落すべきよし下知せしとき、義貞橋の中より立歸て大に御腹をたてられて、我等を近く召れて、仰ふくめられ候ひしは、敗軍の我等だにも掛て渡るはし、いかに切落したり共、勝に乗たる東土、橋を懸ん事、時日をめぐらすべからず。凡敵の大勢に相

向ふときに、御方小勢にて川を後にあて、戦ふ時にこそ退まじき謀に、舟をやき、橋をきるこそ武略の一の手だてなれ。義貞が身として、敵とてもかけてわたるべき橋を切落して、急におそはれしをあわてふためきけるといはれむ事、末代に到るまで口惜しかるべし。よく橋を警固仕れとて、解に御渡り候ひし也。此故に御勢を待奉りて、橋を守り候なりと申しければ、是を聞人皆々涙をながして、弓矢の家に生れば、誰もかくこそ有るべけれ。疑なき名將にて御座有けるとて、義貞を怒じ申さぬ人ぞなかりける。

嗚呼これ堂々たる大將の態度にあらずや。われ多く義貞の事は言はじ。たゞ義貞は日本史上、最も立派なる大將の一人なりと云へば足れり。南北朝の前後余は將軍として最も義貞を愛す。而して此一事は最もよく義貞の面目を發揮せりと信ずるを以て、特に全文を抄出せるなり。

尊氏京都に入りて官軍と戦ひ、互に勝敗ありしが、遂に敗れて九州に奔りぬ。はじめ兵を鎌倉にあげし時、書を以て九州の武士を招撫し置きたれば、九州に奔るは其處を得たるなり。後日義貞が縁少き北國に走りしとは同日の談にあらず。而して敗走の際、熊野別當道有をして、光嚴院の院旨

を受けしめんとす。ころんでもたゞは起きざるものと云ふべし。

此際正成之を追撃せむと主張せしは、其策を得たるもの、義貞之に従はざりしは誤れり。既にして尊氏大舉して東上す。正成之を叡山にさげんとせしも、また策の得たるもの、然るに兵袖の公卿事を解せず、正成義貞をして寡兵を以て捲土重來の大軍に當らしむ。止んぬるかな。正成はやけを起して湊川に討死せり。義貞やぶれて京に入りぬ。車駕案の如く叡山に入りぬ。

これより後官軍しばし利あらず。義貞單騎尊氏の陣地に進みて曰く、『公と我との故を以て、萬卒の血を流すは罪ふかきわざなり。請ふ、單騎相闘つて勝敗を決せむ』と。これ大將の所置としては、すこし輕々しけれども、また爽快なる好武士ならずや。此際八分の勝利は、尊氏に歸せり。されば、尊氏は挑まれて後しざりするが如きいくちなき武士にあらず。直に出て、義貞と格闘せむとせり。諸將強ひてとゞむるによりて、止むを得ず、思ひとゞまれり。

尊氏が持山院派の天子を擁立して賊名を免れむとしたるは、北條貞時の故智を襲げる者とは云へ亦一代の名案なり。而して神器なし。如何にして之を得べきか。尊氏は伴つて降を後醍醐天皇に乞

へり。後醍醐天皇の前半は賢なり。後半は暗愚の君なり。はか／＼しからざる義貞に愛想をつかして、尊氏に就き給はむとす。義貞の遺憾果して如何ぞや。尊氏天皇の降を納れ給ふを聞きて舌を吐いて曰く、『誰か天皇を賢主といふ、わが衛中に陥り給へり』と。天皇初は眞に尊氏の衛中に陥り給へり。されど、色慍にして恭しき義貞の陳情によりて、迷夢をさまし給へり。皇太子を添へて、義貞を北國に遣し給へり。都に入りて偽器をさづけ給へり。脱して吉野に入り給へり。尊氏之を窮迫するまでに小量ならず。又酷薄ならず。かくて北朝の光明天皇より征夷大將軍をさづかりぬ。是に至りて尊氏の志は成れるなり。目的は達せるなり。天下に敵多きも、尊氏の大量なるさまで之を意とせざりしなり。

尊氏が具體的に理想とせしは、源頼朝なり。頼朝と同じ地位に立たむことは、彼の畢生の目的なり。既に頼朝の先例あり。北條氏は陪臣の身を以て、なほ其まねをなせり。尊氏が源氏の胄を以て其まねをなすは、さまで悪しきこととは思はざりき。尊氏は此理想の爲に萬死且つ辭せず。此理想の爲には出來得る限りの手段を取りぬ。もとより天皇に叛くの意なし。たゞ將軍たらんと欲す。我

が行路なきへきるものは、我が理想の爲に之を排せざるを得ず。護良親王を殺さむとす。之を讒せざるを得ざるなり。義貞は強敵なり。之を除かざるを得ず。千苦萬艱の間に從容として驚かず、驕がず、弟と戦ひ、子と戦ひ、親臣と戦ひ、あらゆるものと戦ひ、五十年を刃の下に過し、一生苦んで悔いず。野心燃ゆるが如くなれども、生死の間に自若として微笑す。古來尊氏ほど苦しみたる人なし。而して苦しき中に在りて落ち着きすましたる尊氏の如きは、他に其比を見ず。何ぞ其意志の鞏固にして、襟度の瀟洒なるや。尊氏の一面は、雅懷の高士なり。他の一面は絶代の政治家なり。之をして頼朝の時にあらしめば、頼朝の人望は地に落ちしならむ。之をして家康の時にあらしめば、到底家康の頭はあがらざりしならむ。尊氏は或る點に於て日本歴史と第一流の偉人なり。其爲し、所、頼朝、信長、秀吉、家康などゝまでの大差なし。たゞ偉材を抱いて、不幸なる時世に生れしのみ。

尊氏將軍となり、頼朝と同じ地位に立ち、鎌倉の遺制をとりて、建武式目をつくり、天下に號令するに至りて、尊氏の志成れると共に、尊氏の尊氏たる所以の事業は終れり。これより後、癩を病んで死するまで、十數年間は、尊氏もはや精神的に死亡せるなり。人或は其一生苦しんで、淨生の榮華を味ふ能はざりしを笑ふ。されどこれ酒中の趣を解せざる下戸の輩が、上戸の飲みすこしてへど吐くを笑ふに類せずや。尊氏はたゞ理想あるを知るのみ。理想に至る徑路の苦樂如何は、つゆ之を感ぜざるなり。弟來れ、共に闘はむ。子來れ、共に闘はむ。天下皆擧つて來れ、我五尺の體にのし付けて進上せむまでなり。尊氏の眼中には財寶なきなり。死なきなり。また人なきなり。ころんども、つまづきて、たゞ我が理想を貫かむとす。義貞に敗られて桂川に自殺せむとしたりき。直義に遇られて自殺せむとしたりき。直義の黨類騒ぎ立ちし時にも吟嘯自若たりき。何ぞ其宏量大度なるや。

尊氏、多少の學あり。禪を學び、殊に繪畫は、宅間榮實を師として造詣深く、好んで地蔵を描き其技専門の畫師に劣らざりき。これ尊氏が雅懷の一方に發展せるものなり。

尊氏曾て直義、師直に謂つて曰く、「源頼朝は信賞必罰して、人心を畏服せしめたりき。然れども刑を用ゐる苛酷にして、猜疑多く、殺戮度に過ぎ、骨肉も亦横死するを免れざりしは惜しむべし。

我は則ち然らず』と。概して日本人は器局小なり。宏量大度、まさに將たるの器を備へ、漢の高祖に比して毫も遜色なきものは、それ唯足利尊氏か。梅松論は、當年の名僧夢窓國師が尊氏を賛美せし言を傳へぬ。

或時、夢窓國師談話の次に、兩將の御徳を條々褒美申されけるに、先づ將軍の御事を仰せられけるは、國王大臣、人の首領と生るゝは過去の善根の力ある間、一世のことにあらず、ことに將軍は君を扶佐し、國の亂を治る職なれば、おぼろげの事にあらず。異朝の事は傳聞計なり。我朝の田村、利仁、頼光、保昌、異賊を退治すといへども、威勢國に及ばず。治承より以下、右幕下頼朝卿兼征夷大將軍の職、武家の政務を自專にして、賞罰私なしといへ共、罰のからき故に、仁の闕る所々見ゆ。今の征夷大將軍尊氏は、仁徳を兼給へらうへに、尙大なる徳有なり。第一に御心強にして、合戦の間、身命を捨給ふべきに臨む御事、度々に及といへども、喉を含て怖畏の色なし。第二に、慈悲天性にして、人を惡み給ふ事をしり給はず。多く怨敵を寛宥有事、一子の如し。第三に、御心廣大にして、物惜の氣なし。金銀土石をも平均に思食て、武具御馬以下の物を人々

に下給ひしに、財と人とを御覽じ合る事なく、御手に任て取り給ひし也。八月朔日などに、諸人の進物ども數もしらず有しかども、皆人に下し給ひし程に、夕に何有とも見えずとぞ承りし。實三の御體、末代にありがたき將軍也。

夢窓國師は尊氏兄弟の恩に浴したりしかど、諛言を吐くべき俗僧なりとも覺えず。この評、尊氏が知己の言と云ふべし。

直義、尊氏と不和なり。詐りて南朝に降る。親房曰く、『直義降らば、尊氏自ら平がむ』と。迂なるかな。直義果して南朝にそむく。親房之を責む。直義曰く、『今の世武門政治にあらずんば治まらず。請ふ、武門政治を託されよ』と。楠正儀は其言を然りとしたれども、親房なほ頑として悟らざりき。悟るも、例の公卿根性、依然として武士をいやしみたりしなり。

直義、師直は、尊氏が兩腕なり。直義や、師直や、智あり。略あり。されど、これ帷幄の謀臣にして、天下を御する徳あるにあらず。到底尊氏を戴かざるを得ざるなり。尊氏器宇弘裕、規略遠大術數を弄して陰險ならず。人に任じて疑はず。迂にるが如くにして實は敏、拙なるが如くにして實

は巧、人をして端倪する能はざらしむ。之を當時に求めて、其比を見ず。爾來數百年、西郷隆盛の如きは、やゝ之に近きものか。尊氏をして維新の際にあらしあば、隆盛となりしならむ。英雄といへども、時勢の兒のみ。誤解するなかれ、余は尊氏の叛逆を辯護するものにあらず。たゞ政治家として其人物の大なるを取るなり。

古城と戦國武士

一 備中の高松城

天正十年、豊臣秀吉が備中の高松城を水攻にしたりしは、日本歴史上、有名なる事實なるが、さるにても、城主清水宗治の最期こそは、世にも憐なる事の限りなりけれ。

織田信長西征の噂しきりなりければ、流石に毛利家の片腕と頼まれ、日本一の智者と呼ばれたる小早川隆景、天正十年の正月、其衝に當れる諸城の主を呼びよせて曰く、「この夏は、信長必ず來り征すべし。織田氏に心寄せらるゝ方々は、各々其心に任されよ。古より例のあることなれば、いさ

さかも遺憾なし」と。諸城主あら膽を抜かれて、みな一同に二心なきことを誓ひぬ。隆景、「さらば祝着なり」とて、大に饗應し、一同に脇差を與へたり。諸城主喜び勇みて、其脇差を挿し、「此の合戦、味方の勝利疑なし。毛利家の武運長久、賀すべし、祝すべし」と云ひけるに清水宗治獨り容を改めて曰く、「方々の妄に勝利を祝せらるゝこそ心得ね。信長來り向はじ、其兵十數萬あるべし。われら小城に據りて拒ぐとも、到底勝利あるべしと思はれず。其時は城を枕に切腹するの外なし。その爲にこそこの脇差は下されたるなれ」とて、三度まで挿し退出せり。嗚呼、宗治はこの時既に城に殉じて、毛利氏に酬いむと決心しけるなり。

宗治の覺悟せしが如く、織田氏の先鋒の總大將、豊臣秀吉、三月に至りて、八萬の大軍を以て押寄せぬ。戦ふに先だつて、秀吉はまづ蜂須賀彦右衛門、黒田官兵衛の兩人を城中にやり、利を以て誘うて曰く、「織田氏に屬せば、事成らむ後、備中備後の兩國を與へむ」と。されど、死を決したる宗治、利に動かざりき。是に於て秀吉は鮮血を以て城を贖はざるを得ず。城は平城なれども、頗る堅固なり。殊に之を守れるものは、中國無雙の名將、死を鴻毛と輕んじ、義を泰山と重ずる清水宗

治の事なれば、容易に陥るべくもあらず。五月七日、秀吉は、蛙が鼻といふ山に陣し、三里の間に堤を築き、川をせきとめて水攻にしけるに、さすがの堅城も、滔々たる洪水に押寄せられて、波、臥床に入り、魚、籠上に泳ぐ。いと苦しき籠城なりけり。

茲に殊勝なるは、宗治の兄、月清ツキセイなり。月清多年武者修行して、めぐりて京都に來りけるにその弟宗治、秀吉に圍まるゝ由を聞きぬ。『名譽なる籠城かな、命にかへても助けざるべからず』とて、急ぎ歸りて城に入りぬ。共に武士の分をつくして、共に死なむと思へるなり。

城中の兵、わづかに五千、今や如何ともすべからず。毛利方よりは、輝元大將となり、吉川元春小早川隆景、之に副ひて、四萬の軍、後詰に來りしかど、秀吉の軍を退くる由なく、堤を壞すを得ず、城中ますます困しむばかりなり。一夜、宇喜多小二郎といふ者、毛利氏の書を持して泳ぎて城に入る。その書の大意に曰く、『後詰として來りしかど、はかしく加勢をなすこと能はず。此上は籠城も難からむ。早く織田氏に降りて、城中の兵を援へよ』と。されど、宗治の意志は動かざりき。

宗治は終に一死を以て、衆人の命を贖はむと決心せり。兄月清、『汝を措いて獨り生きながらふべくもあらず』とて、これも自殺することとなり。なほ末近信賀も自殺することとなり、都合三人の命を以て衆に代ふることとなりぬ。他の諸將士、もとより死を惜しむものにあらず。されど、宗治は、『茲に大死せむよりは、後日大に毛利氏の爲に盡して死せよ』とて、許さざりき。かく覺悟を定めて、書を秀吉の陣に送りて曰く、

謹而奉述愚意候。

抑當地永々御在陣、諸卒之勞力、乍恐奉察候。然者當城極進之儀彌近奉覺候。清水兄弟、末近左衛門尉信賀三人之者、代衆命可致切腹之條、被垂御憐愍籠城之輩、被施寛仁之君德悉於御助者忝可奉存候。依回章明四日之日中、可及切腹候。將又小船一艘並美酒佳肴、聊預恩賜候者、且忘籠城之辛苦、且可散老兵之疲勞候。此旨御披露所仰候。恐々謹言

天正十年六月三日

清水長左衛門宗治

蜂須賀彦右衛門殿

杉原七郎左衛門殿

秀吉の返書は、左の如し。

御狀の趣、筑前守へ令相達之處に、各三人代衆命、籠城之諸人可有御助の結構、一入被相感候
則可照御望旨候。然者小船一艘、酒肴十荷、並上林極上三袋、令進入候。明日檢使差出候様にと
御使者被申候。被仰越外、縦雖爲長男連枝、切腹有之間敷旨、被申候。恐惶謹言

六月三日

峰須賀彦右衛門家政

杉原七郎左衛門家次

清水長左衛門殿

かくて談判はまとまりぬ。死に臨んで、なほ美酒佳肴を乞へるは、饑を疲れたる城中の將士を慰
めむとするなり。宗治の臣に、白井興三左衛門治嘉ハルヨシといふ勇士あり。追手の櫓を守りけるが、三日
の晩、使を本丸にやりて、「直に申上げたき事あり。早く御出下さるやうに」と云ひければ、宗治之
に赴く。治嘉大に悦び、「愈々明日御切腹に極りたりと承り、某先づ試に切腹せり。いかにも易きも
のなり」とて。腹巻とけば、見事十文字に腹かき切りて、鮮血流ること泉の如し。宗治驚くこと
一方ならず、「さても殘多き事なり。其方常々忠心類なきものなれば、妻子の行末を頼み置かむと思
ひけるに、はや我に先立ちけるか」とて、覺えず涙を墮す。治嘉、微笑して宗治を顧み、「先立つ罪
は許されよ。恐ながら御介錯煩はし奉る。今生の本望なり」といふに、宗治力なく、其首うち落
して本丸にかへりぬ。

宗治の長子源三郎は、人質となりて、毛利氏に在り。父が斯る最期とも知らず、嬉戯せるなるべ
し。生長しなげ、この歌の心をさとり、忠勤を勵むやうに傳言せよとて、今生のかたみに記しける
は、

恩を知り慈悲正直に願ひなく辛苦氣盡し天に任せよ

朝起や上意算用武具普請人をつかひて事を敬しめ

談合や公事と書狀と威儀法度酒と女に心亂すな

死後の事殘る隈なく遺命し、暇乞の杯も終りて、童に命じて、髭を抜かしむ。幕下の衆、毛利氏

より加勢に来れる人々、暇乞に来れるが、この様を見て、「かゝる折柄、入らざる男振の御作りやうかな」と云ひければ、「さな言はれそ、某の首は信長公實檢あるべし。此まゝにて髭を置きなば、籠城の心遣りに忘却したりと、見る人に譏られむも口惜しからずや」と答へぬ。亦以て當年の武士の心掛を見るべし。

天正十年六月四日は、宗治の死すべき日なり。己の刻、宗治衣裳を改めて船に上り、數千人の號哭の聲を後に殘して漕ぎ出づ。あはれや弘誓の舟ならなくに、恨も深し死出の海、西は輝元、元春、隆景の陣、寂として聲なく、東は秀吉の陣、千生飄軍風にそよぐ。その中間の漫々たる水上、一葉の扁舟、一命をすて、部下の將士を援はむとする絶代の義士を載せたり。四面の青山愁を含み、魚龍慘として躍らず。咄らるる櫓聲、高く天地の間に響きて、舟は次第々々に死地に近づけり。かゝる程に、秀吉の陣より、檢使として、堀尾吉晴小船に乗りて來りぬ。約束せし酒肴を贈られぬ。宗治吉晴に向つて其勞を謝し末期の盃を廻らしつゝ、聲高らかに誓願寺の舞曲を謡ひ出せば、月清、信實も之に和して詠へり。嗚呼武夫の最期、あはれにもまた花々しきかな。

浮世をば今こそ渡れ武夫の名を高松の苔に残して

一首辭世の歌を此世の置土産に、宗治先づ切腹し、月清も、信實もついて切腹せり。あはれ、風雲千年何の處か英雄未死の魂をとさす。薛苔殘壁を埋めて、名を埋めず。松風羅月、とこしなへに物のあはれを残しけり。

二 備後の神邊城

備後の神邊城は、杉原忠興とて、勇名四隣を壓せし豪傑の據りたりし城なり。忠興大内氏を見限りて、尼子氏に附きけるが、天文十七年、大内隆隆、陶晴賢スエヘルカダをして之を攻めしむ。毛利元就、其子の元春、隆景と共に大内氏の命をうけて、往いて之を攻めしが、容易に陥らざりき。平賀隆宗、忠興と宿怨あり。獨り引きうけて、城を陥れむと乞ひければ、元就、晴賢は兵をかへしぬ。元就、元春、晴賢の如き豪傑が揃ひても抜く能はざりし城を、いかてか隆宗一人の力にて抜くことを得べき。

攻むること三年に及びたれど、果して抜くこと能はざりき。天文十九年十月、隆宗使を城中にや

りて曰く、『このまゝにて戦ふとも、いつ勝負はつべしとも見えぬ。雙方ともに勞して益なき事なり。子は弓の名手なれば、われ請ふ身を的にして、子の二矢を受けて、天意のある處を卜せむ。もし中らば、我が命はなきものなり。幸にして中らずんば、子、城を我に致せ』と。忠興之を諾し、十三日を期して、兩將軍身にて城外の野に出逢へり。忠興は年老いたれど、昔取りたる杵柄、弓矢の達人なれば、必ず射中てむといきまく。ましてこれが矢面に立たむとする隆宗は、何ぞ剛膽にして冒險なる。李將軍が虎と見誤りて石を射通し、が如き、ウイルヘルムテルがゲスレルに強ひられて、我が子の頭上の林檎を射しごとき、那須與市が屋島に扇の的を射しが如き、古來弓に就きての逸話は多けれども、隆宗が命を賭し、忠興が城を賭して矢を試みしが如き、滑稽的にして、且つ賭博的なることは、幾んど空前絶後なり。されど、隆宗は到底我が力を以て陥れ難きを知りて、この一か八かの賭をなし、なるべく、忠興は我が弓術を恃みて深く思慮せず承諾したりしなるべし。相距ること六十歩、隆宗胡床に腰かけ、扇を擧げて之を招く。兩軍は鳴をしづめ、片唾を呑んでまたゝぎもせず。忠興ねらひ定めて、弓を満月の如くよつびき、ひようと放てば、其矢腹甲の横、脇差

のさゝれたる處に中りぬ。されど、隆宗からくと笑ひ、欺いて曰く、『子の射力衰へたるにや。箭低うして達せず』と。さらば、今少し上をとて、二の矢を放ちけるに、こたびは空しく、隆宗の頭上を通りこしぬ。武士に二枚の舌なし。今發由とも呼ばれし我が身が、二箭とも射中つる能はざりしは、よく武運のつきたるなりとて、忠興はいさぎよく城を明わたして、出雲に落ちゆきぬ。

尼子晴久はかゝるべしとは、夢にも知らず、其臣目黒秋光をして往いて之を援はしむ。秋光發するに臨み、大言を吐いて曰く、『われ隆宗を破らずんば生きて歸らず』とて、勇んでいでゆきしが、途にして、忠興が空しく城を明けわたして來れるに逢ふ。秋光怒つて曰く、『兵は詭道なり。子何ぞ愚なるや』と。されど今おめくと歸れば、前の大言を如何せむとて、其兵を悉く忠興に附し、單身城に入りて隆宗に逢ひ、實を告げて自殺せり。他を罵りて詭道を解せずと云ひながら、己もまた詭道を解せざりけり。嗚呼、忠興は一言の信を守りて城を致し、秋光は一言の信を失はじとて身を致せり。げに忠興秋光には、城よりも、命よりも、一言の信が重かりしなり。愛すべき武士なるかな。而して今の人ば之を馬鹿正直と陰笑するなるべし。

三 因幡の鳥取城

千將莫邪の名劍も、弱卒の手にありては、その切れ味を試みるに由なかるべし。鳥取城は類少き堅城なりしかど、其城主山名豊國の意氣地なきが爲に、恥多き歴史を有すること遺憾なれ。

元龜天正の際、山中鹿之介が、亡國の恨をいだいて、山陰の野を横行せるに當り、忽ち其手腕を伸すべき地を得たり。即ち山名豊國が其部下武田高信の爲に城を取られて困り居ること、是れなり主たる者何ぞ無能なるや。其臣何ぞ人なきや。鹿之介は浮浪の身なり。率ゐる所はわづか數百の海賊あるのみ。而も一片の快骨、豊國の爲に高信を破つて、鳥取城を恢復せり。

鹿之介は、豊國の恩人なり。鹿之介が但馬因幡を経て、出雲に向はむとするや、豊國は之に應ぜり。然るに吉川元春大軍を率ゐて來り臨みければ、豊國は恐れて元春に附けり。元春去り、鹿之介の勢盛なるに及び、また之に付き、豊國は鳥取城の一の丸に居り、鹿之介は、二の丸に居りたり。既にして元春大軍を率ゐて因幡に入り、頻に豊國の圍城を陥るゝや、例の臆病者の豊國、又鹿之介に背いて、元春に付き、一の丸より二の丸に向つて射かくるに、鹿之介詮方なく、城を出で、去りぬ。嗚呼恩を轉にてかへしけるなり。

後數年を経て、豊臣秀吉大舉して山陰道に向はむとす。豊國老臣を集めて、其向背如何を問ふ。森下通興、中村春次の兩人曰く、「これまで毛利氏に對して反覆常なかりしこと既に大恥辱なるに、此上秀吉に降らむは、恥のうはぬりなり。苟くも武士のおくびにも出すべき事にあらず」と。流石に腰ぬけの豊國も、此一言にはげまされて、秀吉に従はざりしに、秀吉大軍を以て攻め寄せぬ。何處よりか捕へ來りけむ。豊國の娘を城外にしぱりつけ、「娘の命と因幡が欲しくば、我に降れ」といふ。無殘なるかな。燒野の雉、夜の鶴、子のかはいきに、豊國は又も軟化して秀吉に降る。秀吉之に因幡の二郡を與へて軍をかへしぬ。硬骨の森下中村の二人、憤慨に堪へず、かばかり腐れ果てたる主君を戴くに忍びずとて兵を擧げぬ。豊國抵抗すること能はず、城を棄て、姫路に落ちゆきて秀吉をたよりぬ。下尅上とて、臣下の主君を凌ぐは、足利氏以來のならばし。絶對的に森下中村の二人を責めむは酷なるべし。

かく鳥取城は、恥辱をのみ留めたれど、たゞ吉川經家の一死、以て鳥取城を飾れり。森下、中村

の二人、吉川元春に城督を遣さむことを乞ふ。元春乃ち經家を遣せり。經家發するに方り、首桶を一隊の前にもちゆけり。これ死を決して城を守らむとするなり。秀吉果して八萬の大軍を以て來り圍む。城は天下無比の堅城、城將は經家、力を以て陷るゝこと能はざるなり。されど糧食の盡きたるを如何とむや。秀吉今はとて堀尾吉晴を城中にやりて曰く、『森下、中村の二人は主君を追ひ出したる逆臣なれば、この二人のみを殺して、和睦せむ。御身を初、他の一同悉く安樂まで送りまゐらすべし』と。經家答へて曰く、『我は一城の主なり。森下、中村の如き、我に義を立てたる者を殺して、我れ獨り生を竊むべくもあらず。われ獨り自殺せむほどに、他の一同の命を助け給はば、此城を差上げ申さむ』と。秀吉之を諾す。吉晴檢使となりて來る。經家切腹せり。されど、森下、中村も命を惜しむ腰拔武士にあらず。つゞいて切腹せり。秀吉、經家の首を信長に獻じけるに、世に見事なる武將かなとて、命じて禮を厚うして葬らしめけりとぞ。

四 出雲の月山城

尼子三代の居城、大内氏も毛利氏も數萬の大軍にて攻めたりしも、力を以て抜くこと能はざりし

天下無雙の堅城月山城を、尼子經久が浮浪の身、僅々數十百の衆を以て乗取りしこそ面白けれ。

京極高詮、近江に居りて出雲を領し、其甥尼子持久を目代として出雲につかはしけるが、其子清定に至りては、驕心を生じ、本家の命に従はざりければ追ひ出されて、流浪の中に病死せり。經久は即ち其子なり。

今や鹽冶掃部介、目代として月山城にあり。尼子の舊臣、他國にゆきて仕を求めたるあり。刀を賣り、牛を買ひて農夫となれるあり。されど、忠臣二君に事へずと氣張れるものなしとせず。山中勝重、龜井安綱、河副常重など是なり。

經久、年なほ若かりけるが、もとより池中のものにあらず。今の肩幅せまき流浪の身を轉じて、父祖の舊業を恢復せむと心を碎きけるが、先づ山中勝重を語らばとて、鰐淵山下なる其居を訪ひぬ。時は冬の初、曇りがちな山陰の空、終に雪を醸して、六花繽紛、天地みるゝ水晶宮となり、日本海をわたり來る高麗嵐、肌を劈くばかりなるに、浮世を遮る深編笠、我が物と思へども降りつもる雪重く、布子一枚の身は軽く、袖うち拂ふ蔭もなき簸川平原に、一雙の鞋痕を印しつゝ、

たどりゆく浪人の子の、餓に瘦せ、寒さにやつれ、見る影もなき有様のいとしき。爐頭の自在かぎに、鐵瓶の湯たぎらせて、語るも悲しき昔の榮華、顔うち合せて愁然たりし勝重夫婦、かくと見るより、珍らしや若君様、世が世ならば、綾羅につままれて、冬の寒さもよそに暮し給ふべき御身の寒さを掩ふに足るべき着物もめされず、やつれはて給ひたる御姿、さりとは神も佛もあらぬ世か。いざこの爐火にあたしまり給へ。何はなくとも、^{ウツノルロ}十六島海苔に濁酒一樽、たゞ此老人の心を汲まれよとて、喜びつゝも鼻うちかめるは、新に添へし妻木のいぶるが故のみにもあらざるべし。

經久その好意をよろこびて、意中を明しけるに、勝重かねて待ち設けし所といさみ立ち、同志の苗臣をあつめけるに、五六十人ばかりは集りぬ。されど、堅牢無比なる月山城を乗り取らむには、人數あまりに少し、如何がはせむと談合しけるが、鉢屋^{ハチヤ}とて、運卒の役をつとむる黨類あり。之を手に入れむとて、その長二三人を山中の宅によびよせ、事成らば、重く賞せむほどに、加擔せよと説きすむれば、むかしの尼千殿の御恩、忘るべくもあらずとて、一議にも及ばずして、仲間に加はりぬ。

文明十八年正月元日、鉢屋の黨類七十餘人、着込の腹巻の上に、舞鶴の紋つきたる素袍を着し、各々利器を隠しもち、例の如く、萬歳、鳥追となりて、大鼓、笛、鼓、亂調に囃したて、世のまだ明けはなれぬ頃、月山城の追手門に至り、『あらめてや五十六億七千萬歳、彌勒の出世、三會の曉』と聲高らかに祝ひければ、『さては萬歳來りたるか、一夜五十日といふ大晦日も明けて、元日となりぬぞ。はや起きよ』と城中俄に騒ぎたて、萬歳見むとて、追手門に集りぬ。かねて搦手には經久はじめ、山中、龜井、眞木、河副等五六十忍び居りて、聞ゆる太鼓の音を合圖に亂入して、長屋々に火を放ち、鯨波の聲をあげて攻め立てければ、不意の出來事に刀執る間もなく、たゞあわてふためき、兒女は泣き叫び、上を下へと混雜す。追手門の萬歳も、今は笛太鼓をすて、亂入し、兩方より一時に殺到して、當るがまゝに薙ぎ立つるに、城中人は多けれども、皆度を失ひて、役につものは一人もなく、烟船はやくも城中にみちわたりぬ。城主掃部介、自ら長槍を揮うて出て向ひ、雜兵數人を倒しけるが最早如何ともし難しと見てとり、本丸にのぼりて、妻子を殺し、其身もついで自害して、城終に陥りぬ。かくて經久は浪人の少年より一躍して、一城の主となりけるなり

五 山雲の阿用城

浪人より起りて、山陰山陽十一國を切り従へたる尼子經久、城を屠りしこと其數を知らざるが、阿用城を抜きし策略こそ面白けれ。

阿用の城主、櫻井宗的ユキアキ、かねてより經久が草莽より起りて月山の城主となりしことを快からず思ひしが、終に叛旗を翻しぬ。經久乃ち長子政久をして、兵七千を率ゐて之を攻めしむ。城堅く、糧食足りて、容易に陥るべくもあらざれば、持久の謀をなし、人家數十軒をうち破り、二重にやぐらを構へて、城中の動靜を見下し。城外の八方に歩卒をつかはし、城中より出で、稻を刈るを得ざらしめ、やぐらの上には近習の若者を集め、管絃の稽古をさせ、政久笛は天王寺淺間某の弟子にて、堪能なりしかば、常に之を弄びてわざと惰容を示して、敵をはからむとしけれど、宗的も智慮ある老功の武者、うかと其謀にのらず、ますく備を嚴にして動かざりき。

一夜宗的ふと思ひたらで、獨り城を出で、敵のやぐらの前に忍びゆきしこそ大膽不敵なれ。時は永正十五年の秋、九月五日の夜、澄みわたる秋の空に、からる漕ぎつゝ飛びゆく數行の雁がねを見送れば、一片の新月、はや山の端に沈まむとし、夜意沈々として、枯草にすだく蟲の聲ひやゝかなり。笹簫の中にかくれて何ふに、やぐらの上には笛の聲す。幽囁たる其聲、行雲を過むべく、たへに澄みたる其調、梁塵を躍らしむべく、蕭森たる秋氣に和して、一揚一仰、そゞろに人の腸をたゝしむ。鬼を欺く宗的も流石に感に堪へざりしが、これ必ず敵の大將政久のすさびならむと、ねらひ定めて、はつしと、矢は放たれぬ。矢の飛ぶと共に、笛の聲は止みぬ。あはれや政久、神ならぬ身の、敵將何ふとは夢にも知らず。一曲又一曲、我れ吾を忘れ、心は笛の音と共にすみゆきて、天地の表に飛揚し、玉皇の前に謁せし刹那、思もかけぬ一發の毒矢に、むくろの息は絶えて、魂は其まゝ天にとゞまりけむ。前途多望なる若武者、未だ武夫の花をも咲かさずして、惜しや二十六年の一期の夢は覺めにけり。

弟の國久、興久、遺骸を抱きて、ぢだんだ踏み、我等身を粉にせむとも、城を屠りて、兄の體を復せずんば止まじ。いざゝとはやりにはやるを、龜井、河副等おしとめ、『さりとはあまりに短慮なり。死を秘して之を知らさず、靜に、御父君の賢慮を仰ぎて、然る後、この恨をばらし給ふ。』

そ然るべけれ』と理の當然に、國久兄弟も激せる心を抑へて、父にかくと注進しければ、經久驚き且つ憤りて、直に阿用の陣に來りぬ。されど、後には十一國まで略取したる絶代の豪傑、『激怒のあまりに無謀なる事して、敗を取りては、恥辱の上の恥辱なり。我に良計あり。たゞ我が爲さむ所を見よ』とて、夜に入りて、龜井、河副、横道、牛尾などの諸將をして兵を率ゐて前門を攻め、敵出で逢ふにおよびて、強ひて攻めずして歸らしめぬ。斯の如きこと三夜、宗のおもへらく、『敵しばしば攻め來れども、其勢振はざるは、大將を失ひて、心おくれたるが故ならむ。遠からずして引き上げべし』とて、城主心を許せば、士卒も張りつめし氣ゆるみ、備もやゝ怠りぬ。四日目の夜には、經久、第四子興久をして兵三千を率ゐ、高さ二丈ばかりの高竿に、各燈籠をつけ、兵士毎に松明を持ち、鉦太鼓を亂調にうち、貝をはげしく吹きたて、叫びわめきて、前門に迫らしむ。宗のおもへらく、三夜も意を得ざる故、絶望のあまり、死物狂ひとなりて、大舉して押寄せたるならむ。諸手の兵を一所にあつめて、よく守るべしとて、心を前門にのみ注ぎぬ。宗的、果して經久の陥奔に落ちぬ。時分はよしと、經久、次男國久をして、後門より入りて攻めしむ。果して後門には備なかり

き。あまりの意外に城兵擾亂して、支ふること能はず。城主宗的十字槍を揮うて奮闘せしが、終に猛火の中に討死せり。嗚呼經久わづか數日の間に堅城を陥れ、子の讐を復しけるなり。

高杉晋作

米艦渡來より攘夷說となり、開港說となり、尊王となり、佐幕となり、櫻田門の暗殺となり、安政の獄となり、公武合體となり、元治の變となり、七卿西奔となり、十津川の擧となり、銀山の擧となり、長州征伐となり、大政奉還となり、彰義隊となり、奥羽戦争となり、開港となり、維新となるに至るまで、幾んど二十年、其間幾多の志士をして苦悶せしめたりけむ。幾萬人の鮮血を地に灑ぎけむ。今日太平の春に櫻花さく東溟は、三河武士が最後の花を散し、處なり。鐵車客夢をのせて過ぐる函嶺は、幽囚將に殺されむとする志士が困夢を鐵車に托せし處なり。嗚呼、眞の維新の元勳なるもの今何處にかある。一寸さきは闇の世の中、今日あるを知らば、誰もみな勤王の士となら

ざるはなかるべく、むざむざと勤王の士を殺すこともなかるべけれど、うたてや大義よりは一身一家若しくは一藩の安全が大事と、小人に免れぬ根性、かくて闇の中になぐりあひせしこそ憐なれ。薩長士は、世に勤王の三藩と稱せらるゝ所、而して余は最も長藩が始終つゆかはらざりしを欣す。世みだれて英雄あらはる。薩の西郷大久保、土の坂本など、みな百代の偉人なれども、余は最も高杉晋作の奇抜なるを愛す。高杉は天品の奇才なり。少くとも當時第一流の人物なり。

關が原の天下わけ目の戦に、西軍もろくも打やぶれて、天下は徳川の有となりぬ。九州に雄視せし島津氏は、薩偶日の内にちゞまり、山陰山陽に羽をのばし、毛利氏は、長防二州にひそみぬ。されど、もとをたゞせば、徳川氏と同列の諸侯なり。男子の意氣地あらむ限は、祖先のうらみ、いつかは忘るべき。徳川の基礎全くかたまりて、太平は極まれる元祿の世、水藩の手になりし一部の大日本史は早已に尊王の曙光をもらせり。やゝ下りて竹内式部あり。高山彦九郎あり。蒲生君平あり。頼山陽の日本外史あり。本居平田などの國學者あり。大義名分漸く士人の頭にしみこみし際に方りて、端なくも米艦の渡來に接しぬ。開港は幕府が外人におどかさされて、止むを得ず承諾せし所、攘夷は朝廷の主張し給ふ所、是に於て尊王と攘夷と合體して、幕府に一大打撃を加へぬ。水藩はさすがに大日本史以來の教養をうけて、尊王なり。又攘夷なり。之を代表するもの、上に烈公あり。下に東湖あり。會澤あり。その風を聞いて起つもの、漸く天下に多し。長藩の赤川、水戸藩の感化をうけて、長藩に勤王の種を蒔き、松陰之に和して起てり。なほ方外の海防僧あり。まことの名は、月性なり。今もなほ學生の口に膾炙する『男兒立志出鄉關、學若不成死不還、埋骨豈期墳墓地、人間到處有青山』の一首は、この海防僧が十六歳の時の作なりとぞ。勤王の三藩の中、薩や一時公武合體に傾きしことあり。土や徳川の譜代なり。容堂の如き人物ありしと雖も、勤王を一貫するに由なし。たゞ長や藩内に俗論黨なきにあらざりしも、幾んど勤王を一貫せり。朝旨を奉じて攘夷までも實行せしは、獨り長のみなり。長藩のなし、所、すべて過激猛烈、人心を快くす。幕府を相手にし、一命を賭して、獨力天下の兵に當りし意氣込ばかり壯烈なることは、また之を他に求むべからず。維新の事成りし最後の原因は、大政奉還にあらず、藩籍奉還にあらず、實に長州征伐なり。而して此際騎兵隊を率ゐて、戦争の衝に方りて、絶代の奇智奇策をふるひしものは、實にわが高杉晋

作にあらずや。

二

晋作が吉田松陰の門に入りしは、安政四年にして時に歳十九歳なり。これより先、久坂通武、既に松陰の門にあり。松陰稱揚して曰く、少年奇才、國士無雙と。晋作謁するに及んで、喜んで曰く玄瑞に劣らずと。

維新前に於ける長州の志士を順序立てむに、まづ吉田松陰なり。次に高杉晋作、久坂通武なり。次に木戸孝允なり。次に山縣有朋、井上馨、伊藤博文なり。英雄は英雄を知る。松陰が久坂、高杉の二子を稱揚せるは、二子の爲に重きをなすに足る。而して二子は果して松陰の見る所にたがはざる英才なりき。

晋作、幼より卓犖不羈、言論壯快流るゝが如く、氣象豪邁、好んで詩を賦し、俳句をつくりしがやゝ長じては、専ら心を兵書に潜めたり。松下塾に入りし頃晋作才を恃み、敢て學を勤めず、漫に大言壯語して快とせり。通武は之に反して沈着に、學藝既に老成の風あり。松陰、通武を揚げ、晋作を仰へければ、晋作反省して奮勵し、學業大に進めり。これより松陰事を議する毎に、多く晋作を延けり。通武曰く、晋作は余の及ぶ所にあらずと。晋作も又曰く、通武は天下の奇傑、われいかでか之に及ばむやと。松陰之を聞きて、二生相讓ること此の如し。洵に國家の大幸なりと、喜べりとかや。

高杉、久坂の二子、同年に生れ、才器相匹敵し、交情もまた極めて密なり。時人稱して聯璧と云へり。惜しいかな、元治の變、通武京師に討死して、一玉碎けぬ。後、晋作一絶を作つて、之を弔うて曰く、

弔久坂義助、先師嘗稱義助曰青年第一流

埋骨皇城宿志酬、精忠苦節足千秋、欽君卓立同盟裡、不負青年第一流

晋作、松陰の塾に學ぶこと一年、安政五年江戸に出て、聖堂に入りて學べり。松陰が刑に就きしは、その遊學中の事なり。居ること二年、萬延元年、江戸を去りて、國にかへり。

この時、晋作の才名、一藩に聞ゆ。藩主毛利慶親拔擢して、世子元徳の近侍となせり。時に文久元年、晋作二十三。年かく若くして門閥も高からざる晋作が、拔擢を被りたるは、當時の人驚いて異數とせし所なり。亦以て晋作の才器非凡なりしを知るべし。

文久二年、幕府、吏を上海につかはせり。藩主、晋作をして随行せしむ。晋作乃ち、文久二年正月二日、五百金をうけて、長崎に至れり。幕吏も亦至れり。されど、出發三月の後にあり。三箇月間は空しく長崎に滞在せざるべからず。横濱なく、神戸なかりし當時、長崎は唯一の大港市にて、兼りて花柳の地なり。太平の春に酔へる幕吏、腰纏は十分なり。身は揚州にあり。いかてか三箇月間、嚴肅なる閑居をたもち得べき。晋作之に従つて豪遊せむか、折角君公の賜へる旅費盡さむ。之に従はざらむか、侍の交際を辨へぬ田舎武士と擯斥せられむ。流石は才物の高杉、綺樓の間に留連する代に、別に家を購へり。されど居を別にするのみにては、なほ幕吏に誘ひ出さるゝなり。よりにて又妓を購へり。既に家と妓とあり。幕吏また誘ふに由なし。かくて晋作は豪遊のおつきあひを免れ、従つて非常の散財を免れ、又交際を辨へざる野暮とも云はれず。出發の際は、その家をうりて

金に代へ、幕吏と共に上海に赴き、滞在すること三箇月、七月歸國して、藩主に復命せり。

三

上海より歸りて後間もなく、晋作世子に従ひて江戸に赴けり。江戸に赴きて間もなく、晋作は藩邸を脱して市中に寓せり。活氣充滿せる晋作、一日も閑座すること能はず。世子の近侍、地位もよく、且つ安全なれど、活氣をもらすに由なし。由りて晋作は邸を脱して、編束をばなれても、自由なる働をなさむとせしものか。

晋作常州より歸り來り、彌二郎が一言の信を守りて、他に洩らさざりしを聞きて、いたく感服せりとぞ。十一月、久坂通武等と相謀り、神奈川に赴きて外國人を掩撃せむとせしが、事洩れたり。世子大に驚き、馬を馳せて之を追ひ、大森にて追ひつき、涕涙を以て之をといめしかば、晋作等も感泣して、思ひといまりぬ。既にして世子は江戸を去れり。然るに、晋作は、なほといまりぬ。知らず、何をか爲さむとする。

當時の志士、幕府の姑息を憤らざるはなく、又外人の跋扈を憤らざるはなし。御殿山の外館を焼

き拂ひしこと、當時にありては、血氣の志士の所爲として、人之を快とせざるはなかりき。誰か知らむ、これ晋作等長藩志士の所爲なりしことを。

幕府外人をして市外に居らしめむとて、高輪御殿山に五國の公使館を設置せむとし、先づ三萬兩を出して英國公使館を建て、結構其美をつくせり。工事幾んど竣り、將に之を英國公使に交付せんとす。晋作憤慨措く能はず、焼かむとて、久坂通武、井上聞多、伊藤俊輔等數人と相圖り、共に往いて品川の妓樓に上り、且つ飲み、且つ談じて、夜のふくるを待つ程に、夜は半となりて履聲漸く稀なり。時分はよしと、出で、御殿山に赴く。文久二年十二月十二日の夜なり。幕府が外人に媚を呈する卑屈心を代表して、洋館巍然として、夜色の中に聳立す。館外の溝をこゆれば、竹柵あり。機敏なる伊藤俊輔、さきに品川市中にて鋸一つ買ひ、妓樓に上りし時之を中庭の龍吐水の中にかくし置き、樓を出づる時之を携へ來りたれば、竹柵を苦もなく切りて、柵内に入ることを得たり。番士に燐却の事を告げ去らしむ。番士去らず。乃ち火藥に火を放つて、館を焼く。さしも壯大なりし洋館見る／＼烏有に歸せり。而して當時世人はその何人の所爲なるかを知らざりき。

晋作は、なほ江戸にある程に、文久二年は暮れて文久三年となりぬ。晋作が通武等數人と共に松陰の遺骨を小塚原より若林村にうつし、その正月五日の事なり。蓋し小塚原は刑死者を埋むる汚穢の地なるを以てなり。其新棺を護して若林村に向ふや、晋作騎馬にて之を先導せり。上野三橋に來る。其の中橋は將軍の通行する處にて、諸侯といへども通ること能はざる處なり。然るに、松陰の遺骨を移す長藩の志士は、大膽にも之を通らむとす。橋を守る吏卒叱りて止む。晋作鞭をあけて一喝して曰く、我が輩勅旨を奉じて忠節の士の遺骨を護送するなり。此橋を過ぐるに何の不可かあると。守吏その威風に恐れて、遮りとせむること能はざりき。傍若無人にして、眼中また幕府なきものと云ふべし。

なほ晋作は二月一杯は、江戸にとゞまり、三月に至り、江戸を發して京に上れり。

四

晋作亡命したるも、世子之を咎めず。晋作の心を知ればなり。晋作京に至れば、世子在り。久坂通武も、入江九一も在り。世子晋作を薦めて、學習院御用掛とせり。これ晋作がさきに藩邸を脱し

て常陸に赴きたるを、藩法に觸るゝを以て之を救はむとてなり。居ること幾もなくして歸國し、自ら脱邸の咎を引き、松下村に屏居謹慎せしが、藩にても、事情を知れるを以て之を罰せざりき。長士有志の奔走によりて、廷議いよく攘夷と一決し、文久三年四月、攘夷の詔出でたり。長藩詔を奉じて、外國兵を馬關に砲撃せり。世亂れて英雄を憶ふ。これ晋作の如き偉材をして空しく屏居せしむべき時にあらず。藩主晋作を起し、往いて之を救はしむ。晋作至れば、戦既に終りたる後なりき。

この一戦にて、門閥によりて士卒の等級をわかつことの非なるを實驗せり。當時、兵はみな士族その門格高きもの上にあり、低きもの下にあり、されど、門格高きもの、却つて庸劣にして、長官の器なきもの多く、才を抱くもの、往々下において其力を伸すことを得ず。晋作こゝに建議して、奇兵隊を編制せり。門格の如何によりて將卒を分つことを止め、士族のみならず、平民にもその力量あるものは、之を用ゐて兵となし、たゞ材能によりて等級を付す。これ奇兵隊の制なり。實に今日の徴兵の基礎にして、當時にありては、卓見と云はざるべからず。

當時士格以下のものは、幾んど動物と同様にとりあつかはれたり。されど、農工の徒とても、豈に兵となるに堪へざるものならむや。奇兵隊は數百年來の慣習を打破して、士庶を問はずして、たゞ材能を問へり。庶民も一たび奇兵隊に入れば、苗字を名乗るなり。刀を帶ぶるなり。下駄足駄を穿くことをも得るなり。氣を負ひ、名をこのむの徒多く來り集りて、その數四百人に及べり。されど、烏合浮浪の團體にあらず。規律正しく、賞罰嚴なる節制の師なりき。他日よく幕軍を打破りしも、この奇兵隊なり。山縣公の如き、伊藤公の如きも、みなこの奇兵隊より出でしなり。

五

攘夷の詔出で、攘夷家、尊王家の雀躍せしも、たゞ一時の夢、薩州や、會津や、もと之にあづからず。攘夷尊王一方の長州と、公武合體の薩州とは、こゝに反目するに至れり。終に敵視するに至れり。これ幕府にとりては、もつげの幸なれども、尊王家にとりては、此上もなき不幸なり。朝廷の中にも、過激なる攘夷説を唱ふる公卿あれど、また之を好まざる者あり。而して攘夷の詔出で、長藩の威名、海内を震動するに至りしは、幕府のよろこばぬ所、また薩藩も喜ばぬ所。是に於て

一部の公卿と、幕府と、薩藩と相合し、長人排斥運動を起せり。其運動成功せり。長人の宿衛を止め、其入京を禁ぜり。さきの攘夷の詔はとり消されたり。攘夷を實行せし長藩の所爲は、勅命にそむくものとなれり。攘夷家は全く勢力を朝廷に失へり。實にこれ文久三年八月十八日の事なり。

長藩と主義を同じうせし硬派の公卿、三條實美、東久世通禔、西三條季知、四條隆謨、壬生基修、錦小路頼徳、澤宣嘉の七人等、長州に奔れり。攘夷家の憤慨は一方ならず、藤本鐵石、吉村虎次郎等は兵を十津川に起す。平野國臣、南八郎等も兵を銀山に起せり。いづれも一敗地にまみれたり。

元治元年正月、將軍家茂上京し、所謂翻覆の論旨出でたり。長藩が多年の苦心も水泡に歸し、其勢いよく非なり。

長藩の有志百方苦心して藩主の冤を雪ぎ、素志を伸ばさむとしたる末、益田右衛門介、福原越後國司信濃の三家老兵を率ゐて、京に入り、長人の入京を許されむことを乞ふ。朝廷許し給はず。有志おもへらく、君側姦あり、聰明を蔽ふ。之を除かざるべからずと。進みて宮闕に入り。會薩の兵と闘つて敗走せり。之を元治の變と稱す。而して晋作と共に聯壁と稱せられし久坂通武は、この變に死せり。

元治の變は、長人が朝廷に對して弓をひかむとしたるものにあらず。久坂、入江等の血氣の志士死を決して君側の姦を除かむとしたるものなり。而して晋作は、之に對して如何なる態度をか執りたる。

六

長藩が攘夷を實行せし以來、晋作は益々おもく用ゐられたり。政務應用談役、奇兵隊總官となりて一藩の政務を革新し、施設すること頗る多し。文久三年十月、藩主晋作をぬきんで、新に家を起し、祿百六十石を給し世子の奥番頭とせり。この年八月、朝議一變せしより晋作は藩主父子、七卿の間に斡旋し、籌策をめぐらす所ありしが、最も過激なる説を唱へて曰く、自ら兵を率ゐて、大坂城を奪ひ取り、天下を風靡せむと。されど、その説は行はれざりき。

かくて元治元年の春、益田、福原、國司の三家老、總將となり、來島又兵衛、久坂通武、寺島忠三郎、入江九一、眞木和泉、參軍となり、兵を率ゐて東上せむとす。血氣の晋作、いかでか骨鳴り

肉躍らざらむ。されど身は世子の奥番頭たり。之と共にすること能はず。能はざるのみならず、藩主に命ぜられて、往いて之を止むるの役目を言ひつけられたり。晋作三田尻にて、諸氏に迫及し、君旨を傳へたれども、來島きかずして出發せり。其止むるは、晋作の本意にあらず。唯君命を奉げしまでなり。晋作の本意は、大に諸士の擧を賛成せるなり。その事の危きを心配せるなり。己も一命を擲ちて、諸士と共に爲すあらむとまで決心し、復命せずして、三田尻より直に諸士に尾して上京せり。これ血性男子にありてはまた止むを得ざる所なり。されど通武等は、君側の身にして縦に脱走するの非なるを説き、且つ外にありて力を振ふよりも、寧ろ内にありて力をつくすことの急なるを説きて、國に歸らしむ。晋作止むを得ず國にかへれり。その結果、野山の禁獄となりぬ。晋作獄に入りて、書をよむこと日に數十葉、八十日の間、文三篇詩五十首を作れり。その獄に下りたるは、三月二十五日、六月に至り、禁錮を赦され、親戚預けとなりぬ。されど、なほ外出、他人との面會文通は禁ぜられたり。七月十九日に、元治の變あり。晋作なほ謹慎中の身なれば、空しく東天を望みて、腕を扼せしのみなりき。

されど、時勢は偉人をして空しく蟄居せしむるを許さず。文久三年七月には、長人京師に敗れ、八月には、前年要撃せられたる復讐として、英佛米蘭四國の聯合艦隊十八隻、馬關に來寇す。藩主また晋作を起して赴き援はしむ。この時の晋作がいでたちこそをかしかりけれ。綺服錦袴、高履を穿き、蛇目傘を手にし、絃妓數名をつれ、伊勢音頭を高唱して、陣營に入れりとぞ。奇傑の爲すと、常に人の意表に出づ。細墨を以て律すべからず。

かく晋作赴き援ひしといへども、我は一番の孤兵、利器未だ全からず。敵は四國の聯合軍、利器は備はれり。長士の意氣如何に壯なるも、この戦は、もろくもうち敗れぬ。藩論、媾和に決し、晋作等をして其衝に當らしむ。晋作は飽くまで戦を主張したれど、君命止むを得ず、家老矢戸刑馬と稱して、正使となれり。杉孫七郎、渡邊内藏太、副使となれり。晋作は鎧直垂を着し、他の二人は羽織袴を着し、往いて敵將に面し、媾和の談判を了せり。この戦、八月四日にはじまり、十四日にいたりて、失敗の局を結べり。間もなく、勢の非なるを見て、しばし九州にしのびゆけり。

七

長州の國內亂麻もたゞならず。三國老以下有力の士、或は殺され、或は獄に投ぜられ、或は出奔せり。たゞ諸隊の士、長府にありて、五刑を奉じ、正義を唱ふ。その數、千人と稱す。防長二州ひろけれども、到る處、正義形をひそめ、正義のある處は、たゞ長府のみとなれり。隊士の數、千人とは云ふもの、實は六七百人に過ぎず。而して奸黨の勢日に熾じ、正義の勢日に非なり。隊士の親戚知己のもの、萩その他より來りて利害を説き、父母兄弟妻子が憂苦の狀をのぶるに、動きてつれかへらるゝもの少からず。他藩より來れる浪士も、攘夷家は長州が外國と和を結びしを喜ばざるものあり。勤王家は奸黨の勢盛なるに失望するものあり。日を追うて離散せむとす。加之、各隊の總督もしくは之に亞ぐもの、内情ただ曖昧にして會議所の會議も歸着する所なし。御橋隊にある石川小五郎、玉木彦助、渡邊與八、田村甚之助、駒井政五郎、寺島秀之助、河北義次郎、冷泉雅次郎等、ひそかに議して曰く、諸隊今日の狀況にして久しきにわたれば、恢復の目途おぼつかなし。早く外より刺撃を興へざるべからず。我等今より各郡を經廻り、俗論家より選任したる代官を悉く

斬殺すべし。さすれば之を諸隊の所爲として、兵をさしむること必然なり。一たび兵をさしむければ、諸隊の人心團結して、賊を敗ること極めてやすからむと。

かく評議しあへる處へ、晋作九州より歸り來れり。諸士喜びむかへて、其意見をたゞく。晋作之を止めて曰く、諸隊合同するも、なほ危きに、足下等志士中の有力者が分離するに於ては、大事恐らくは成らざらむ。願くは諸隊一致に盡力せられよと。諸士此言に従ひて斬奸の事は思ひ留まりぬ。晋作、日を経るまゝに、諸隊の情狀を詳にし、その頼むに足らざるを知りて、斷然志を決し、遊撃隊の軍監高橋熊太、御橋隊の總督太田市之進に説き、日を期して馬關新地の官署を襲略せむことを約す。太田歸陣して、之を各人に告げ、彈藥兵糧等の準備を爲さしめけるに、奇兵隊をはじめ諸隊の總督等之を止む。太田心をひるがへせり。約したる日、晋作御橋隊の營に來りしが、その違約あるを察し、口に之を言はず、酒を沾ひ、肉を添へ、頻に杯を傾け、放歌暴吟、傍若無人なり。たま／＼南園隊の總督佐々木男也來る。晋作頻に之を愚弄せしが、既にして太田、品川彌次郎をして來りて今夜の擧をやめむことを説かしむ。晋作さかず。野村和作も亦來りて説いて曰く、今や正義

の士此大難に遭遇し、諸隊合同するも、なほ足らざるに、今貴下、御楯隊及び遊撃隊を率ゐて、事を馬關にあぐるは、これ勢を分ち、力をそぐものならずや。願くは今夜の擧は思ひとゞまり給へと晋作坐を改め、兩手を膝につきて曰く、君等は赤瀬武人輩に瞞着せられたるか。赤瀬今は奇兵隊の總督たるも、もと大島郡の一土民のみ。いかんぞ國家の大事、兩君公の危急を知る者ならむや。君等は余を何者と思ふか。余は毛利家三百年來の世臣なり。赤瀬のごとき一土民の比にあらず。余は決して此擧を止むること能はず。されど、君等合同してとゞむれば、余一人にて事を擧ぐることは、君等從來の交誼にめんじて、我に一匹の馬を借せ。われ之に騎りて、一里往いて斃るゝも、國家の爲につくすなり。十里往いて斃るゝも、亦毛利家の爲に盡すなりと。毛髮逆立し、目皆みな裂け、音吐厲劇、獅子の吼ゆるが如く、座壁爲に震ひ、人々悉く股慄せり。されどその夜、事終に成らず。晋作憤然として、馬關にゆき、伊藤俊輔の許に寓し、日に自暴酒飲みて、自ら慰めぬ。太田總督、髮を斷ち、之を贈りて、違約を謝せり。

かかる程に、元治元年は暮れて、慶應元年の正月は來りぬ。五卿はいよいよ九州にうつされむとす。晋作は漸く同志を説きつけて、正月二日を期して、馬關新地の官署を襲はむとす。事まづ洩る太田、之を野村和作にはかる。和作曰く、各人思ふ所あり。強ひて止むべからず。若かず、快く之を送らむにはと。共に酒魚を持して遊撃隊に至りけるに晋作大に太田を罵る。太田大醉して歸り來りて涕泣し、高杉を斬らむ、予は屠腹せむ、男子の一分たゞずなど口走れりとぞ。

二日の夜、既に半なり。晋作、五卿の旅館なる長府の功山寺にいたりて曰く、一大事あり。急に三條公に謁せむと。時に公既に寢に就きたるが、一大事と聞きて、出て、見る。晋作、身に甲冑を被り、兜を頸に約して、背に垂れ、跪伏して曰く、臣、今夜事を馬關に擧げむとす。今にして、はじめて臣の節をつくすを得たり。事の成否、臣の存亡はかり知るべからず。たゞ一日、御いとまごひに參れり。願くは國家の爲に自愛自重せられよと。言終りて、直に飛鳥の如く去りゆけり。若し公の或は留むるあらむことを恐れたるなり。翌日、公、書を晋作に贈り、男子一たび事をあぐ。必ず其終をとげよと勵まされたり。

晋作、五卿の居館より出づれば、隊兵既に列を爲せり。晋作馬に上り、將に進まむとす。大雪、

路をうづめて、乾坤一望白し。奇兵隊の軍監福田良輔之を留めむとて、馬をとばして来る。談話するに違なし。馬より下り、大雪の上に座し、疾呼して曰く、晋作、汝既に獄中の苦を忘れたるか。此舉恐らくは大事を誤り再び囚に就かむとの意なり。晋作曰く、此期に及びて、亦何をか言はむと鞭を加へて馳す。馬關にかへり來りて、直に伊崎の官舎を襲ふ。官吏かねてかゝるべしと豫知しければ、金穀は既に他にうつして、舎を空しくし、たゞ身をのがれたりき。晋作、折角馬關を略取したるも、獲る所なきには、大に失望せり。されど、晋作が奸黨を倒す策略は、こゝに於て、その緒につきたるなり。晋作おもへらく、諸隊の士、志を堅くし、益々一致すれば、爲すあるに足るも、如何せむ、因循にして、一致せず。今われ孤立して、少數の兵にて、馬關に暴舉せば、諸隊はあづかり知らざるも、奸黨は諸隊の所爲として迫り來らむ。然る時は、諸隊もこゝにはじめて志を決して一致の働をなさむと。この奇計果して功を奏しけるなり。

晋作先に世子の奥番頭となりし時、赤福武人代りて奇兵隊の總督となれり。威望頗る高し。元治の變後、通武死し、晋作獄にあり。武人は政務座に擧げられ、烏なき里の蝙蝠となりて得々たり。

既にして晋作獄を出て、諸隊に客たるに及びて、小人の常癖、其才力を忌めり。馬關の舉もつとめて之を支障せり。然るに馬關の舉いよく成るにいたりて、長三州をつれて脱走せり。三州はなかくる悔いて歸り來りしが、武人は終に捕へられて斬られたり。

さきに各郡の代官を斬りまはらむと主張せし御楯隊の有志の中にて、晋作が馬關の舉に従ひしものは、たゞ石川小五郎一人なり。元來晋作は愛憎きばめて深き人なるが、之によりて大に小五郎を愛し、擧げて遊撃隊の總督とせり。

晋作、馬關を略取したるも、金穀を得ず。失望せし折柄、月形、早川の二士、たま／＼馬關にあり。之に百金を贈れり。晋作大に喜び、中村圓太を伴ひて三田尻に赴き、藩の軍艦、癸亥艦を奪ひて馬關に回航し、隊兵をのせて海路山口に出陣す。俗論黨、毛利家の徽章のつける旗を立つ。衆之を見て、敢て撃たず。晋作の機智なる、諸士に謂つて曰く、彼等は君意を矯むるものなり。君公の眞意は却つて我にありとて、毛利家の徽章をつけたる旗を立つ。軍氣大に奮へり。

晋作、事をあげて、他の諸隊もみな起り。正月五日、山縣の諸隊、繪堂村に進み、賊をやぶれ

り。十日、川口に、十四日、呑水に、十六日、赤村に、激戦の末、十九日、全軍山口に入れり。俗論黨の萩にあるもの、大に驚き、急使を發して、變を幕府に告げ、藩主の幽を解き、令を藩内に下し、衣食を正義の諸隊に賣るを禁じ、終に國老栗谷半人兵三千を率ゐて來り討つ。晋作百卒を率ゐ夜大風雨に乘じ、襲撃して之を破り、半人を斬り、鼓譟して進む。俗論黨、新に兵を出したれど利あらず。退いて、萩を保つ。晋作進み攻めむとす。毛利元周チカ、同元純、斡旋して、和を講ず。晋作乃ち俗論黨の首謀數人を殺し、其餘を宥し、二月に至りて、事漸く平ぎ、俗論跡を絶ち、藩論はじめて一に歸するに至れり。

この舉を起ししものは、晋作なり。而していよいよ進み戦ふに方りては、晋作山口にありて諸隊を部署し、號令明肅、優に大將の器なり、嗚呼、晋作一呼して起てば、僅々二十日餘にして、俗論黨忽ち斃れつくしぬ。疾風迅雷、壯にして亦快なるかな。當時西郷、筑前にあり。早川に謂つて曰く、高杉も内輪の掃除をよくせり。かねて御話の如く、京都に上る時機となれりと。

八

高杉を平げし第一の功は、晋作にあれども、晋作は思ふ所やありけむ、權勢をさけて、政務にあづからず。馬關に至りて身を商賈に變じ、悠々自適せり。妾、うのをつれて豊饒の間に旅せしも此間の事なり。昨、千兵を指揮せし名將、今は蕭然たる野裝、愛妾の手をとりて金毘羅詣をなす。晋作のなす所、すべて人の意表に出でざるはなし。

されど、時勢は晋作のいつまでも江湖に優遊するを許さず。幕府は、再び征長の令を下せり。

幕府おもへらく、さきに尾州總督が未だ長防に入らざるに、既に恐縮して、三國老の首を刎ねて罪を謝せり。今將軍自ら征せば、長州を平ぐることに、旬日を出でざらむと。迂なるかな。曩には、卑屈なる俗論黨權をにぎりたれど、今は正義の志士路に當れり。意氣海内を呑む。何ぞ將軍を恐れむや。

第一回の征長は、その名ありき。されど、藩主罪を謝し、三國老首を傳へたるの今日、もはや征伐の名なきなり。尾州侯之を諫めたり。勝安房も之を諫めたり。みな聽かず。慶應元年四月、幕府終に天下に令して曰く、毛利父子過を悔いず、遂に非常の計ありと聞く。今將に詔を奉じ、五月十

六日を以て大擧し、之を征せむとす。沿道の諸侯、宜しく東觀の期を緩め、以て命を俟つべしと。かくて、將軍は終に江戸を發す。品川に至る。二士あり前んで曰く、毛利氏の罪、既に罰あり。今之を伐つ、實に無名の師なり。且つ今年は廟祖の二百五十回祭に當れり。請ふ之を止めよと。聽かず。二士乃ち屠腹して死せり。

將軍入朝して大阪にゆく。十一月に至りて、使を長州に遣し、長侯を召す。曰く、二十六日を經て到らずんば、問罪の師を遣はさむと。長州の諸士、藩主を山口に奉じて、衆を會して相議す。衆論紛々、一決せず。晋作聲を勵まして曰く、幕府さまに我が三國老の首を得て、なほ満足せず、今又我を撃たむとす。我等たゞ死を以て國を守るべきのみ。何の遲疑すべき所かあらむと。衆皆へて曰く、たゞ先生の言のまゝにせむと。是に於て藩議ますます固し。

翌慶應二年五月一日、幕府小笠原長行をして、旨を傳へしめて曰く、汝の藩を處するに、三事を以てす。封十萬石を削る、一なり。慶親父子を終身の禁錮に處し、嫡孫興丸に家を襲がしむ、二なり。三家老の家を絶つ、三なりと。是に於て、長藩いよく激昂して、戦志いよく固し。わざと

返答の期をおくらす。幕府待つこと三十日に及べども、返答なかりければ、六日終に師を發せり。

長州を攻めし軍は、すべて四軍なり。一軍は藝州よりし、二軍は石州よりし、三軍は豊前よりし、四軍は海軍にて大島を砲撃す。

長州方にては、太田市之進、石川小五郎等、藝州に向ひ、小瀬川に戦つて幕軍を破り、進んで四十八坂の險に據り、大霧に乗じて、幕兵を襲ひ、互に勝敗あり。終に全く之を破れり。

井上聞多、大村益次郎等、石州口に向ひ、迂路を取りて、幕軍の後に出て、討つて之を破り、終に監軍三枝刑部を殺す。濱田城主松平武聰、城を棄て、雲州に去れり。

三軍四軍の方面は、最も難局なるが、晋作之に當れり。六日、幕兵周防の大島郡を襲ひて、戦端まづ開けたり。其報馬關に達するや、晋作直に丙寅艦に乗り、十二日夜進んで幕軍を大島に襲撃す。晋作、艦首に立ち、眼を睨らし、叱咤して、敵艦の間に蔭入し、縦横馳突、回轉意の如く、傍、人なきが如し。幕船驚き、殆んど抗戦する能はず。晋作追窮せずして、馬關にかへれり。幕艦追はむとせしが、これ薩艦の來りて長を援ひ、我を誘ひ出さんとするならむとて、止めたりき。

十六日、晋作、兵艦三艘を率ゐて、田の浦を砲撃す。砲臺の守將、島村志津馬、よくふせぎ、大砲を發して、長の一艦をくつがへす。晋作怒り、勇兵四百を小舟にのせ、岸に上りて突進せしむ。長艦海にありて之を助く。小倉の將安志内記を擒にし、民家を焼く。小笠原の兵千餘人、幕兵百餘人、拒ぎ戦ひ、辰より申に及びけるが、長軍終に田の浦の營を焼き、糧器を奪うて退けり。

翌日、晋作、兵を進め、田の浦より門司の浦に至り、その砲臺を襲うて、守將小山左近を殺し、進んで大里浦の營を撃つ。守將小笠原長行、砲を發して之を拒ぐ。晋作、艦兵三百人を帥み、丸を冒して、大里に至り、山にのぼりて挾撃して、終に長行を走らせり。

幕府は陸上に戦ふの非なるを知りて、軍艦を發して、小倉の近海に出沒せしむ。これ長軍の大に苦しむ所なり。幸にも奇傑坂本龍馬、薩艦を率ゐて來り援ふ。晋作之に海の方面を托せり。龍馬よく指揮して、幕艦をなやまし、長兵爲に勢を得たり。八月一日、晋作進んで小倉城を攻めて、之を拔く。城中の將小川彈正自殺し、城主小笠原忠幹は奔れり。

かく幕府は天下の兵を擁して四境より長州に逼りたれど、長兵各道みなよく拒ぎて、常に幕兵を

破れり。豊前の東端より安藝の西端まで四十里の間の軍事は、晋作之を主宰し、機を制し、變に應じ、從容自若として、晋作二國を泰山の安きに置けり。小倉をうちし時は、晋作烏帽子を戴き、直垂を着し、胡床に踞して將士を指揮し、威風凜然として一大諸侯の如し。されど、足立山に戦ひたる時は、戎服をつけずして、浴衣のまゝにて、扇を手にして涼を取れり。人間うて曰く、何ぞ軍装せざるやと。晋作笑うて曰く、弱兵を破るには、これにて十分なりと。

小倉を攻むるの間、晋作馬關にありて、連日連飲、妓に戯る。部下の士卒、いらだちて、開戦をせまるもきかず。小笠原の兵、遙に對岸の門司大里より戦をいどむも、なほ應ぜず。部下いよく激昂し、今一應迫りて、きかずんば、高杉を斥けむとまで言ひあふに至るも、晋作なほ平氣にて、酒のみ妓に戯れしが、日暮忽ち起つて、進軍の令を發す。はやりにはやり、勇みに勇める長兵、寡を以て衆を壓し、奇捷を奏するを得たりき。

余は、石州口、藝州口の戦を詳記するに遠あらず。たゞ馬關方面の戦争を記するを以て足れりとせむ。この方面の總大將は、高杉晋作なれども、客將となり、參謀となりて、一臂の力を添へたるも

のは、實に坂本龍馬なり。龍馬は、薩長の間を奔走して、二藩をして聯合せしめたる人なれども、また長の海軍の爲に重きをなせり。單に口舌の雄たるのみにあらざるなり。

各方面の幕軍、みな敗れて、もてあまししが、八月二十日、將軍大阪城に病死せり。ついて立ちたる十五代の將軍慶喜は、もと勤王の志あるもの、命じて征長の軍をかへせり。

要するに、長州征伐は、幕府の威勢をおとし、勤王諸藩の氣焰を高むるの外、何等の得る所もなかりき。

九

幕軍去りて、長州の國難解けてより間もなく晋作病にかゝれり。其病は肺病なりと云ひ、又花柳病なりとも云ふ。嗚呼この夏、難局面の總大將となりて、三軍を叱咤せし豪傑、冬は忽ち一室に呻吟する病夫となりぬ。こゝに於て、平生好める酒をも斷ちけるが、命數終に盡きたりけむ。翌慶應三年四月十四日、終に起たず。年わづかに二十九。百萬の軍を破る名將も、病にはから得ざるこそ是非なけれ。その病めるや、藩主日々之を問へり。長人之が爲に神に乞ふ者數萬人に及べり。嗚

呼、天まさに長州の俗論黨を倒し、長州をして幕軍を破らしめむが爲に、此豪傑を地に下したるか短き一生の間、何ぞ苦しましむることのみ多かりしや。死後、わづかに數月にして君が宿志たりし王政維新の業成れり。地下の英靈之を知るや、否や。維新の後、二十年、久坂、入江の諸士と同じく正四位を贈られたり。君の英靈之を知るや、否や。長州厚狹郡吉田村は、君がはじめて編制せし奇兵隊の屯せし處、そこに君の遺骨は葬られたり。墓側に草庵を結びて、朝夕香華を手向くる佳人あり。花の盛の身を墨染の衣につみ、みどりの黒髪を削り落したれども、明眸皓齒、なほ當年の儂を留め、英雄の墓畔、一種の光彩を添へしは、これ君の愛妾なり。清行三十年、一日の如し。死してなほ艶福ありしかな。

十

長州の人傑は、高杉、木戸の二人なり。山縣、伊藤、井上、品川輩はあづからざるなり。中間の言へる如く高杉は奇才なり。天才者なり。つくらむとして作る能はず、學ばむとして學ぶ能はず。百代はじめて見るの人傑なり。氣を以て勝ち、情に熱す。氣宇豪爽、磊落不羈にして、機智人の意

表に出づ。眞に絶代の快男子なるかな。たゞそれ情熱の士なり。自ら克つ能はざるもの、亦止むを得ず、酒色度なかりしなり。たゞそれ勝ち氣なり、一日黙座する能はず。二たび脱藩せしも、少年血氣とのみけなすべからざるなり。されど、また雅致あり。到る處、茶器を携へて、閑に苦茗をすゝりて樂しみ、陣中戈を横へて詩を賦せり。木戸とは大に異なれり。軒輊し易からず。薩と聯合し維新後、廟堂に立ちて計略することは、本戸むしろ適任ならむ。されど俗論黨を斃すには、高杉なかるべからず。幕軍と戦ふには、高杉なかるべからず。要するに、高杉の一身すべてこれ氣なり。才なり。膽なり。英姿颯爽、人心を快くす。余は西郷よりも、木戸よりも、寧ろ高杉の如き人を愛するなり。

晋作は、あまりに豪放なり。過激なり。天香空に行く、飄すべからず。晋作をして明治以後にあらしめば、無論征韓論を唱へしならむ。而して西郷と呼應せば、面白き活劇起りしならむ。到底晋作は、長く生存して、無事に壘の上に死すべき人にあらず。亂麻の如き世の中に、二十九歳の命をたもちしは、晋作にとりては意外の事なり。つらく維新前の志士を見るに、あまりに非凡にして

あまりに正義にして、あまりに思ひ切つて事をなしたる人傑は、大抵非命に死せり。而して所謂元勳の名を得たるものは、大抵第二流以下の人物にて、お上手に世の中をわたり來れるものなり。土佐の武市、坂本、中岡、長の久坂、入江、來島など、いづれも非命を免れず。その他なほ頗る多しされど、長く生存して、浮世の盛榮を食るとも、何かせむ。丈夫たゞ爲したきを爲し、天分をつくして、天地の間に活動して死せば、また何ぞ思ひのこす事あらむ。業成らざるも可なり。早世するも可なり。春風先生の英靈、たゞ靜に地下に眠れ。余や先生を欽慕して措かず。されど、恥づらくは、鈍筆終に先生を躍動せしむる能はず。先生や、たゞ仰ぐべし。就いて學ぶべからず。止んぬるかな。余や先生と時を異にして生れたり。今の世、終に先生の如き人を求むべからざるか。もし先生の如き人あらば、余は謹んで跪いて其履を執らむとす。

鳥羽伏見の戦

薩長は、天子を擁して、京師に在り。徳川慶喜は、大阪にあり。慶喜、將軍の職を辭したるもな

ほ三萬の大軍を擁せり。而して薩長等の兵は、わづかに三千に過ぎず。その實際の首領、西郷隆盛は、干戈を以てするにあらずんば、事實上、徳川三百年の天下を奪ふ能はずとて、慶喜を袖にして之を激せしめむとし、慶喜は、果して激して朝廷の事、聖意に出てたるにあらずして、全く薩長の私意にのみ出づるものとなして、相嫉視し、風雲いよく急にして、殺氣紛々たる京畿の天地に、明治元年の春は来りぬ。幕兵攻め来らむとは、薩長の素より期する所なり。鳥羽と伏見とは、要路に當るを以て、主として、之を固めたるが、なほ西園寺公望をして精兵三百を率ゐて丹波口を守らしめ、橋本實梁、柳原前光をして大津口を守らしめたり。慶喜終に討薩の意を以て、勅命により上京するを名として、兵を發す。松平豊前守を先陣の大將に、竹中丹波守を指揮役に、會津侯、桑名侯を兩先鋒とし、姫路侯、高松侯、松山侯、大垣侯、濱田侯、忍侯、長岡侯を始とし、一族譜代の大小名を後詰とし、慶喜は、澁川、久保田等の親兵、歩砲諸隊を率ゐて、中陣にあるといふ部署なり。その總勢三萬、外形は實に堂々たれども實は節制なく、將帥其人なき烏合の衆なり。薩長等の兵は、その十一に過ぎざるも、すべて、これ精銳なり。一以て十に當ること、必ずしも難からず。

さるにても、薩長は、十倍せる大軍に當りて天下を賭せむとす。大膽不敵なるかな。

幕軍は、藤堂和泉守の津藩の兵をして、先づ高槻街道にある山崎の關門を守らしめて、官軍のこの方面に出づるに備へ、軍を二つにして、鳥羽伏見二道より進む。實に明治元年正月三日なり。幕軍の先鋒、鳥羽の關門に至る。官軍の守るもの拒んで通ぜず。幕兵、衆を恃んで氣驕れるまゝに、さらば、打ち破へて通らむと、銃に彈丸をこめて猛進す。官軍止むを得ず、砲を發して之を拒ぐ。幕兵應戦せしが、官軍の勢當るべからず。幕兵敗走す。かくて、日暮れたり。官軍の諜者報じて曰く、幕兵、今尙下鳥羽にありて、甲を仰して食事中なりと。官軍乃ち夜に乗じて進撃す。幕軍狼狽して、輜重を棄て、走りぬ。伏見方面には、會津の林隊、先鋒となりて進みしが、こゝにも官軍拒んで通さざるを以て、同じく兵力に訴へしが、やぶれて、大半、淀に歸れり。

明くれば、四日なり。朝廷にては、嘉彰親王を總督とし、徳川追討の令を公布せり。是に於て、慶喜は、朝敵なり。鳥羽方面には、夜あけぬ程より戦はじまりて、官軍危かりしが、總督錦旗を繰して進むに會し、勢また振ひ、幕兵終に潰亂せり。されど、新手の白井隊、來りすくひ、殊死して